

国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第2冊

東坂元三ノ池遺跡

2008.10

香川県教育委員会



東坂元三ノ池遺跡より飯野山東裾を望む



IV・V区 波板状圧痕 (北より)



VII区 全景（東より）



251

249

VII区埋納遺構（SP17・78）出土の須恵器



VII区 埋納遺構 SP78（北より）

序 文

東坂元三ノ池遺跡は、香川県丸亀市飯山町東坂元字三ノ池に所在する遺跡です。国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴って、平成15年度と平成16年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センター及び、香川県埋蔵文化財センターによって発掘調査を行いました。

その結果、旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を確認しました。中でも古代の集落跡や大規模な灌漑用水路跡を検出したことは、地域開発の様相を考える上で貴重な資料となりました。

出土品の整理作業は、香川県埋蔵文化財センターにおいて平成19年12月から4か月の期間で実施し、ここに「国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊 東坂元三ノ池遺跡」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告に至るまでの間、香川県土木部道路課をはじめ、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成20年10月

香川県埋蔵文化財センター

所長 大山眞充

例　　言

1. 本報告書は、国道438号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第2冊で、香川県丸亀市飯山町東坂元に所在する東坂元三ノ池遺跡（ひがしさかもとさんのいけいせき）の報告を収録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が香川県土木部からの依頼を受けて、香川県教育委員会が調査主体となり、平成15年度に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが、平成16年度には香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、第1次調査を平成15年10月1日から平成16年3月31日、第2次調査を平成16年8月1日から9月30日まで実施した。各調査の担当は以下のとおりである。
第1次調査　西村尋文　細川健一　飯間俊行
第2次調査　長井博志　宮武直人
4. 調査に当たって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県土木部道路課、香川県中讃土木事務所、飯山町教育委員会（当時）、地元自治会、地元水利組合
5. 報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は下記のとおり分担した。
第1章第1節、第2節　　細川
その他　　長井
6. 本報告書で用いる方位の北は、日本測地系による第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。
また、遺構は下記の略号により表示している。
SA 桁列跡　SB 掘立柱建物跡　SD 溝状遺構　SK 土坑
SP 柱穴跡　SR 自然河川跡　SX 不明遺構
7. 本報告書で用いる遺構名は、発掘調査時の名称をそのまま使用している。平成15年度の概要報告（平成15年度 年報2005）とは異なる。
8. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関に鑑定を依頼した。
獣骨鑑定　岡山理科大学　富岡直人
9. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。
10. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分及び輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、調査時の折損は黒く塗りつぶしている。
11. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 1993年度版』による。

参考文献

香川県埋蔵文化財センター「東坂元三ノ池遺跡」「香川県埋蔵文化財センター年報 平成15年度」(2005)

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	3
第3章 発掘調査の成果	
第1節 概要	6
第2節 土層	9
第3節 遺構と遺物	17
第4章 自然科学的分析	81
第5章 まとめ	
遺構の変遷	82

挿図目次

第 1 図	遺跡位置 (1/800,000)	1
第 2 図	周辺遺跡位置図 (1/25,000)	4
第 3 図	遺跡位置図 (1/3,000)	5
第 4 図	遺跡位置図 (1/2,000)	6
第 5 図	遺跡配置図 (1/500)	7
第 6 図	I 区土層図 (1/80)	10
第 7 図	II・III区土層図 (1/80)	11
第 8 図	IV・V・VI区土層図 (1/80)	13
第 9 図	VII・唯区土層図 (1/80)	15
第 10 図	I 区全体図 (1/200)	17
第 11 図	I 区 SK01・04・SX01・03・SD01 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)	19
第 12 図	II・III区全体図 (1/200)	20
第 13 図	II区 SA01 (1/60)	21
第 14 図	II区 SD04・05・08・09・25 平・断面図 (1/40)	22
第 15 図	II区 SD06・08・16 断面図 (1/40)	24
第 16 図	II・III区 SD04・08・10出土遺物 (1/4)	25
第 17 図	II・III区 SD17 ~ 20・22 ~ 24 断面図 (1/40)	26
第 18 図	II・III区 SD16・18・23出土遺物 (1/4・1/2)	26
第 19 図	II・III区 SX04 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	27
第 20 図	II・III区 SD03 断面図 (1/40)、 出土遺物① (1/4)	28
第 21 図	II・III区 SD03 出土遺物② (1/4・1/2)	29
第 22 図	II・III区 SD21・SP22・SX05・06・08 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)	30
第 23 図	II・III区 包含層出土遺物① (1/4・1/2)	31
第 24 図	II・III区 包含層出土遺物② (1/2)	32
第 25 図	II・III区 包含層出土遺物③ (1/2)	33
第 26 図	II・III区 包含層出土遺物④ (1/2)	34
第 27 図	IV・V区 全体図 (1/200)	34
第 28 図	IV・V区 SA01 平・断面図 (1/60)	35
第 29 図	IV・V区 SB01 平・断面図 (1/60)、 出土遺物 (1/4)	36
第 30 図	IV・V区 SB02 平・断面図 (1/60)	37
第 31 図	IV・V区 SB03 平・断面図 (1/60)	37
第 32 図	IV・V区 SD28 ~ 31・33 ~ 47 断面図 (1/40)	39
第 33 図	IV・V区 SD39・42・45・46・47 出土遺物 (1/4・1/2)	41
第 34 図	IV・V区 SK12・14・15 ~ 17・41 平・断面図 (1/40)	42
第 35 図	IV・V区 滑板状E痕平・断面図 (1/40)	44
第 36 図	IV・V区 SK22 ~ 44 出土遺物 (1/4・1/2)	46
第 37 図	IV・V区 SD30・38・SK18 平・ 断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)	47
第 38 図	IV・V区 包含層出土遺物 (1/4・1/2)	48
第 39 図	VII区 全体図 (1/200)	49
第 40 図	VII区 SA01 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	50
第 41 図	VII区 SB01 平・断面図 (1/80)、 出土遺物 (1/4)	50
第 42 図	VII区 SB02 平・断面図 (1/80)、 出土遺物 (1/4)	51
第 43 図	VII区 SB03 平・断面図 (1/80)、 出土遺物 (1/4)	52
第 44 図	VII区 SB04 平・断面図 (1/80)	53
第 45 図	VII区 SD01 ~ 04・47 断面図 (1/40)	54
第 46 図	VII区 SD01 ~ 05・47 出土遺物 (1/4)	55
第 47 図	VII区 SK01 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	56
第 48 図	VII区 SK02 平・断面図 (1/30)、 出土遺物① (1/4)	58
第 49 図	VII区 SK02 出土遺物② (1/4)	59
第 50 図	VII区 SK03 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	60
第 51 図	VII区 SK04・13 平・断面図 (1/20)	60
第 52 図	VII区 SP03・22・25・28・31・32 出土遺物 (1/4)	61
第 53 図	VII区 全体図 (1/200)	62
第 54 図	VII区 SA01 平・断面図 (1/60)	63
第 55 図	VII区 SA01 出土遺物 (1/4)	63
第 56 図	VII区 SB01 平・断面図 (1/60)、 出土遺物 (1/4)	64
第 57 図	VII区 SB02 平・断面図 (1/60)	65
第 58 図	VII区 SB03 平・断面図 (1/60)	66
第 59 図	VII区 SB04 平・断面図 (1/60)	67
第 60 図	VII区 SB05 平・断面図 (1/60)	68
第 61 図	VII区 SB06・SK02 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	69
第 62 図	VII区 SD02・04・09・11 断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4・1/2)	70
第 63 図	VII区 SKS02・SP02・11・22・23・32・SK01 出土遺物 (1/4)	70
第 64 国	VII区 包含層出土遺物① (1/4・1/2)	71
第 65 国	VII区 包含層出土遺物② (1/2)	72
第 66 国	VII区 全体図 (1/200)	73
第 67 国	VII区 SD14 ~ 17・21 断面図 (1/40)	75
第 68 国	VII区 SD14 出土遺物 (1/4・1/2)	76
第 69 国	VII区 出土遺物 (1/4・1/2)	77
第 70 国	VII区 SK03 平・断面図 (1/20)	77
第 71 国	VII区 SP04 出土遺物 (1/4)	77
第 72 国	VII区 SR01 断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4・1/2・1/5)	78
第 73 国	VII区 SX09 平・断面図 (1/40)、 出土遺物 (1/4)	79
第 74 国	VII区 包含層出土遺物 (1/4・1/2)	80
第 75 国	遺変遷古代～中世 (1/500)	85

表 目 次

第1表 波板状圧痕計測表 43

第2表 骨骨盤定表 82

図版目次

卷頭図版 1	東坂元三ノ池遺跡より飯野山東裾を望む	VI区 SB03 全景（北より）
	IV・V区 波板状圧痕（北より）	VI区 SB04 全景（南より）
卷頭図版 2	VII区 全景（東より）	VI区 北東部全景（北より）
	VII区攝納遺構（SP17・78）出土の須恵器	VI区 SK01～03 遺物出土状況（南より）
	VII区 摂納遺構 SP78（北より）	VI区 SK01 遺物出土状況（南より）
図版 1	遺跡全景（東より）	VI区 SK02 遺物出土状況（南より）
	遺跡全景（南より）	VI区 SK04 遺物出土状況（北より）
図版 2	I区全景（南より）	VI区 SP22 遺物出土状況（南より）
	I区 SK04 土層断面（西より）	VI区全景（南より）
	I区 SX03 土層断面（西より）	VII区全景（東より）
図版 3	II・III区全景（北より）	VII区 SB06、SK02、SP17・78 検出状況（南より）
	II・III区全景（南より）	VII区 SK02 土層断面（南より）
図版 4	II・III区東部全景（南より）	VII区 SK02 上層断面（東より）
	II・III区観察検出状況（南より）	VI区 SK02 跛床断ち割り状況（東より）
図版 5	II・III区東部全景（南より）	VI区 SP17 遺物出土状況（東より）
	II区 SD05 土層断面（西より）	VI区 SP78 遺物出土状況（北より）
	II区 SD08 - a' 土層断面（南より）	VII区 東壁土層断面（西より）
	II区 SD10 土層断面（東より）	VII区全景（南より）
	II区 SD10・16 土層断面（北より）	VII区 SD14・15 検出状況（南東より）
図版 6	II区東壁土層断面（北西より）	VII区 SD14 土層断面（西より）
	II区東壁土層断面（西より）	VII区 SK03 土層断面（南より）
図版 7	IV・V区全景（北より）	VII区 SR01 土層断面（東より）
	IV・V区 SB01 全景（北より）	VII区 SR03 土層断面（南東より）
図版 8	IV・V区波板状圧痕検出状況（北より）	出土遺物（4・9・10・12・13・22）
	IV・V区波板状圧痕検出状況（南より）	出土遺物（25・33・34・40・52・53）
図版 9	IV・V区波板状圧痕全景（北西より）	出土遺物（63・70・71・82・84・85・96・98・110）
	IV・V区波板状圧痕検出状況（北より）	出土遺物（113・132・159・180・181）
図版 10	IV・V区 SK25・26 土層断面（東より）	出土遺物（206・231・236・250）
	IV・V区 SK30 土層断面（北より）	出土遺物（249・250・251・260・266・297）
図版 11	VII区全景（南より）	
	VII区全景（北より）	

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

国道438号は、香川県坂出市と徳島県徳島市を結ぶ中讃地域の主要幹線道路である。近年の交通量の増加により生じた慢性的な渋滞の緩和や交通事故の減少等を目的として、香川県土木部道路課（以下では、道路課と略称）では、同路線の改修工事を計画した。これを受け香川県教育委員会では、同路線の周辺には多数の埋蔵文化財包蔵地が所在しているため、平成5年度から道路課と協議を進め、その適切な保護を図ってきた。

そこで、今回の調査地の付近においても中世の集落跡や古墳群等が周知されていることや、当該地の地形等が考慮されたため、埋蔵文化財の有無を確認するために、平成13年8月と平成14年4月に試掘調査を実施した。その結果、当該地において古代～中世の遺構・遺物が確認され、同時期の集落跡の存在が予想された。この結果に基づき、3,000m²の範囲について文化財保護法に基づく適切な保護措置を講ずる必要があると判断した。このため香川県教育委員会と道路課が協議を行い、この範囲について発掘調査を実施することで合意した。

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成15年度（1次調査）と平成16年度（2次調査）に、香川県教育委員会が調査主体となり、平成15年度は財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが、平成16年度は香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。調査期間は、1次調査が平成15年10月1日から平成16年3月31日まで、2次調査が平成16年8月1日から平成16年9月30日までである。調査地は調査工程に従い、



第1図 遺跡位置 (1/800,000)

第4図のようにI区からVII区までを設定した。

第3節 整理作業の経過

出土品の整理作業は、平成19年12月1日から平成20年3月31日までの4か月間で実施した。

作業は、出土品の多数を占める古代の土師器・須恵器の図化を中心として、原稿執筆、遺物復元、実測遺物抽出、遺物実測、遺構・遺物図面トレース、遺物写真撮影、台帳整理、収納の順序で進行した。

第4節 発掘調査及び整理作業の体制

平成15・16年度の発掘調査及び平成19年度の整理作業の体制は以下のとおりである。

平成15年度(1次調査)			(財)香川県埋蔵文化財調査センター				
文化行政課	総括	所長	中村	仁			
課長	北原	和利	次長	渡部	明夫		
課長補佐	森岡	修	総務係	副主幹	野保	昌弘	
総務・文化	主任	香川	浩章	係長	多田	敏弘	
グループ	主任	須崎	陽子	調査係	主任文化財	西村	尋文
主事	八木	秀憲		専門員			
文化財	副主幹	大山	眞充	主任技師	細川	健一	
グループ	主任	片桐	孝浩	調査技術員	飯間	俊行	
文化財専門員	佐藤	竜馬					
主任技師	松本	和彦					
平成16年度(2次調査)			香川県埋蔵文化財センター				
文化行政課	総括	所長	中村	仁			
課長	北原	和利	次長	渡部	明夫		
課長補佐	森岡	修	総務課	課長	野保	昌弘	
総務・文化	主任	香川	浩章	係長	松崎	日出穂	
グループ	主任	堀本	由紀	主任	塩崎	かおり	
主任主事	八木	秀憲	調査課	課長	藤好	史郎	
文化財	課長補佐	大山	眞充	主任技師	長井	博志	
グループ	主任	山下	平重	主任技師	新谷	政徳	
文化財専門員	松本	和彦	調査技術員	宮武	直人		
平成19年度(整理)			香川県埋蔵文化財センター				
文化行政課	総括	所長	渡部	明夫			
課長	鈴木	健司	次長	廣瀬	常雄		
課長補佐	武井	壽紀	総務課	課長	野口	孝一	
総務	副主幹	古田	泉	主任	宮田	久美子	
グループ	主任	林	照代	主任	嶋田	和司	

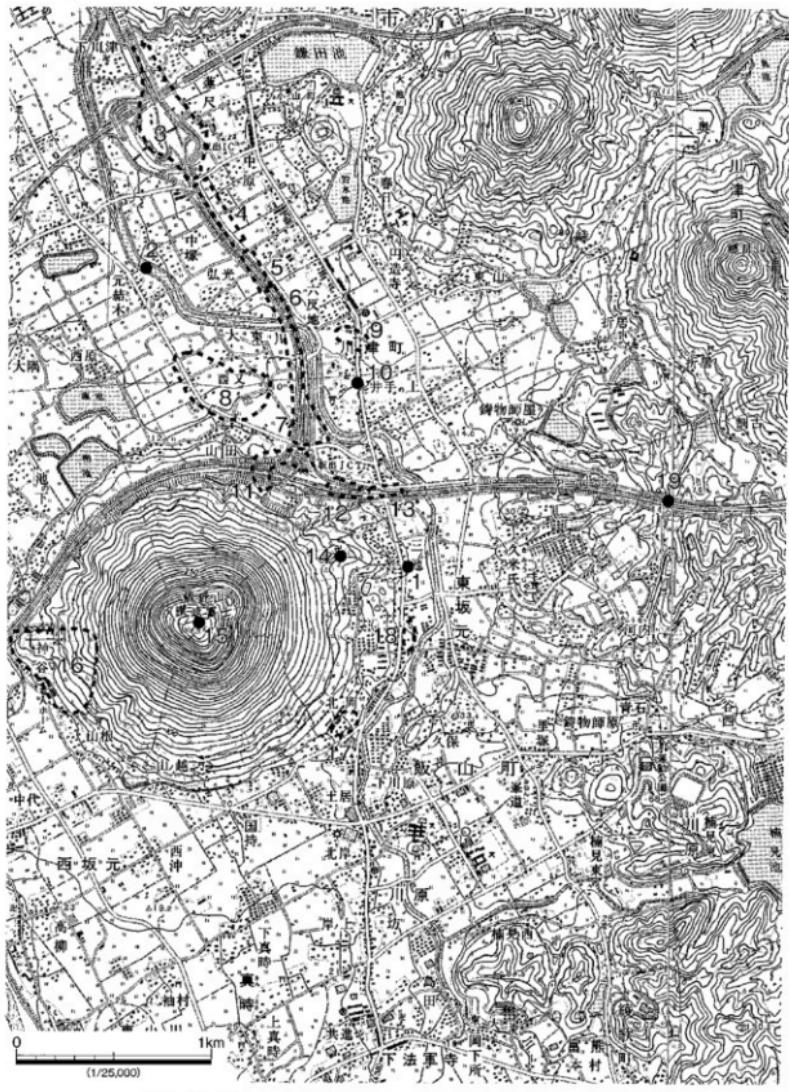
文化財	課長補佐	藤好 史郎	主 任	古市 和子
グループ	文化財専門員	森 格也	資料普及課 課 長	廣瀬 常雄（兼務）
	文化財専門員	信里 芳紀	文化財専門員	長井 博志
			嘱 託	葛西 薫
				加藤 恵子
				川井 佐織
				北濱 敦子
				工藤 勇太

第2章 遺跡の立地と環境

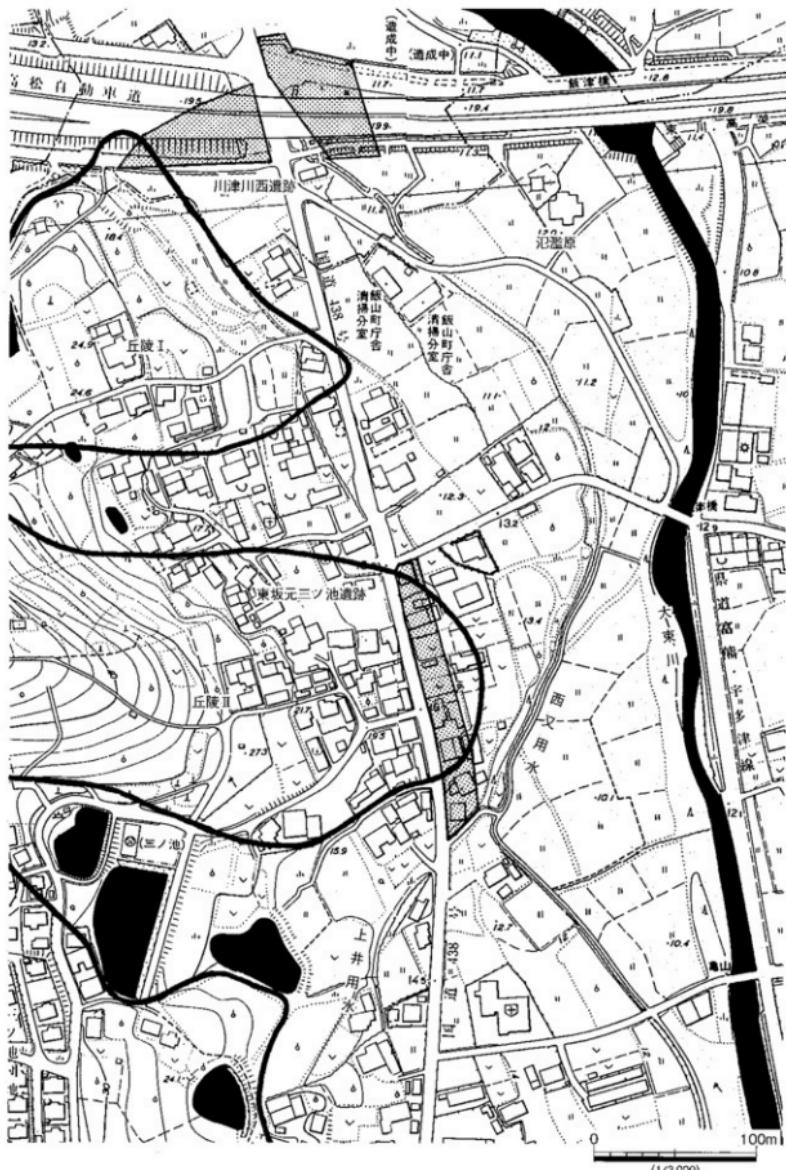
東坂元三ノ池遺跡は、丸亀市飯山町東坂元三ノ池に所在し、丸亀平野北東部、大東川下流域の西岸に位置する。遺跡の西方には飯野山（標高 421.9 m）が、東方には城山（標高 462.3 m）が所在する。また、遺跡の東方を北流する大東川が、飯野山と城山との間に挟まれた平地部の中央部を蛇行する。

遺跡の立地について第2図によって説明する。遺跡周辺において大東川両岸は河岸段丘地形を呈しており、古代末頃の形成が想定される比高1m前後の段丘崖が形成され、氾濫原に相当する低地が展開する。一方、遺跡西方の飯野山東麓には丘陵Ⅰ・Ⅱが形成されており、いずれも標高は15～30mを測る。このうち、丘陵Ⅰの東方に所在する川津川西遺跡では、古代から中世にかけての集落の存在が確認された。東坂元三ノ池遺跡は、丘陵Ⅱの先端部分の斜面部を南北方向に縱断する位置に立地する。

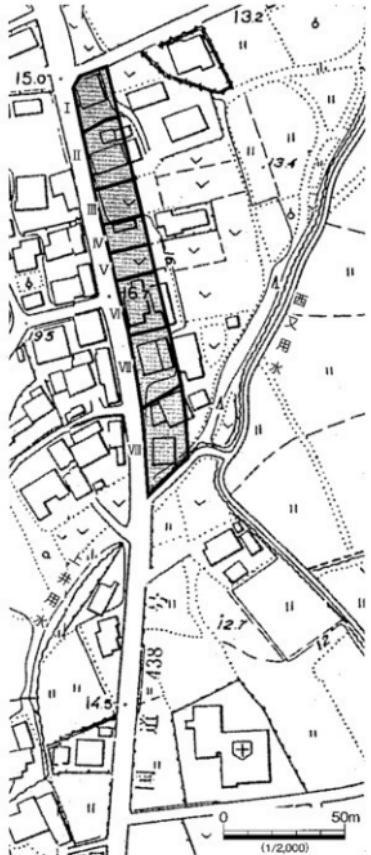
次に遺跡周辺の歴史的環境について概観する。旧石器時代の遺跡分布は、城山や飯野山裾部の低丘陵部が中心となる。近年では川津東山田遺跡において石器がまとまって出土している。縄文時代については、後・晩期の遺物が下川津遺跡等の多くの遺跡で出土しているが、当時の集落跡については明確ではない。弥生時代になると、大東川下流域における集落の展開は、時期による消長はあるものの、顯在化の傾向が見られるようになる。特に、後期に入ると集落は増加・拡大し、後期後半から終末期にかけては、下川津遺跡、川津一ノ又遺跡等の拠点的な大集落も出現する。古墳は、前期では小規模の前方後円墳である三ノ池古墳（全長約35m）が飯野山東斜面に所在する他、中期・後期のものも城山や飯野山裾部に多く分布する。当時の集落跡については大東川下流域の多くの遺跡で確認されており、例えば下川津遺跡で検出された大型建物群は、有力階層の居館である可能性も指摘されている。古代における本遺跡の周辺地域は、律令制下では旧鶴足郡に当たる。丸亀平野には条里地割が比較的良好に遺存しており、飯山町においても上法軍寺・下法軍寺・川原・西坂元の各地区で確認できるが、本遺跡の所在する東坂元地区は条里地割の遺存状態は良好とは言えない。また、当該期における大東川流域での集落の様相については、下川津遺跡以外においてはあまり明確とは言えないのが現状である。



第2図 周辺遺跡位置図 (1/25,000)



第3図 遺跡位置図 (1/3,000)



第4図 遺跡位置図 (1/2,000)

第3章 発掘調査の成果

第1節 概要 (第4・5図)

遺跡は、丘陵先端部を南北方向に縦断する位置に所在する。調査地は調査工程に従い、第4図のようにI区からVII区までを設定した。調査地の南北方向への地形と調査区の対応関係については次のとおり3つに大別できる(①丘陵の北斜面部。I~V区が該当。②丘陵頂部。VI区が該当。③丘陵の南斜面部からこれに続く低地部。VII・VIII区が該当)。また、東西方向への地形はいずれも東へ下る緩斜面である。ただし、造構面レベルについてどの調査区においても東半部だけが東へ緩く下り、西半部は平坦である。これは西半部が中世以降に著しい削平を受けたことによる。

主な調査成果は、9~11世紀代の集落跡において13棟の掘立柱建物跡やこれに伴う地鎮造構を検出したことと、同時期に属する波板状压痕や大型灌漑用水路を確認したことがある。また、他の時期の造構・遺物としては中世の土坑や溝状造構の他、旧石器や弥生土器等がある。

このように古代と中世という2時期の造構を検出したが、埋土はどちらも灰褐色系粘質土である。ただ、前者はやや暗灰色系であるのに対し、後者は赤みを帯びた灰白色系であり色調で区分できる。

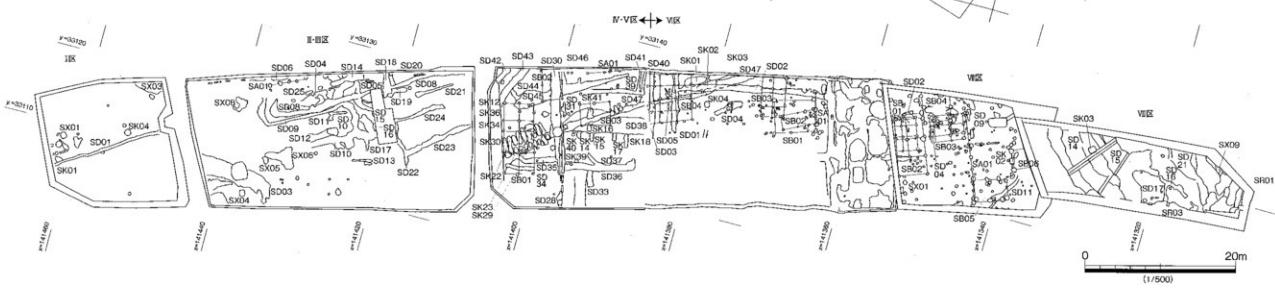
また前者の主軸方向は、下記のとおりA、B群に大別できる(A群はさらに2つの小群に細分可能)。時期的にはA群が9世紀後半~10世紀前半、B群が10世紀前半~11世紀前半である。だが、両者が重複する10世紀前半階で、A群の造構が埋め戻された状況は見られない。このため当該期には2つの主軸方向をとる造構が混在しつつ、徐々にB群へ統一されたと考えられる。

A群①(N-26~38°-W): II・III区の古代に属するほぼ全てのSD、IV~VI区 SD47、VI区 SK01~03等

A群②(N-20~25°-W): VI区 SB02、VII区 SA・SB等

B群(N-12~17°-W): IV~VI区 SBの多数、IV・V区 SD35・36、VI区 SD01・02等

なお、A群が①、②の小群に細別できるのはそれぞれに属する造構が、北緩斜面と南緩斜面という別々の緩斜面に所在し、異なる旧地形に規制されながらも同方向を志向した結果と考えられる。



第5図 遺構配置図 (1/500)

第2節 土層（第6～9図）

調査地は南北方向に細長く、また先述のとおり東部では旧地形が残存している。よって、主に調査区東壁土層図を用いて土層序を説明する。基本層序はどの調査区においても概ね上から耕作土、床土、古代～中世前半に堆積した包含層を経て、主要な遺構面のベース土である黄褐色系粘土に至る。

〈I区〉

調査前には宅地として利用されていた。地形的には丘陵北斜面の下端部に位置し、中世の土坑や近世の溝状遺構等を検出した。土層については地形的に下る北部において、床土直下で灰褐色系砂質土（I区北壁土層断面II①～④層）を検出した。これらの堆積土はII区以南の包含層と類似するものの、土器は含んでいない。

〈II・III区〉

調査前にはII区が宅地、III区が畑として利用されていた。地形的には丘陵北斜面の下端部寄りに位置し、古代と中世の溝状遺構等を検出した。土層については、北東部で厚さ約0.6mを測る包含層（古代～中世前半に堆積）を検出した。また、II区北壁土層断面では16世紀代に位置付けられるII・III区SD03がこれを切り込んで掘削されている状況を観察できる。

〈IV区・V区〉

調査前にはIV区が宅地、V区が畑として利用されていた。地形的には丘陵北斜面の頂部寄りに位置し、古代の掘立柱建物跡や波板状压痕、中世の溝状遺構等を検出した。土層についてはII・III区東壁土層断面で薄く堆積する包含層を確認した。遺構の掘り込み面と包含層の関係であるが、SD42・43(10世紀前半)のように包含層直下に堆積する黄褐色粘土（III②層）を掘り込み面とする遺構だけでなく、SD45(10世紀前半)のように包含層（II⑪層）を掘り込み面とし、その埋没後に別の包含層（II⑫層）が堆積するものもある。このように古代の遺構にも包含層の堆積途上で掘削されたものが存在する。

〈VI区〉

調査前には宅地として利用されていた。地形的には丘陵頂部に位置する。遺構面は調査区のほぼ全面にわたって近年の宅地造成土直下で確認されたが、削平を受けている。特に南部は宅地基礎等により著しい擾乱を受けており、遺構面がほとんど失われていた。だが、北東部では古代の掘立柱建物跡や廃棄土坑、中世の溝状遺構等を検出した。土層については調査区東端際の狭い範囲で薄く堆積する包含層を確認した。

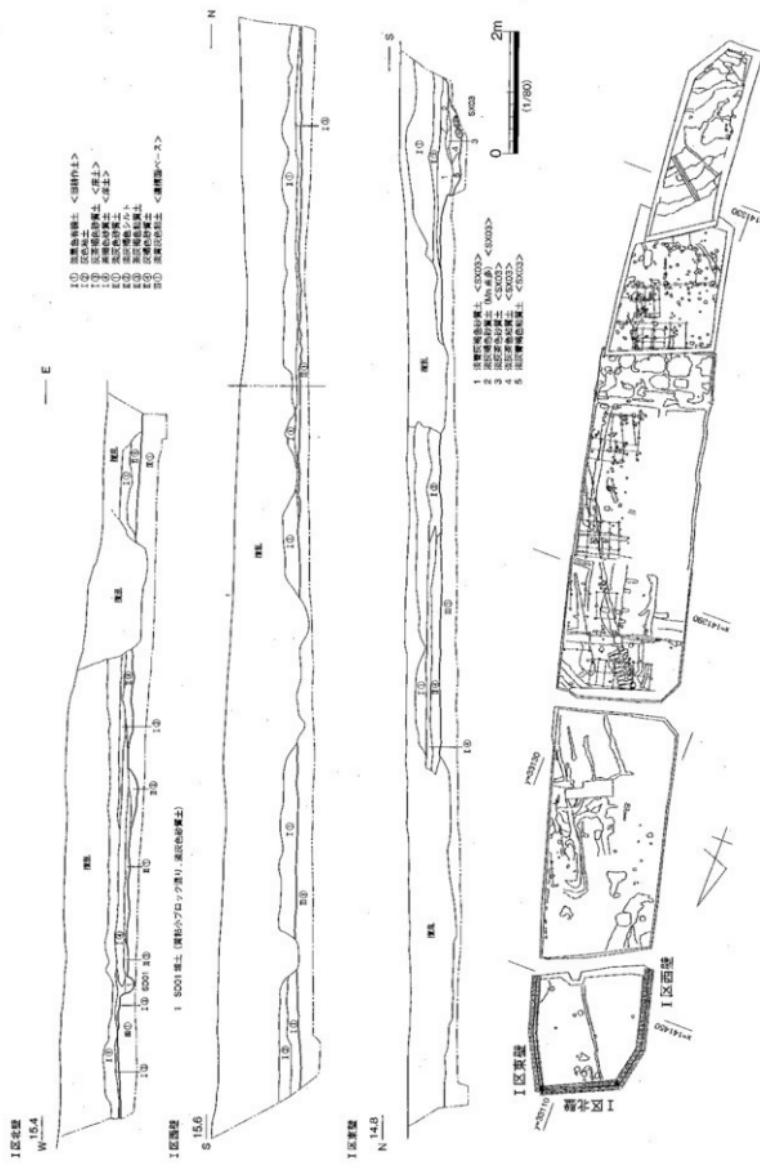
〈VII区〉

調査前には宅地として利用されていた。地形的には丘陵南斜面の頂部寄りに位置する。遺構面は調査区北部で宅地造成に伴う著しい擾乱を、南部で中世以降の削平を受けているが、古代の掘立柱建物跡や地鎮遺構、溝状遺構等を検出した。土層については南東部で厚さ約0.3mを測る包含層（古代～中世前半に堆積）を検出した。

〈VIII区〉

調査前には宅地として利用されていた。地形的には丘陵南斜面から低地部にかけて下る位置にある。低地部で古代の大規模な溝状遺構や旧河道跡等を検出した。土層については地形的に下る南部で灰褐色系砂質土（VIII区西・東壁土層断面II①～⑧層）を検出した。これらは直下に堆積する包含層（淡灰褐色系砂質土 II⑨～⑫層）と類似するものの、土器は含んでいない。

第6図 I区土層図 (1/80)



II区北壁

W-15.6



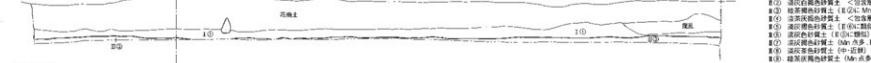
II区西壁

S-16.0



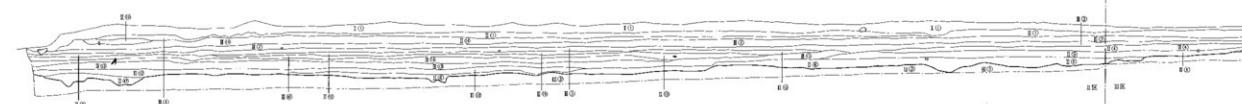
Ⅲ区西壁

S-16.0



Ⅲ区北壁

N-6.4



Ⅲ区南壁

E-15.0



Ⅲ区南壁

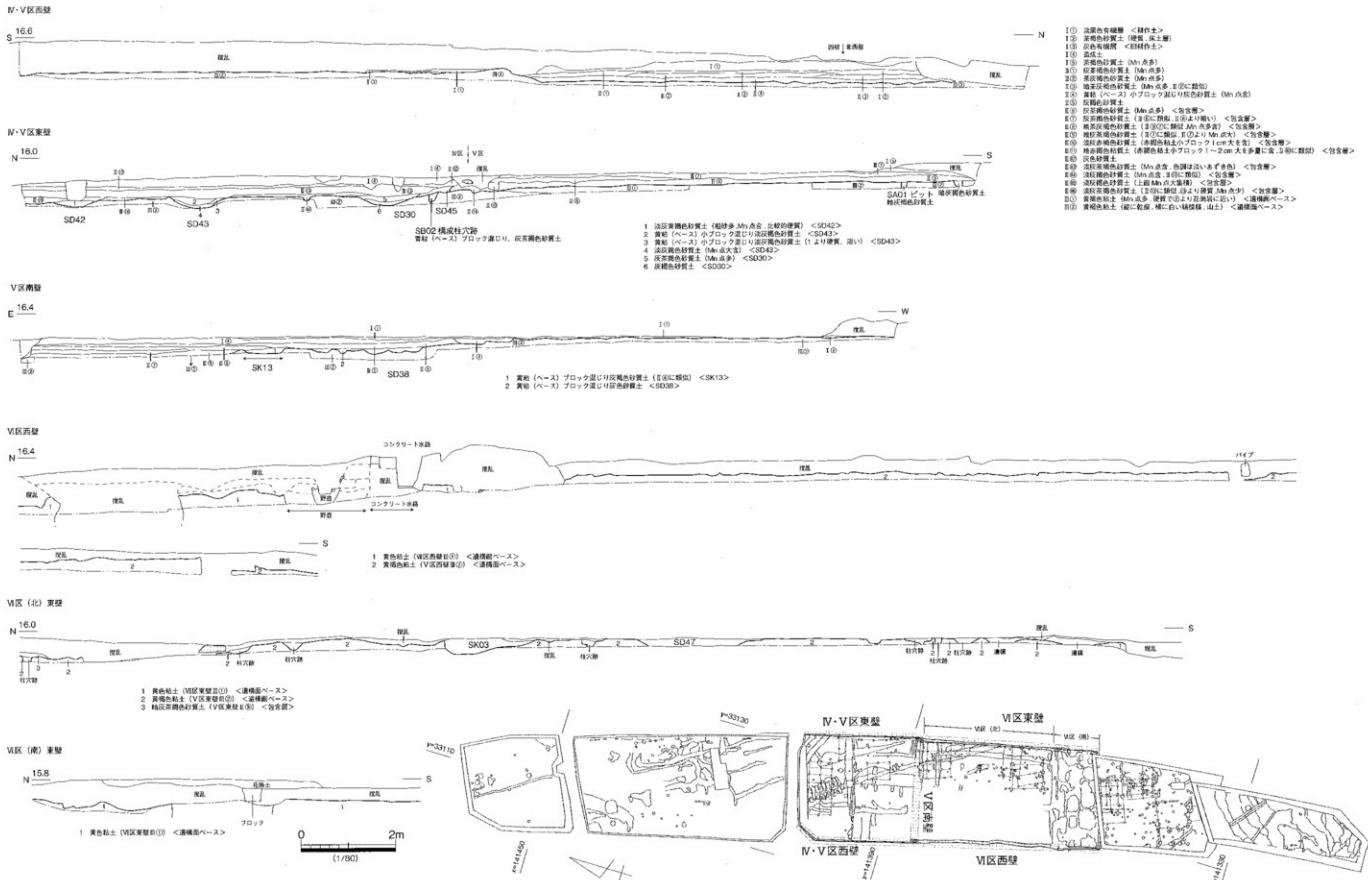
E-16.0



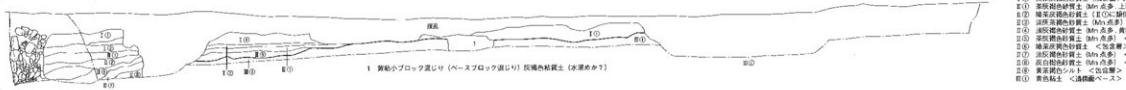
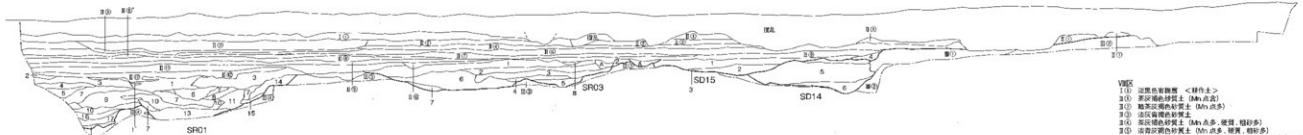
W

0 2m
(1/80)

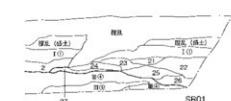
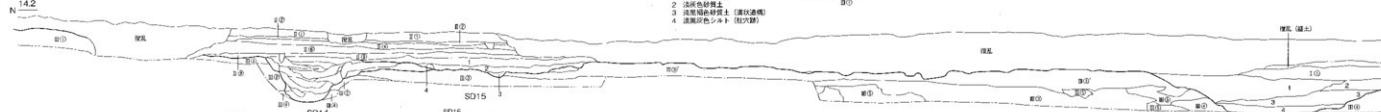
第7図 II・III区土層図(1/80)



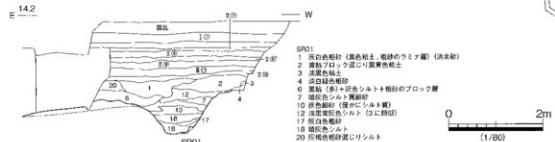
第8図 IV・V・VI区土層図 (1/80)

VII区西壁
S 16.2VII区西壁
S 14.6

VII区東壁

VII区東壁
N 14.2

VII区南壁



第9図 VII・VII区土層図 (1/80)

- VII区
 1.0 黄褐色細粒土、薄いシート (厚い土質) (注)
 1.0 黄褐色細粒土 (Mn点付) 上部は Mn点付層 <3名層>
 1.0 黄褐色細粒土 (Mn点付) 上部は Mn点付層 <3名層>
 1.0 黄褐色細粒土 (Mn点付) <3名層>

SD15

SD14

SD13

SD12

SD11

SD10

SD09

SD08

SD07

SD06

SD05

SD04

SD03

SD02

SD01

SR01

SR02

SR03

SR04

SR05

SR06

SR07

SR08

SR09

SR10

SR11

SR12

SR13

SR14

SR15

SR16

SR17

SR18

SR19

SR20

SR21

SR22

SR23

SR24

SR25

SR26

SR27

SR28

SR29

SR30

SR31

SR32

SR33

SR34

SR35

SR36

SR37

SR38

SR39

SR40

SR41

SR42

SR43

SR44

SR45

SR46

SR47

SR48

SR49

SR50

SR51

SR52

SR53

SR54

SR55

SR56

SR57

SR58

SR59

SR60

SR61

SR62

SR63

SR64

SR65

SR66

SR67

SR68

SR69

SR70

SR71

SR72

SR73

SR74

SR75

SR76

SR77

SR78

SR79

SR80

SR81

SR82

SR83

SR84

SR85

SR86

SR87

SR88

SR89

SR90

SR91

SR92

SR93

SR94

SR95

SR96

SR97

SR98

SR99

SR100

SR101

SR102

SR103

SR104

SR105

SR106

SR107

SR108

SR109

SR110

SR111

SR112

SR113

SR114

SR115

SR116

SR117

SR118

SR119

SR120

SR121

SR122

SR123

SR124

SR125

SR126

SR127

SR128

SR129

SR130

SR131

SR132

SR133

SR134

SR135

SR136

SR137

SR138

SR139

SR140

SR141

SR142

SR143

SR144

SR145

SR146

SR147

SR148

SR149

SR150

SR151

SR152

SR153

SR154

SR155

SR156

SR157

SR158

SR159

SR160

SR161

SR162

SR163

SR164

SR165

SR166

SR167

SR168

SR169

SR170

SR171

SR172

SR173

SR174

SR175

SR176

SR177

SR178

SR179

SR180

SR181

SR182

SR183

SR184

SR185

SR186

SR187

SR188

SR189

SR190

SR191

SR192

SR193

SR194

SR195

SR196

SR197

SR198

SR199

SR200

SR201

SR202

SR203

SR204

SR205

SR206

SR207

SR208

SR209

SR210

SR211

SR212

SR213

SR214

SR215

SR216

SR217

SR218

SR219

SR220

SR221

SR222

SR223

SR224

SR225

SR226

SR227

SR228

SR229

SR230

SR231

SR232

SR233

SR234

SR235

SR236

SR237

SR238

SR239

SR240

SR241

SR242

SR243

SR244

SR245

SR246

SR247

SR248

SR249

SR250

SR251

SR252

SR253

SR254

SR255

SR256

SR257

SR258

SR259

SR260

SR261

SR262

SR263

SR264

SR265

SR266

SR267

SR268

SR269

SR270

SR271

SR272

SR273

SR274

SR275

SR276

SR277

SR278

SR279

SR280

SR281

SR282

SR283

SR284

SR285

SR286

SR287

SR288

SR289

SR290

SR291

SR292

SR293

SR294

SR295

SR296

SR297

SR298

SR299

SR300

SR301

SR302

SR303

第3節 遺構と遺物

I区の調査成果

遺構名称の前に調査区名を付けていないものは全てI区の遺構である。

(1) 中世の遺構・遺物

土坑

SK01(第11図)

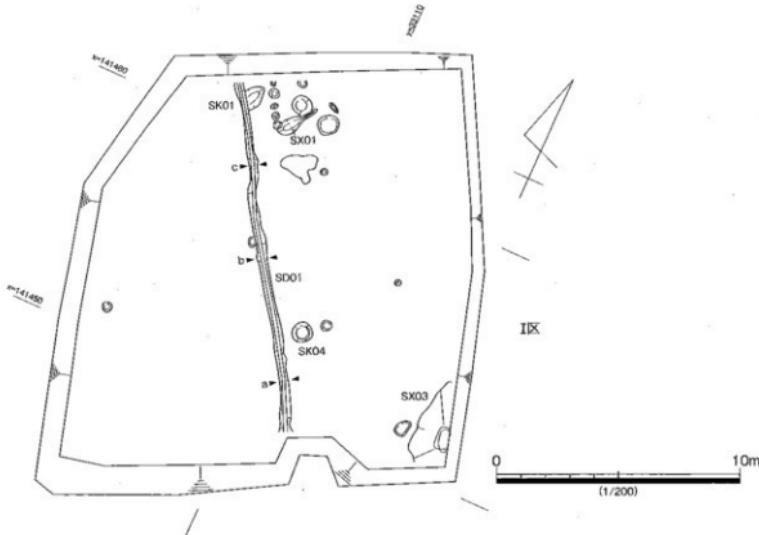
調査区北部で検出した土坑である。西部を近世のSD01により切られるが、平面形は長楕円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径0.84m以上、短径0.78m、深さ0.11mを測る。主軸方向はN-23°-Eである。埋土はやや赤茶がかった灰褐色砂質土である。

出土遺物は須恵器、土師質土器土釜(1)等がごく少量ある。1は断面が三角形状のごく小さなつばをもつ。土坑の時期は、1が15世紀後半~16世紀前半に位置づけられるため、この時期に属すると考えられる。

SK04(第11図)

調査区南部で検出した土坑である。平面形は円形であり、断面形は「U」字状を呈する。規模は長径0.88m、短径0.84m、深さ0.41mを測る。埋土は2層に区分されるが、どちらも淡灰色系砂質土であり、地山ブロックを含む。特に下層では地山ブロックを多量に含むため、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は須恵器、土師質土器が少量ある。土坑の時期は、埋土より中世と考えられる。



第10図 I区全体図 (1/200)

性格不明遺構

SX01(第 11 図)

調査区北部で検出した遺構である。平面形は長楕円形を基調とするが、北部に溝状の突出部をもつ。断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 1.83 m、短径 0.61 m、深さ 0.14 m を測る。埋土は淡灰色粘質土である。

出土遺物は須恵器、土師質土器鉢（2）等がごく少量ある。2は口縁部の下位に 1 条の沈線を加える。遺構の時期は 2 が中世に位置付けられるため、中世と考えられる。

SX03(第 11 図)

調査区南東部で検出した遺構である。西部以外は調査区外に延びるため、平面形は不明であるが、断面形は中央で落ち込む 2 段掘り状を呈する。規模は長径 3.23 m 以上、短径 1.23 m 以上、深さ 0.39 m を測る。埋土は 5 層に細分されるが、下位で粘質土、上位で砂質土が堆積する。

出土遺物は須恵器、土師質土器土釜（3）等がごく少量ある。3は脚部である。遺構の時期は 3 が中世に位置付けられるため、中世と考えられる。

II・III 区の調査成果

II・III 区は発掘調査を同時に行っており、2つの調査区で連続する溝状遺構等も多いため、一括して報告する。また、以下の II・III 区の報告で遺構名称の前に調査区名を付けていないものは全て II・III 区の遺構である。

(1) 古代の遺構・遺物

柵列跡

SA01(第 13 図)

調査区北東部で検出した柵列跡である。南部は調査区外に延びる可能性があり、規模は 4 間以上（4.8 m 以上）、主軸方向は N-25°-W を測る。柱穴跡の平面形は円形か、やや不整な円形であり、径 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.18 ~ 0.41 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物はない。柵列跡の時期は、埋土と主軸方向から 9 世紀後半～10 世紀前半と考えられる。

溝状遺構

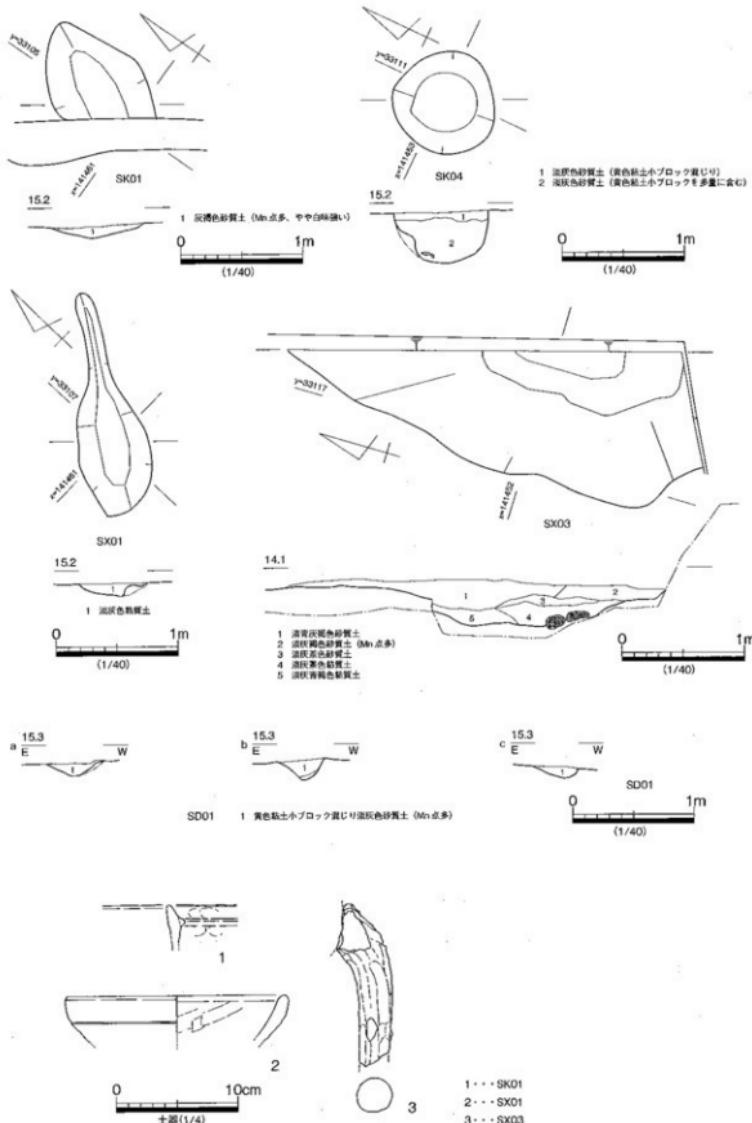
SD04(第 14 ~ 16 図)

調査区の東部中央で検出した溝状遺構である。西部は SD08 に切られるため、SD04 が先行して出現したことがわかる。断面形は皿状を呈し、幅 1.45 m、深さ 0.12 m を測る。埋土は淡灰茶褐色砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

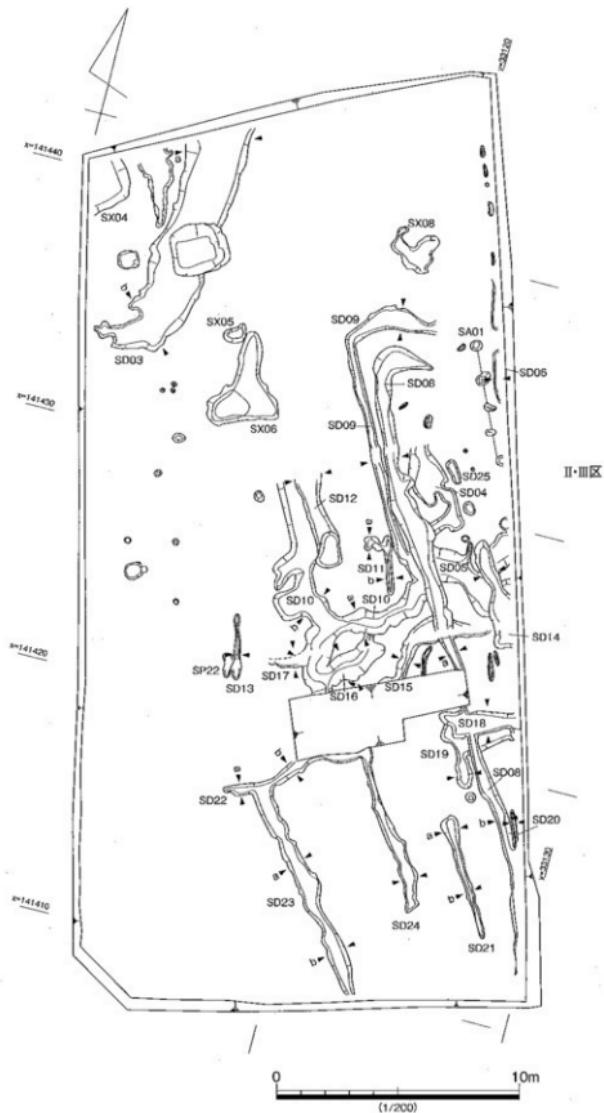
出土遺物は須恵器杯・台付椀（4）・高杯・甕（5）、土師器高杯（6）、土師質土器甕等が少量ある。4 は底部と体部の境界で丸みを帯び、「ハ」の字状に開く高台を貼り付ける。5 は頸部直下の内面に当て具痕が見られる。6 は脚部である。上半部は筒状を呈し、上下ではほぼ同径である。これらの土器は 7 ~ 8 世紀代に位置付けられる。しかしながら、埋土・主軸方向から溝状遺構の時期は 9 世紀後半～10 世紀前半と考えられることから、上記の遺物は混入であることがわかる。

SD05(第 14 図)

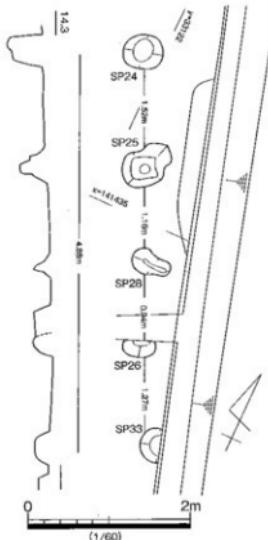
調査区北東部で検出した溝状遺構である。西部は SD08 に、中央部は SD14 に切られるため、SD05



第11図 I区 SK01・04、SX01・03、SD01 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第12図 II・III区全体図 (1/200)



第13図 II区 SA01 (1/60)

南部で接続する。遺構の断面形は皿状を呈し、規模は幅0.6m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN-26°-Wである。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

また、SD08の北東側に接して集石遺構が見られる。これは拳大の礫が、密集した状態で集積した礫群であり、主軸方向がSD08の主軸方向に沿っている。またSD04・05が埋没した後に集積されることを考え合わせるとSD08に伴うと考えられる。

出土遺物は須恵器杯蓋(7)・杯身(9)・高杯、土師器碗(10)、土師質土器、須恵器壺(8)・壺が少量ある。7は外面の縁線が全く見られず、6世紀後半に位置付けられる。8は短頸壺である。口縁部と体部の境界に1条の沈線を施す。9は底部を回転ヘラ切りする。9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる。溝状遺構の時期は「SD09」の項で述べるSD23との関係から10世紀前半と考えられる。

SD09(第14図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。南端はSD10に接続し、北端は東に折れ曲がる。また、SD08に切られることから、SD09が先行して出現したことがわかる。断面形は皿状を呈する。幅0.5m、深さ0.20mを測る。主軸方向はN-27°-Wである。埋土は淡灰色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

SD09はSD08と切り合があるものの、両者は主軸方向を揃え、北部で重複する。また、SD09は西側に位置するSD10と接続し、「コ」字状の区画を形成するが、SD08もSD22～24と南部で「E」字状の区画を形成する。さらに、これらの遺構群は全体として網目状の小区画群を形成し、埋土も類似する。こうした状況から、SD08・09とこれに関わる上記の溝状遺構群は、ほぼ同時期に相互の存在を意識し

が先行して出現したことがわかる。断面形は皿状を呈し、幅1.28m、深さ0.24mを測る。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。なお、西側に延びるSD10とは規模、埋土等が類似し、接続する可能性がある。

出土遺物は須恵器壺、土師質土器等がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土とSD08に切られることから9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

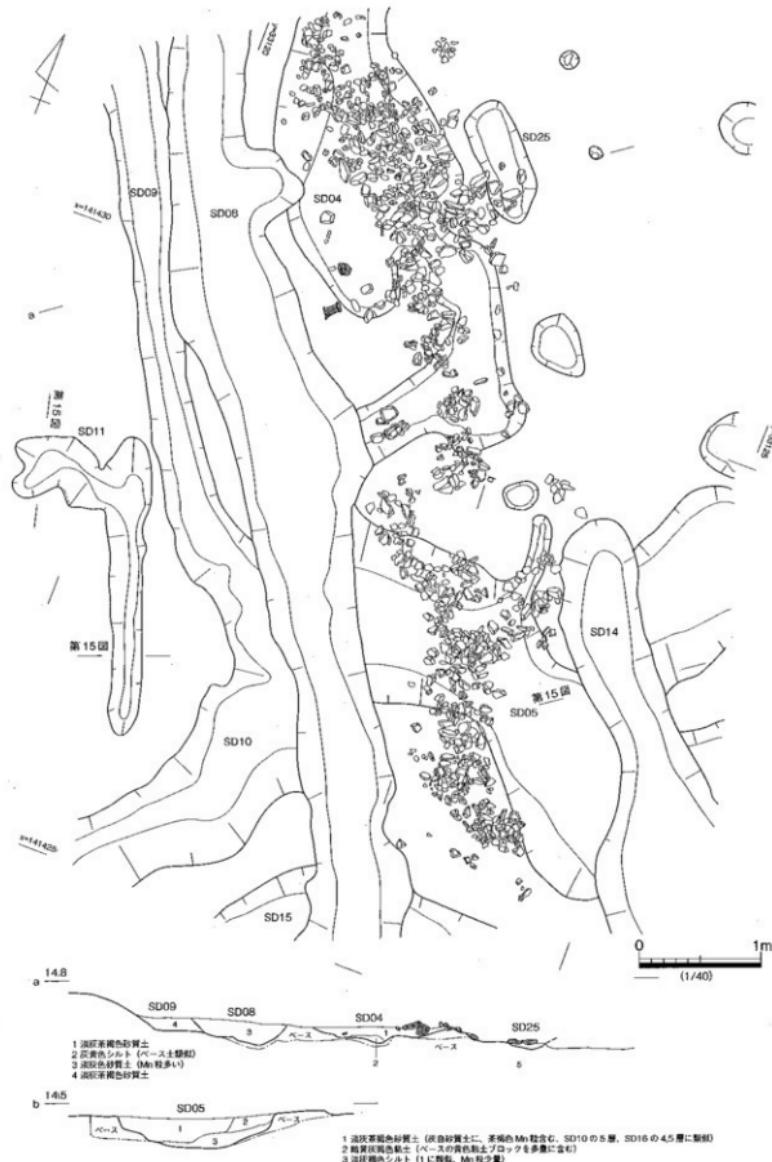
SD06(第15図)

調査区北東部で検出した溝状遺構である。削平により途切れがちであるが、中央から北端付近にかけて延びる。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.2m、深さ0.10mを測る。主軸方向はN-19°-Wである。埋土は灰白褐色シルトであり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は土師器、須恵器杯・壺がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD08(第14～16図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。南端は調査区外に延び、北端は東に折れ曲がる。SD04・05・09・10・15・19を切り、これらの溝状遺構よりも後出する。また、SD18と



第14図 II区 SD04・05・08・09・25平・断面図 (1/40)

て掘削されたと見られる。また、遺構群の性格は、全体の配置形状や個々の遺構規模と平面形、東側に広がると推測される居住域との配置を考慮すると、痕跡と考えられる。

出土遺物は土師器杯、須恵器がごく少量ある。溝状遺構の時期はSD08との関係や、周辺遺構の時期から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD10(第15・16図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。平面形は、南北に延びる溝状遺構から東へ延びる溝状遺構が派生し、「T」字状を呈する。また、断面形は逆台形を呈する。東端でSD09と接続するが、「SD09」の報告で述べたとおり、痕跡を構成すると考えられる。規模は幅0.9m、深さ0.41mを測る。主軸方向はN-26°-Wである。埋土は灰白褐色シルトであり、流水による砂層の堆積は見られない。SD16に切られることから、SD10が先行して出現したことがわかる。

出土遺物は須恵器杯・壺(11)・甕、土師質のフイゴ羽口(12)がごく少量ある。11は肩が張り、底部に小さい高台を貼り付ける。7世紀末頃に位置付けられる。12は団の上部に向かってややすぼまる。外面は被熱により部分的に赤化している。溝状遺構の時期は、SD09と接続することから、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD11(第15図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。平面形は北部屈曲した「L」字状である。断面形は逆台形を呈する。幅0.72m、深さ0.36mを測る。主軸方向はN-19°-Wである。埋土は灰褐色質系砂質土であり、流水があった痕跡は見られない。

出土遺物は焼土がある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD12(第15図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。西側に接するSD10を切ることから、SD12が後から出現したことがわかる。断面形は皿状を呈し、幅1.38m、深さ0.19mを測る。埋土は淡灰褐色砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物はない。溝状遺構の時期は、埋土・主軸方向と周辺遺構の時期から、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD13(第15図)

調査区南西部で検出した溝状遺構である。断面形は皿状を呈する。幅0.59m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-16°-Wである。埋土は淡灰茶褐色質土であり、流水があった痕跡は見られない。

出土遺物は須恵器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土から9世紀後半～11世紀前半と考えられる。

SD14(第15図)

調査区中央東部で検出した溝状遺構である。北部でSD05を切ることから、SD14が後から出現したことがわかる。断面形は浅い皿状を呈し、幅1.0m以上、深さ0.19mを測る。主軸方向はN-27°-Wである。埋土は灰白褐色砂質土であるが、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は須恵器甕、土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD15(第15図)

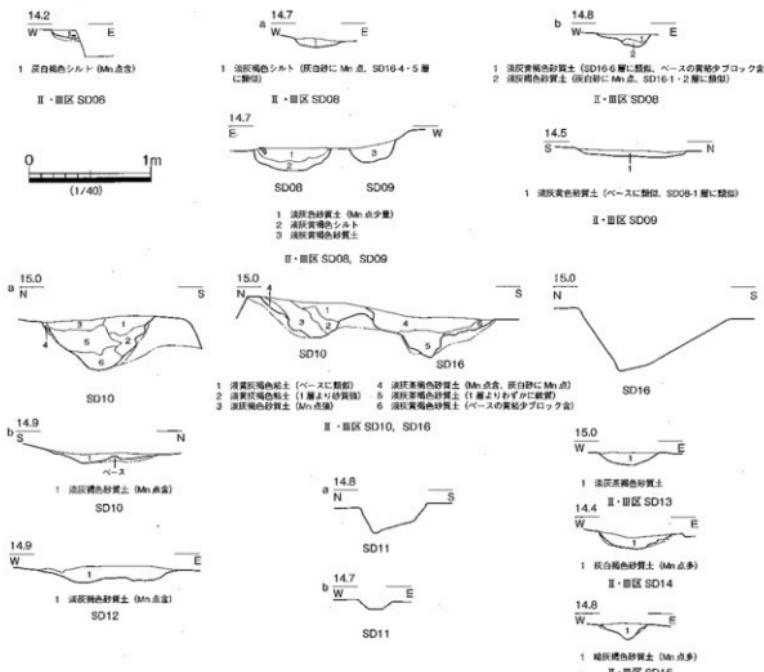
調査区中央東部で検出した溝状遭構である。南部は予備調査トレンチにより破損する。また、SD08に切られることから、SD15が先行して出現したことがわかる。断面形は三角形状を呈し、幅0.4m、深さ0.17mを測る。埋土は暗灰褐色砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は須恵器、土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

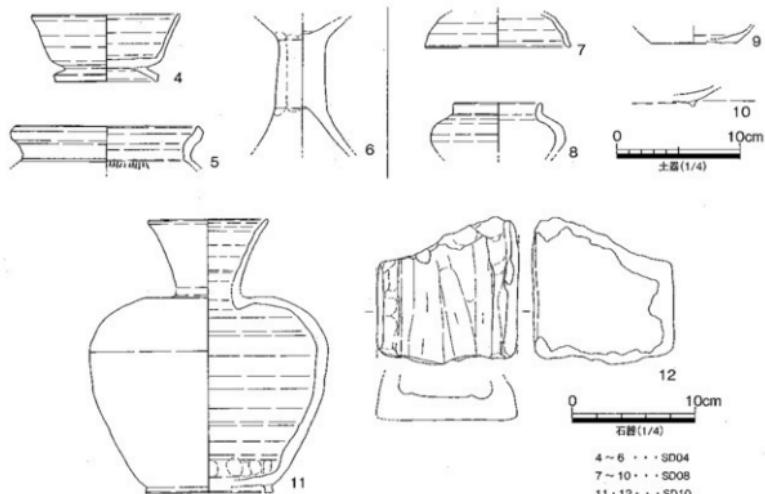
SD16(第15・18図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。SD10を切ることから、SD16が後から出現したことがわかる。断面形は概ね逆台形であるが、中央部が窪む。幅 1.0 m、深さ 0.48 m を測る。埋土は淡灰褐色系砂質土であるが、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は須恵器・台付椀（13）・壺（14）・甕が少量ある。13は4と類似した器形及び法量をもち、高台も底部内寄りに貼り付ける。7世紀後半に位置付けられる。14は口縁端部を上方に折り曲げ、直立させる。9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる。溝状遺構の時期は、14から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。



第15図 II区 SD06・08～16断面図 (1/40)



第16図 II・III区 SD04・08・10出土遺物(1/4)

SD17(第17図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。SD10と接続し、断面形は逆台形である。幅0.2m以上、深さ0.18mを測る。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物はない。溝状遺構の時期は、SD10と接続することから、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD18(第17・18図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。SD08と接続し、断面形は浅い皿状である。幅1.0m、深さ0.10mを測る。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は須恵器杯身(15)・高杯、土師質土器、打製石鏃(16)がごく少量ある。15は矮小な高台をもち、7世紀後半～8世紀前半と考えられる。16は凹基式で先端部・胸部ともに細身である。溝状遺構の時期は、SD08と接続することから、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD19(第17図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。SD08・18に切られることから、SD19が先行して出現したことがわかる。断面形は浅い皿状であり、幅0.6～1.4m、深さ0.14mを測る。埋土は灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物は須恵器、土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土とSD08に切られることから9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD20(第17図)

調査区南東部で検出した小規模な溝状遺構である。SD08と接続し、断面形は浅い皿状である。幅0.18m、深さ0.03mを測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物はない。溝状造構の時期は、SD08と接続することから、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD22(第17図)

調査区南部で検出した溝状造構である。SD23・24と接続し、またSD08の南部と「E」字状の区画を形成する。断面形は浅い皿状であり、幅0.4m、深さ0.6mを測る。主軸方向はN-57°-Eである。埋土は灰褐色系砂質土であり、流水による砂層の堆積は見られない。

出土遺物はない。溝状造構の時期は、SD23と接続することから、10世紀前半と考えられる。

SD23(第17・18図)

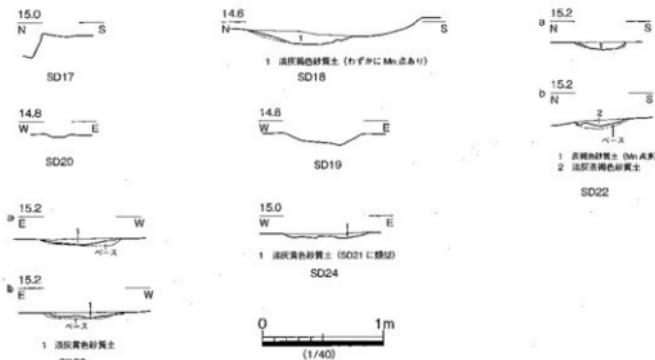
調査区南部で検出した溝状造構である。SD22と接続し、上述のとおりSD08の南部と「E」字状の区画を形成する。断面形は浅い皿状であり、幅0.65m、深さ0.07mを測る。主軸方向はN-38°-Wである。埋土は淡灰黄色砂質土である。

出土遺物は須恵器壺(17)・甕、土師質土器がごく少量ある。17は口縁部から頸部にかけて緩やかに屈曲し、口縁端部を小さく摘み上げる。10世紀前半に位置付けられる。溝状造構の時期は17から、10世紀前半と考えられる。

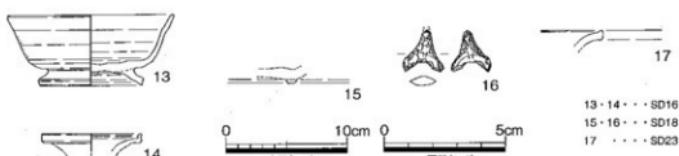
SD24(第17図)

調査区南部で検出した溝状造構である。SD22と接続し、上述のとおりSD08の南部と「E」字状の区画を形成する。断面形は浅い皿状であり、幅0.71m、深さ0.5mを測る。主軸方向はN-32°-Wである。埋土は淡灰黄色砂質土である。

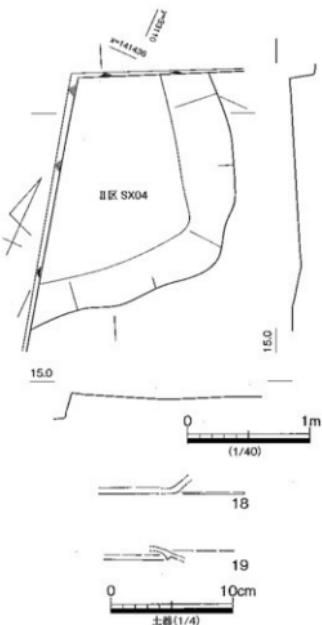
出土遺物はない。溝状造構の時期は、SD22と接続することから、10世紀前半と考えられる。



第17図 II・III区 SD17～20・22～24 断面図 (1/40)



第18図 II・III区 SD16・18・23 出土遺物 (1/4・1/2)



第19図 II・III区 SX04 平・断面図
(1/40)、出土遺物 (1/4)

備前焼甕、平瓦 (26)、砂岩製叩き石 (27) が28リットル入りコンテナ1箱ある。量的には土師質土器土釜、次いで土師質土器土鍋が多い。20～23はいずれも矮小なつばと短い口縁部をもち、つばの付近には貼り付けに伴う指オサエが顕著に見られる。16世紀代に位置付けられる。24は外反気味に開く口縁部から直立気味の体部が延びる。口縁部内面にはハケ原体による十字形の圧痕が見られる。25は口縁部を内側上方に拡張させる。内面には6条一組の卸目を施す。26は古代の平瓦である。焼成は土師質である。27は側面にわずかに敲打痕が見られる。

溝状遺構の時期は、出土土器から16世紀代と考えられる。

SD21(第22図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。断面形は浅い皿状であり、幅0.27～0.51m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-34°-Wである。埋土は淡灰黄色砂質土であり、SD08埋土と類似する。

出土遺物は土師器小皿 (28)、須恵器がごく少量ある。28は底部と体部の境界に丸みを帯び、器壁はやや薄い。中世前半に位置付けられる。溝状遺構の時期は、28から中世前半と考えられる。ただし、埋土と主軸方向は、9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる遺構群と類似するため、28が混入している可能性も残る。

性格不明遺構

SX04(第19図)

調査区北西部で検出したごく浅い落ち込みである。西部・北部が調査区外に延びるもの、平面形は方形であると推測される。規模は長径1.95m以上、短径1.4m以上、深さ0.07mを測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物は須恵器杯身 (18)・蓋 (19)・甕がごく少量ある。18は外面に火ダスキーかかる。9世紀後半～10世紀前半に位置付けられる。19は矮小なカエリをもつ。遺構の時期は、18から9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

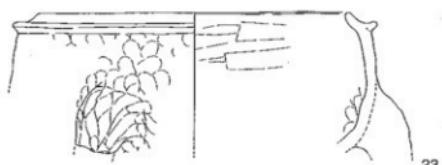
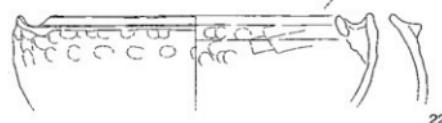
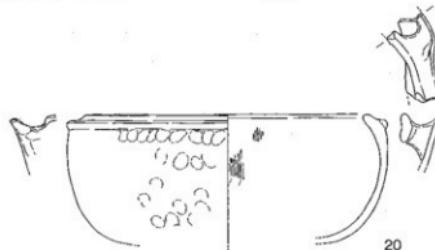
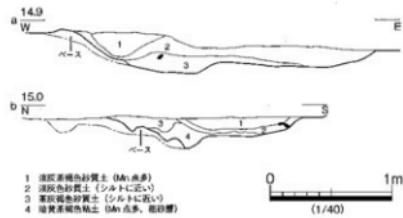
(2) 中世の遺構・遺物

溝状遺構

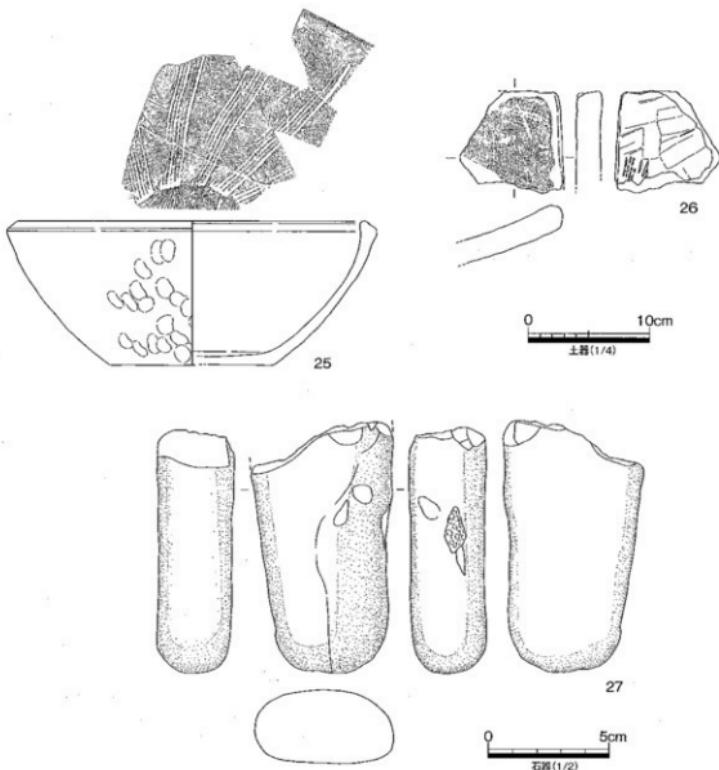
SD03(第20・21図)

調査区北西部で検出した溝状遺構である。掘り込み面は古代～中世前半包含層 (II区北壁II⑨層) であり、北部は調査区外に延びる。断面形は浅い皿状であり、幅2.41m、深さ0.47mを測る。主軸方向はN-5°-Eである。埋土は概ね灰褐色系砂質土であるが、4層では粗砂を含み、当初は流水もあったと考えられる。

出土遺物は土師器杯、須恵器、青磁、瓦質土器釜、土師質土器土釜 (20～23)・土鍋 (24)・すり鉢 (25)、



第20図 II・III区 SD03断面図 (1/40)、出土遺物① (1/4)



第21図 II・III区 SD03出土遺物② (1/4・1/2)

柱穴跡出土遺物（第22図）

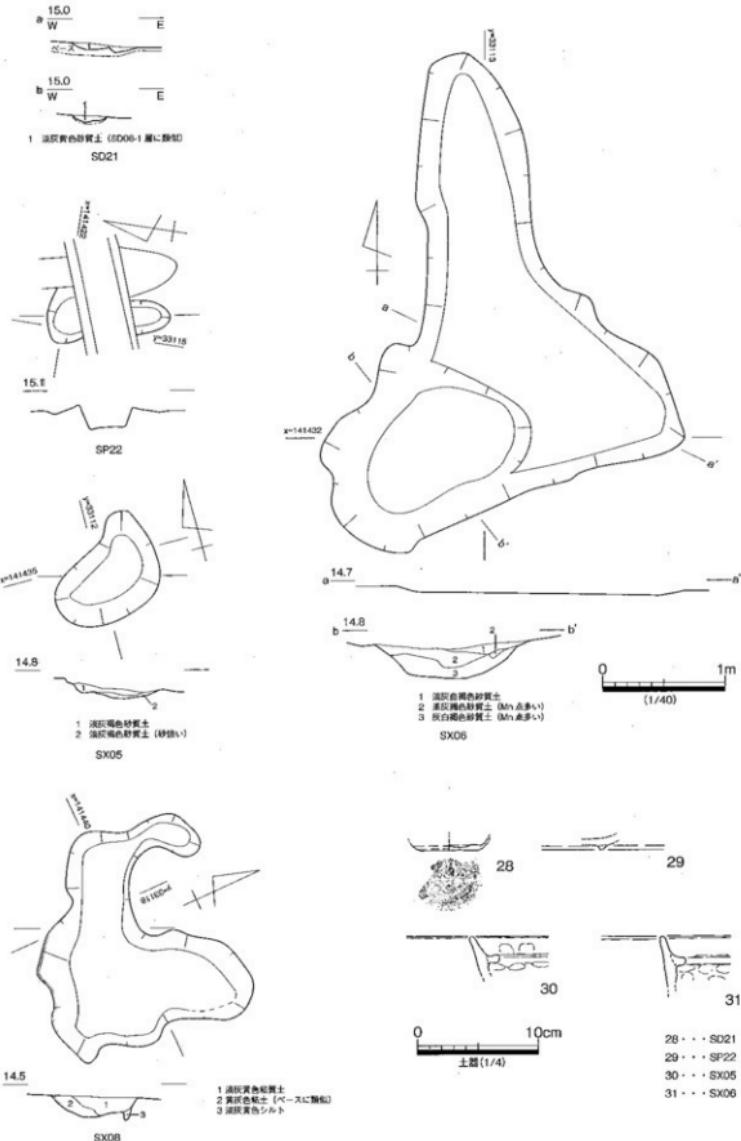
ここでは横列跡、掘立柱建物跡を復元できない柱穴跡から出土した遺物を報告する。29は土師器椀である。断面三角形のごく小さい高台を貼り付ける。

性格不明遺構

SX05(第22図)

調査区北西部で検出した不整形の浅い落ち込みである。規模は長径0.96m、短径0.63m、深さ0.09mを測る。埋土は淡灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器土釜(30)がある。30はつばの下位が顯著な指オサエにより凹む。14世紀後半に位置付けられる。遺構の時期は、30から14世紀後半と考えられる。



第22図 II・III区 SD21・SP22・SX05・06・08平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

SX06(第22図)

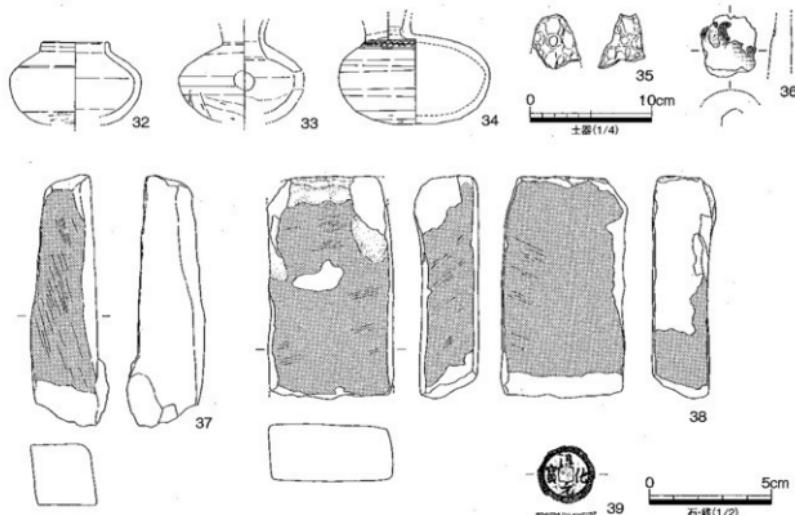
調査区北西部で検出した遺構である。平面形は北側が部分的に突出した不整形であり、断面形は南部で一段落ち込む。規模は長径3.8m、短径1.49m、深さ0.25mを測る。埋土は白味を帯びた灰褐色砂質土である。

出土遺物は黒色土器壺、須恵器甕、土師質土器釜(31)等が少量ある。31は断面方形の短いつばを貼り付ける。14世紀後半に位置付けられる。遺構の時期は31より14世紀後半と考えられる。

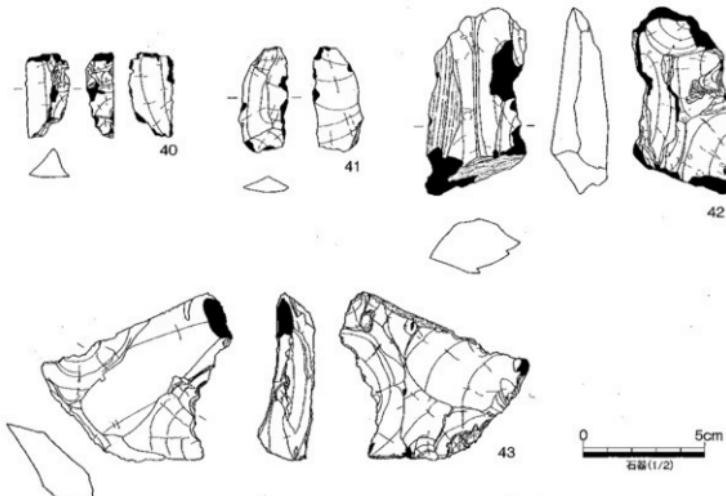
(3) 包含層出土遺物(第23~26図)

II、III区では包含層より多量の遺物が出土した。内容的には古墳時代~古代の土器(32~36)、中世土器、銅鏡(39・47)、石器(40~46・48)等がある。32~46はII区包含層からの出土遺物である。32は須恵器短頸甕である。体部の外面上位に1条の沈線を加え、底部は手持ちヘラケズリする。33は須恵器甕である。体部下半に分割ヘラケズリを加える。内面下部には付着物が見られる。34は須恵器平瓶である。外面の頭部直下に波状文を施す。35は土師質蜻蛉である。36は土師質のフイゴ羽口である。外面は部分的に還元し、青黒くなっている。また、内面は被熱により赤色に変化している。37は結晶片岩製、38は砂岩製の砥石である。38は使用による磨耗が著しく、右図右端のとおり窪んでいる。39は「淳化元寶」(初鋤990年)である。40はプランティング状の剥離が見られ、ナイフ形石器と考えられる。42~46は石核である。42・43は小さい剥片を採取している。44は左図右縁辺に調整が見られ、風化も進んでいることから旧石器の可能性がある。46は自然面を叩いてわずかに剥片採取を行っている。

47・48はIII区包含層からの出土遺物である。47は寛永通宝である。48は楔形石器の剥片である。左図左側縁の折れ面以外はいずれも顕著なつぶれが見られる。



第23図 II・III区包含層出土遺物① (1/4・1/2)



第24図 II・III区包含層出土遺物② (1/2)

IV・V区の調査成果

IV、V区は発掘調査を同時に行っており、2つの調査区間で連続する溝状遺構等も多いため、一括して報告する。また、以下のIV・V区の報告で、遺構名称の前に調査区名を付けていないものは、全てIV・V区の遺構である。

(1) 古代の遺構・遺物

柵列跡

SA01(第28図)

調査区南東隅で検出した柵列跡である。規模は3間以上(6.58m以上)、主軸方向はN-20°-Wを測る。柱穴跡の平面形は円形であり、径0.21~0.30m、深さ0.12~0.24mを測る。埋土は灰褐色系砂質土である。なお、柵列跡としたが、未検出の柱穴跡が東側に広がり、掘立柱建物跡を構成する可能性もある。

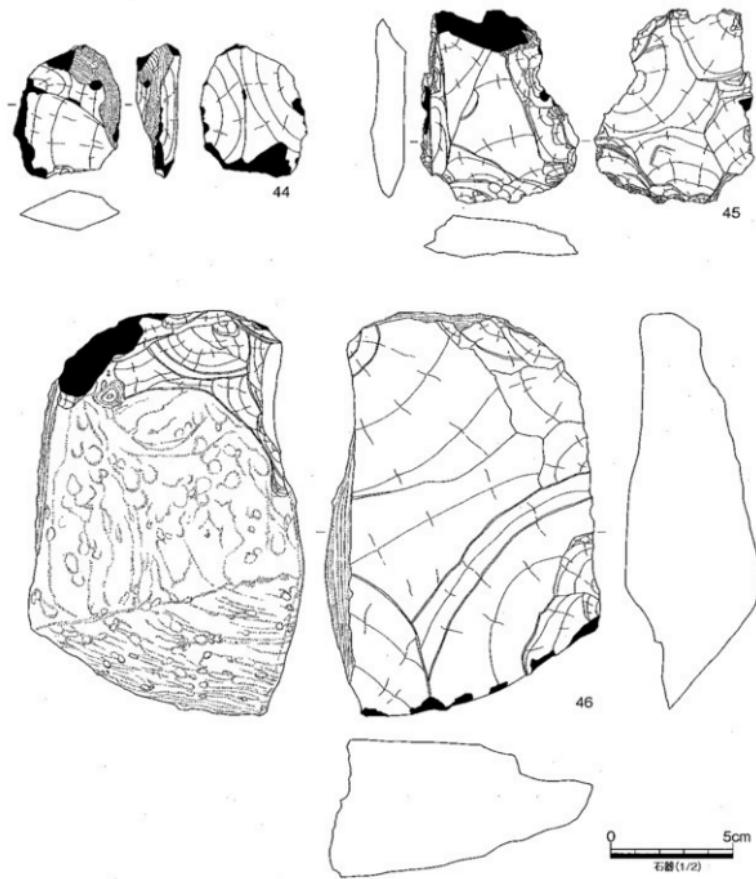
出土遺物は須恵器がごく少量ある。柵列跡の時期は埋土と、近接して位置するSB01が11世紀前半に位置付けられることから、同時期に属すると考えておきたい。

掘立柱建物跡

SB01(第29図)

調査区北部で検出した総柱建物跡である。SD45・47を切ることから、SB01が後から出現したことかがわかる。規模は梁間2間×桁行5間(3.97m×9.42m)であり、床面積約37m²を測る。主軸方向はN-105°-Wである。柱間距離は、東半部の3間分が短く、床面を板敷きにしていた可能性がある。

柱穴跡の平面形は円形であり、径0.27~0.47m、深さ0.18~0.33mを測る。埋土は灰褐色系砂



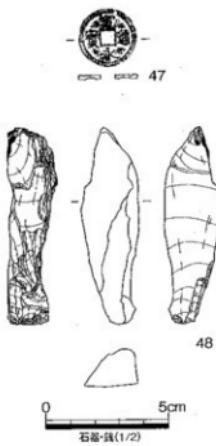
第25図 II・III区包含層出土遺物③(1/2)

質土である。なお、SP37・43の底面では縞が出土し、根石と考えられる。

出土遺物には須恵器杯・甕、土師器杯(49)、土師質器土釜(50)、壁土等が少量ある。49は強く外傾し、口縁部がやや膨らむ。11世紀前半に位置付けられる。50は小さいつばと短い口縁部をもつ。15世紀後半に属する。建物跡の時期は、埋土と49から11世紀前半と考える。

SB02(第30図)

調査区北東部で検出した側柱建物跡である。SD45を切ることから、SB02が後から出現したことがわかる。規模は梁間1間×桁行2間以上(2.71m×4.29m以上)である。主軸方向はN-73°-Eである。柱穴跡の平面形は円形であり、径0.17~0.33m、深さ0.09~0.18mを測る。埋土は灰褐色



第26図 II・III区包含層出土
遺物④ (1/2)

系砂質土である。

出土遺物には土師質土器がごく少量ある。建物跡の時期は、埋土と近接して位置する SB01 が 11 世紀前半に位置付けられることから、同時期に属すると考えられる。

SB03(第31回)

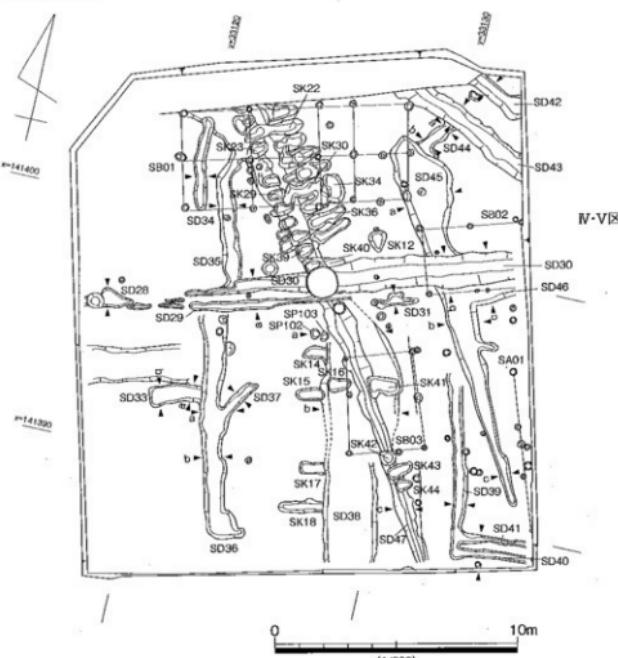
調査区南部で検出した側柱建物跡である。規模は梁間2間×桁行2間(3.12 m × 4.0 m)である。主軸方向はN-17°Wである。柱穴跡の平面形は円形であり、径0.2~0.38 m、深さ0.06~0.21 mを測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には土師器がごく少量ある。建物跡の時期は、埋土と近接して位置するSB01が11世紀前半に位置付けられることから、同時期に属すると考えられる。

溝狀遺構

SD28(第32図)

調査区中央西部で検出した溝状遺構である。SD30を西へ延長



第27図 IV:V区全体図 (1/200)

した位置にあるが、埋土が異なるため別遺構と判断した。断面形はごく浅い皿状であり、幅0.76m、深さ0.05mを測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師器、土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土から9世紀後半～11世紀前半と考えられる。

SD31(第32図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.43m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN-72°-Eである。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物は土師器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD33(第32図)

調査区南西部で検出した溝状遺構である。東部でSD36に切られることから、SD33が先行して出現したことがわかる。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅0.78m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-70°-Eである。埋土は灰白褐色砂質土である。

出土遺物は土師器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD34(第32図)

調査区北西部で検出した溝状遺構である。北部でSD47を切ることから、SD34が後から出現したことがわかる。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅0.68m、深さ0.03mを測る。主軸方向はN-15°-Wである。埋土は淡灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師器杯、須恵器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD35(第32図)

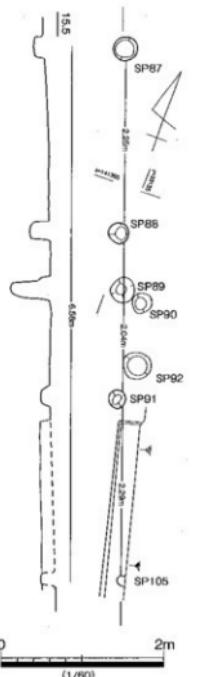
調査区北西部で検出した溝状遺構である。南部でSD30に切られることから、SD35が先行して出現したことがわかる。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅0.61m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN-19°-Wである。埋土は淡灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器、須恵器甕等がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SD36(第32図)

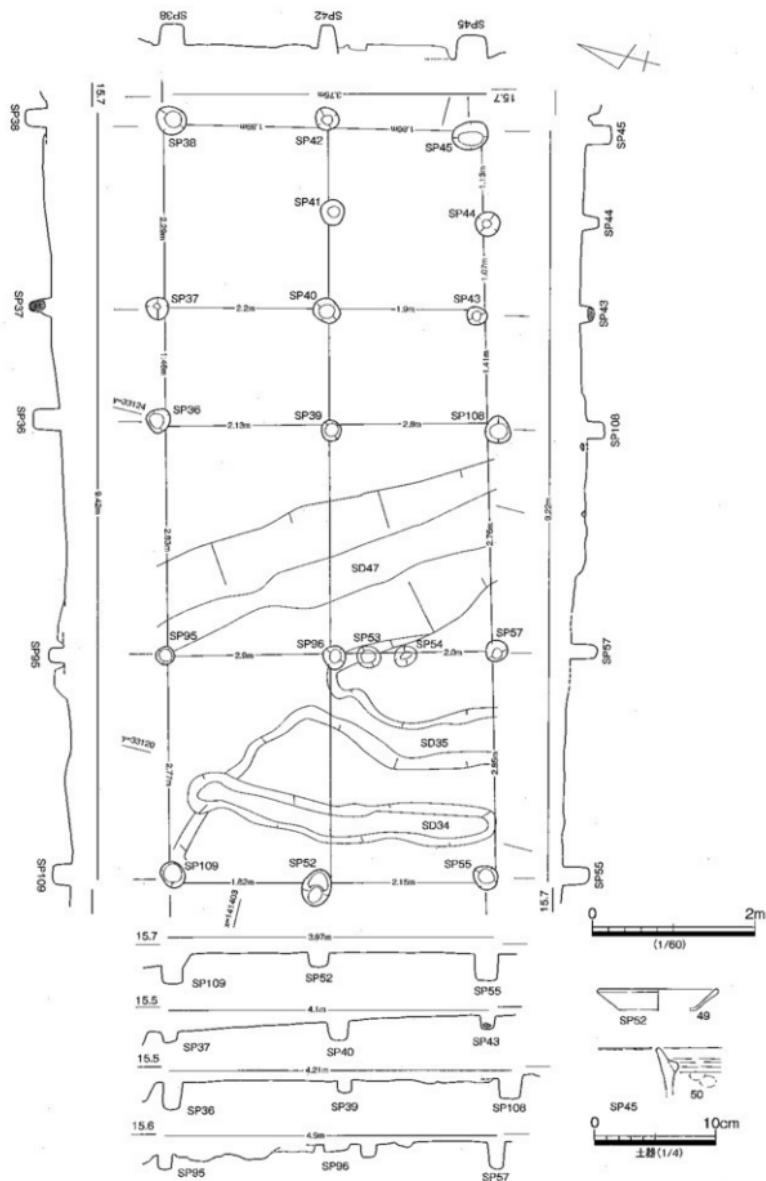
調査区南西部で検出した溝状遺構である。SD33を切ることから、SD36が後から出現したことがわかる。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅0.64～1.29m、深さ0.01mを測る。主軸方向はN-19°-Wである。埋土は暗灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師器、須恵器杯・甕がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

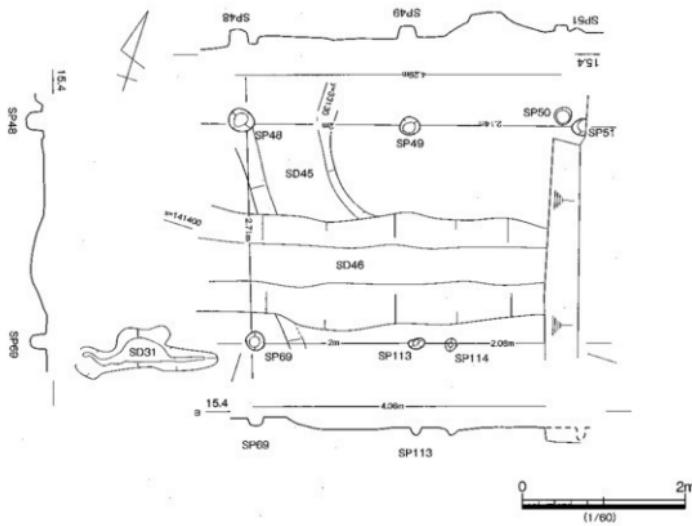


第28図 IV・V区 SA01平・

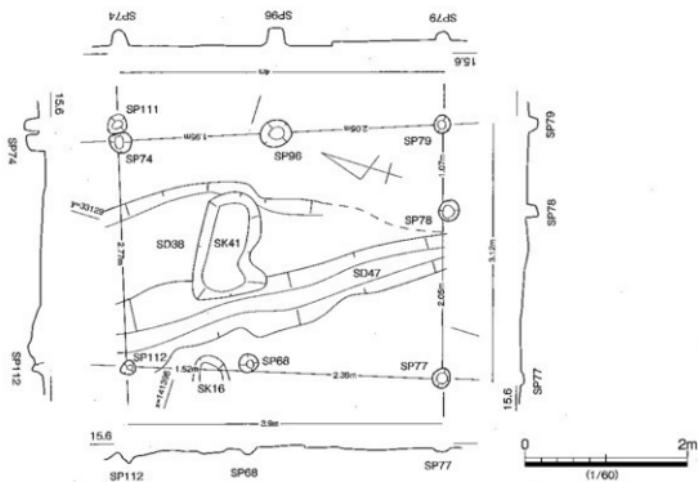
断面図 (1/60)



第29図 IV・V区 SB01平・断面図 (1/60)、出土遺物 (1/4)



第30図 IV・V区 SB02 平・断面図 (1/60)



第31図 IV・V区 SB03 平・断面図 (1/60)

SD37(第 32 図)

調査区南西部で検出した溝状遺構である。SD36 から派生し、断面形はごく浅い皿状を呈する。規模は幅 0.35 m、深さ 0.03 m を測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物はない。溝状遺構の時期は、SD36 と接続することから、10 世紀前半～11 世紀前半と考えられる。

SD39(第 32・33 図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。南端部で直交する SD40・41 に接続する。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅 0.46 m、深さ 0.05 m を測る。主軸方向は N - 13° - W である。埋土は淡灰茶褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器、須恵器高杯 (51)・壺等がごく少量ある。51 は脚端部を小さく、下位に摘み出す。7 世紀代頃に位置付けられる。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、10 世紀前半～11 世紀前半と考えられる。

SD40(第 32 図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。西端部で直交する SD39 に接続し、東端は調査区外に延びる。断面形は浅い皿状を呈し、幅 0.24 m、深さ 0.05 m を測る。主軸方向は N - 84° - E である。埋土は淡灰茶褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、10 世紀前半～11 世紀前半と考えられる。

SD41(第 32 図)

調査区南東部で検出した溝状遺構である。西端部で直交する SD39 に接続し、東端は調査区外に延びる。断面形は浅い皿状を呈し、幅 0.24 m、深さ 0.02 m を測る。主軸方向は N - 83° - E である。埋土は淡灰茶褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土と主軸方向から、10 世紀前半～11 世紀前半と考えられる。

SD42(第 32・33 図)

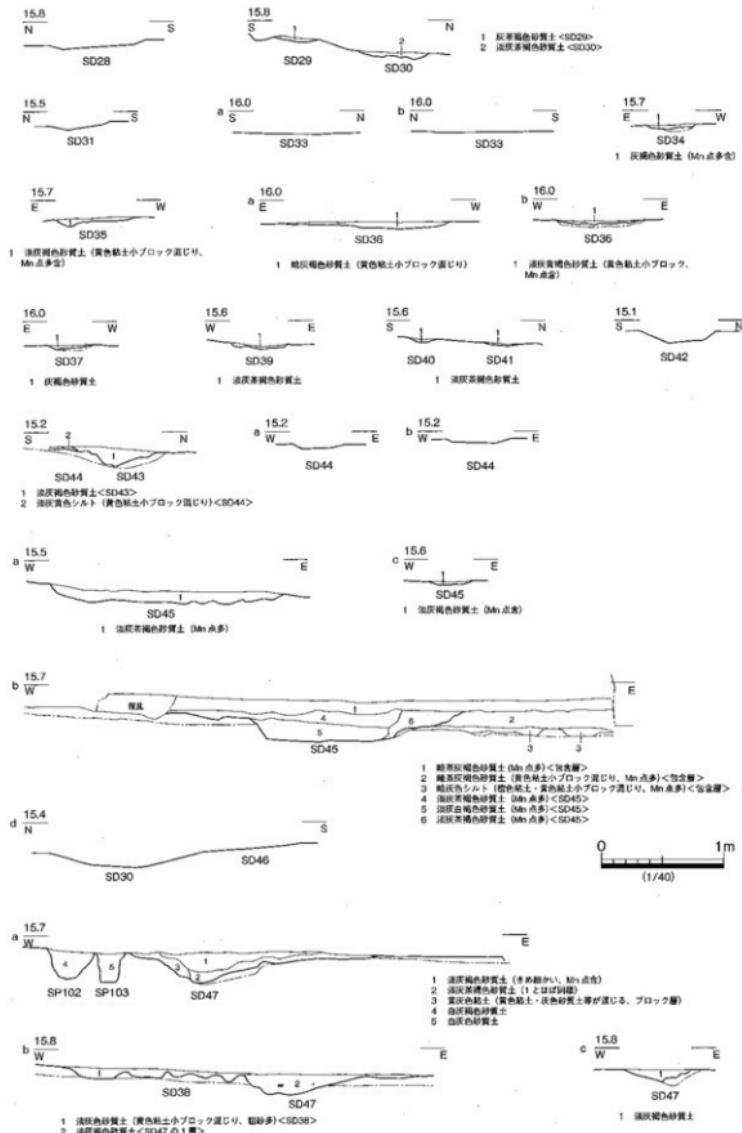
調査区北東部で検出した溝状遺構である。南北端は調査区外に延びる。断面形は逆台形を呈し、幅 0.64 m、深さ 0.1 m を測る。主軸方向は N - 68° - W である。埋土は淡灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師器杯 (52・53) がある。52・53 は傾きがやや異なるが、同様な口径と底径をもち、底部を回転ヘラ切りする。ともに 10 世紀前半に位置付けられる。溝状遺構の時期は、52・53 から、10 世紀前半と考えられる。

SD43 (第 32 図)

調査区北東部で検出した溝状遺構であり、南北端は調査区外に延びる。SD44 を切ることから、SD43 が後から出現したことがわかる。断面形は逆台形を呈し、幅 0.67 m、深さ 0.18 m を測る。主軸方向は N - 68° - W である。埋土は淡灰褐色砂質土であり、流水の痕跡を示す砂層は堆積していない。近接する SD42 とは主軸方向を揃え、埋土も類似するため近接した時期に掘削されたと見られる。

出土遺物は須恵器、土師質土器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、SD42 との関係から、10 世紀前半と考えられる。



第32図 IV・V区 SD28～31・33～47断面図（1/40）

SD44(第 32 図)

調査区北東部で検出した溝状遺構である。SD43・45に切られることから、SD44が先行して出現したことがわかる。断面形は浅い皿状を呈し、幅 0.51 m、深さ 0.07 m を測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物はない。溝状遺構の時期は、埋土と SD45 に切られることから、9世紀後半～10世紀前半と考えられる。

SD45(第 32・33 図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。中央部で東に延びる小規模な溝状遺構を伴う。SD44を切り、SD30に切られることから、両者の間の時期に出現したことがわかる。また、b断面やIV・V区調査区東壁を見ると、包含層の堆積中に掘削されていることがわかる。調査区東壁では、掘り込み面は II⑪層であり、埋没後に II⑬層が上位に堆積する。断面形は浅い皿状を呈し、幅 0.3 ~ 1.88 m、深さ 0.18 m を測る。主軸方向は N - 30° - W である。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水の痕跡を示す砂層は堆積していない。

出土遺物は土師器杯（54）、須恵器皿（55・56）・杯蓋（57）・杯身（58～60）・壺（61）、打製石鎌（62）、ナイフ形石器（63）等が少量ある。54は体部が直立気味で器壁はやや厚い。55・56は体部がやや外傾し、10世紀前半に位置付けられる。56は底部を回転ヘラ切りする。57は器高が高く、器形はやや丸みを帯びる。58は体部が直線的で箱型の形状であり、59・60と同様に、底部と体部の境界は角張る。59・60は、底部と体部の境界に小さい高台を貼り付ける。どちらも高台の接地面は外側である。57～60は7世紀末～8世紀代に位置付けられる。61は内面に当て具痕が著しい。62は平基式で基部の調整は縁辺部より細かい。63はプランティング状の剥離が見られるが、対辺でも小さい剥離を加える。溝状遺構の時期は 55・56 から、10世紀前半と考えられる。

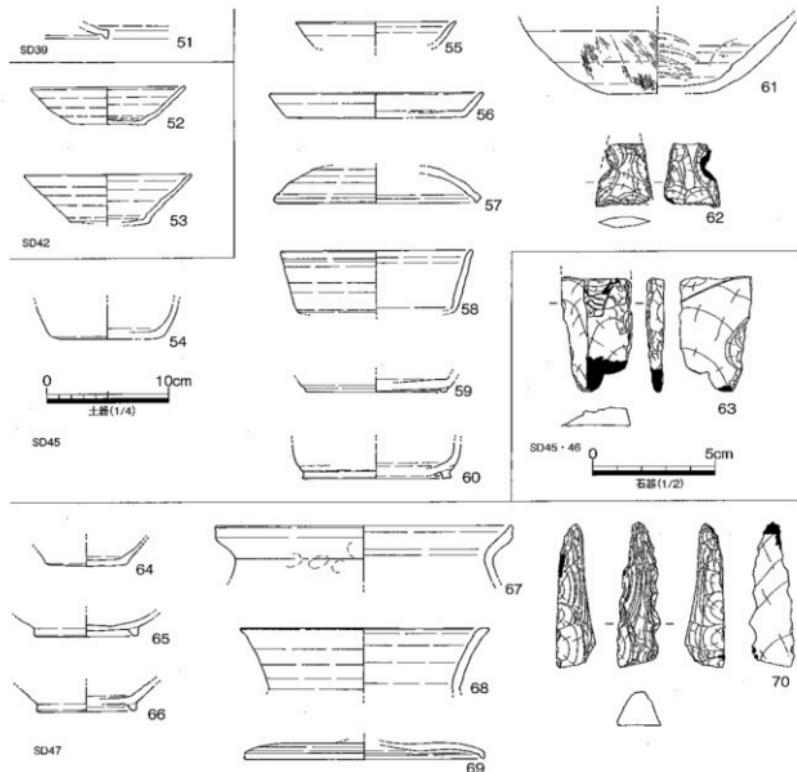
SD47(第 32・33 図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。南・北端は調査区外に延び、南部は VI 区でも検出された。波板状圧痕を切り、SB01、SD29・30・34・38 に切られることから、波板状圧痕と SB01、SD29・30・34・38 の間の時期に出現したことがわかる。断面形は皿状ないし逆台形を呈し、幅 2.06 m、深さ 0.27 m を測る。主軸方向は N - 31° - W である。埋土は淡灰褐色系砂質土であり、流水の痕跡を示す砂層は堆積していない。

出土遺物は土師器杯（64）・椀（65・66）、土師質土器壺（67）、須恵器壺（68）・杯蓋（69）、角錐状石器（70）が少量ある。64は体部下位が強いナデにより凹み、底部を回転ヘラ切りする。10世紀前半に位置付けられる。65は体部から底部にかけて丸味を帯びる。66は底部と体部の境界が角張る器形であり、断面方形のやや高い高台を貼り付ける。9世紀後半に位置付けられる。67は口縁部を外反させ、端部を強いナデにより上方へ拡張する。68は口縁部を弱く外反させ、端部は平坦に仕上げる。69は外面に降灰が著しい。70は剥離の大きさを揃え、丁寧な調整を施す。溝状遺構の時期は、64・65 から、10世紀前半と考えられる。

土坑

IV・V区で検出された土坑は SK12 を除き全て波板状圧痕と考えられ、大多数を占める。また、波板状圧痕は道路状遺構に伴う事例も見られる特殊な遺構である。このため「土坑」の項目でなく、次の「波板状圧痕」の項目で報告する。(ただし、波板状圧痕も遺構略号に「土坑」を意味する「SK」を使用する)



第33図 IV・V区 SD39・42・45・46・47出土遺物 (1/4・1/2)

SK12(第34図)

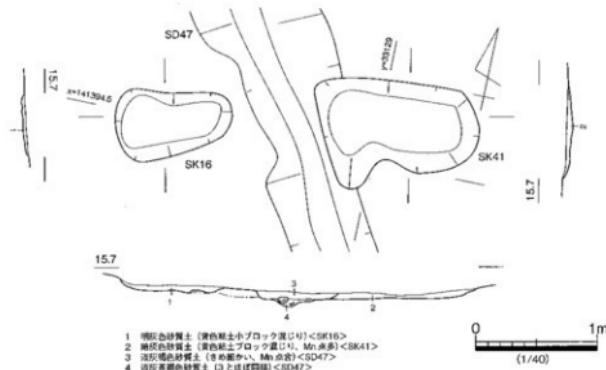
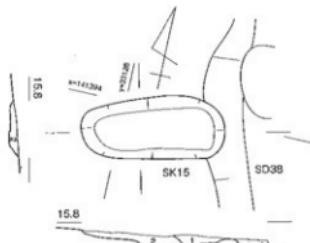
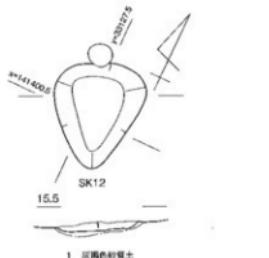
調査区北部で検出した土坑である。平面形は三角形状であり、断面形は浅い皿状を呈する。規模は長径 0.85 m、短径 0.72 m、深さ 0.07 m を測る。埋土は灰褐色砂質土である。

出土遺物は土師質土器がごく少量ある。土坑の時期は、埋土から9世紀後半～11世紀前半と考えられる。

波板状压痕(第34～37図、第1表)

〈概要〉

波板状压痕は調査区のほぼ全体において31基検出された。これらはSD38・47等に切られる。また、集中して分布する箇所と主輪方向に違いがあり、「年報」では3群(1群は北側に、2・3群は南側に分布し、2群は1・3群と主輪方向を違える。)に区分されている。また、他の特徵(埋土・含有物等)でも1・3群では類似し、2群は相違する。



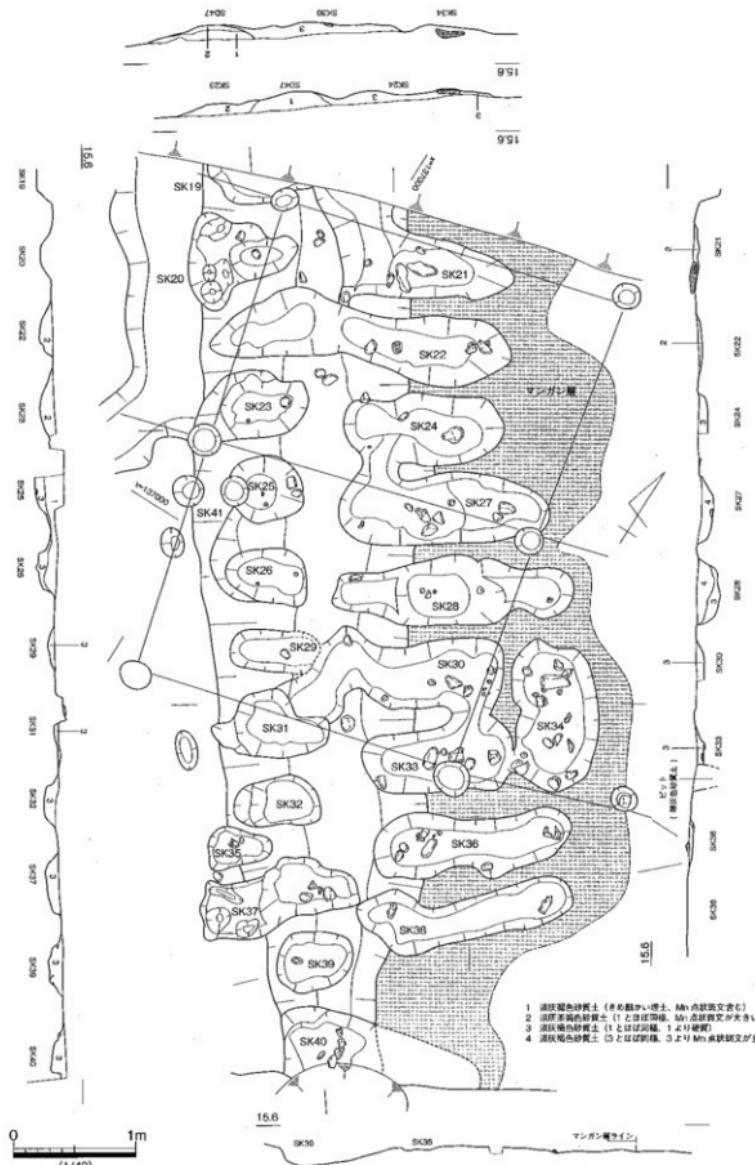
第34図 M・V区 SK12・14・15～17・41 平・断面図 (1/40)

まず埋土は、1・3群は灰褐色系砂質土で、他の古代遺構と類似する。また、地山ブロックは含まない。一方、2群では地山ブロックを含む明灰色砂質土であり、人為的に埋め戻された可能性がある。含有物に関しては、前者では不規則に散在する拳大・人頭大の砾が少量見られたが、2群では出土していない。なお、前者では圧痕の壁面と底面が硬化した状態が確認できる。ただし、これらを含めた周辺部はマンガン層の沈着が著しいために、これによる固結か、人為的な敲き締めなどを反映するのか等については不明である。また、こうしたマンガン層は1・3群の東側へ約1mの範囲まで広がっていた。したがって、圧痕付近は地形的にやや凹んでいた可能性がある。

以下では各群に大別して報告する。なお、個々の遺構の詳細は、第1表の波板状圧痕計測表をご覧いただきたい。

<1群> SK19～40						
遺構名	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方向
SK19	不整円？形	逆台形	0.88 以上	0.24 以上	0.12	N-69°-E 1群西
SK20	不整椭円形	逆台形	0.88	0.48	0.1	N-59°-E 1群西
SK21	不整椭円形	浅い皿状	1.4	0.48	0.05	N-60°-E 1群東
SK22	不整長椭円形	浅い皿状	2.32	0.58	0.11	N-64°-E
SK23	椭円形	逆台形	0.88	0.55	0.12	N-57°-E 1群西
SK24	椭円形	逆台形	1.3	0.56	0.04	N-58°-E 1群東
SK25	円形	逆台形	0.68	0.54	0.24	N-58°-E 1群西
SK26	椭円形	逆台形	0.66	0.46	0.17	N-58°-E 1群西
SK27	椭円形	逆台形	1.72	0.56	0.1	N-57°-E 1群東
SK28	椭円形	逆台形	1.94	0.57	0.2	N-58°-E 1群東
SK29	椭円形	逆台形	0.74	0.34	0.06	N-59°-E 1群西
SK30	方形	逆台形	1.58	0.58	0.08	N-58°-E 1群東
SK31	不整長方形	逆台形	0.98	0.58	0.1	N-58°-E 1群西
SK32	方形	逆台形	0.7	0.4	0.1	N-65°-E 1群西
SK33	方形	逆台形	1.24	0.52	0.06	N-51°-E 1群東
SK34	方形	逆台形	1.2	0.69	0.09	N-37°-W 1群東
SK35	方形	逆台形	0.53	0.34	0.08	N-53°-E 1群西
SK36	異椭円形	浅い皿状	1.64	0.5	0.03	N-61°-E 1群東
SK37	不整長椭円形	逆台形	1.3	0.48	0.09	N-46°-E 1群西
SK38	長方形	逆台形	1.64	0.39	0.02	N-45°-E 1群東
SK39	隅丸方形	逆台形	0.64	0.46	0.11	N-50°-E 1群西
SK40	長椭円形	逆台形	1.58 以上	0.54 以上	0.11	N-61°-E 1群西
<2群> SK14～18・41						
遺構名	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方向
SK14	不整椭円形	浅い皿状	0.96 以上	0.5	0.04	N-78°-E
SK15	椭円形	浅い皿状	1.18	0.5	0.08	N-77°-E
SK16	方形	浅い皿状	0.96	0.6	0.1	N-72°-E
SK17	方形	浅い皿状	1.02 以上	0.45	0.05	N-80°-E
SK18	長椭円形	浅い皿状	1.82 以上	0.55	0.12	N-77°-E
SK41	不整方形	浅い皿状	1.3	0.74	0.08	N-79°-E
<3群> SK42～44						
遺構名	平面形	断面形	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	主軸方向
SK42	不整円形	浅い皿状	0.66	0.63	0.11	N-58°-E
SK43	方形	浅い皿状	1.08	0.5	0.05	N-54°-E
SK44	不整椭円形	浅い皿状	0.68	0.5	0.06	N-67°-E

第1表 波板状圧痕計測表



第35図 IV・V区波板状圧痕平・断面図 (1/40)

〈1群〉

SK19～40が該当する。立地的には2,3群よりやや勾配がある緩斜面に位置し、密集して検出された。これらは東西の2列に並ぶ別単位として細分できる。(以下では「1群西」、「1群東」と記載する)1群西はSD47の最深部付近に連続して掘削される。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な逆台形で、長径は0.6～0.9mに収まるものが多い。また、圧痕群の底面はSD47の底面より約0.15m深い。1群東はSD47の東肩と重複して連なる。平面形は長楕円形、断面形は底面が平坦な浅い逆台形で、長径は1.3～2m、深さ0.05～0.1mを測るものが多い。このように両者には相違が大きく、かつ長径の中心軸も相互にずれて段違いとなる。これらの相違点が微妙な時期差や機能差を示すかも知れない。

各遺構からの出土遺物には、須恵器皿(71)・杯蓋(76・79)・杯身(72・73・75・82)・壺(77)・壺、土師器杯、土師質土器(81)・羽釜、須恵器円面硯(78)、青銅製品(74)、石器(80)等が少量ある。71・82は底部を回転ヘラ切りする。10世紀前半に位置付けられる。72・73・75は底部と体部の境界に、外側で接地する小さい高台を貼り付ける。8世紀後半に位置付けられる。74は、縁辺部が内部よりも分厚く隆起する。また、縁辺部の中でも図の上部が右側よりも厚みが大きい。78は方形の透かし孔をもつ。79は口径が小さく器高が高い。頂部はヘラ切り未調整である。7世紀前半に位置付けられる。80は形態が二等辺三角形状を呈し、各辺にはまばらに小さな剥離の連続が見られる。よって、石器としての整形の意図がうかがえるが、器種は不明である。波板状圧痕1群の時期は7～8世紀代の遺物が見られるが、71・82の時期から、10世紀前半と考えられる。

〈2群〉

SK14～18、41が該当する。立地的にはほぼ平坦な緩斜面に位置し、散漫な分布状況を示す。これらの多くは南北方向へ1列に並び、SD38に切られる。平面形は長楕円形、断面形は底面が平坦な浅い皿状で、長径は1.0～1.4m、深さ0.05～0.1mに収まるものが多い。

各遺構からの出土遺物は、須恵器・須恵器壺、土師器、土師質土器等がごく少量ある。波板状圧痕2群の時期は、主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

〈3群〉

SK42～44が該当する。3群は1群西から南に接した延長上に位置し、主軸方向も備える。このため本来は一連の遺構であった可能性が高いが、検出した3基の付近には他に圧痕が見られない。立地的には、ほぼ平坦な緩斜面に位置する。平面形は楕円形、断面形は底面が平坦な皿状で、長径は約0.7～1.1mに収まる。また、圧痕群の底面は、SD47の底面より約0.05m深い。各遺構からの出土遺物は、須恵器杯身・高杯(83)・壺、土師質土器等がごく少量ある。波板状圧痕3群の時期は、波板状圧痕1群との関係から、同じく10世紀前半と考えられる。

(2) 中世の遺構・遺物

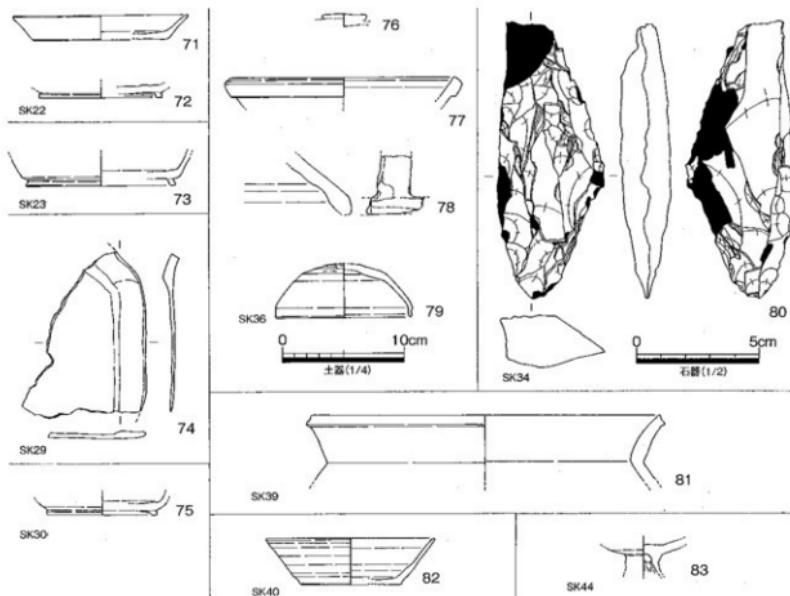
SD29(第37図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。断面形はごく浅い皿状であり、幅0.32m、深さ0.05mを測る。埋土は灰茶褐色砂質土、主軸方向はN-72°-Eである。

出土遺物は弥生土器、須恵器がごく少量ある。溝状遺構の時期は、埋土から中世と考えられる。

SD30(第37図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。SD35・45・47、波板状圧痕を切ることから、SD30が後か



第36図 IV・V区SK22～44出土遺物 (1/4・1/2)

ら出現したとわかる。断面形は浅い皿状を呈し、幅1.28m、深さ0.22mを測る。主軸方向はN-72°-Eである。埋土は灰褐色系砂質土であり、流水の痕跡を示す砂層は堆積していない。

出土遺物は土師器小皿(84・85)・杯・椀(87)・皿(88)、須恵器杯蓋・杯身(86)が少量ある。84は口縁部が短く直立し、85の同部はやや長く直立気味である。ともに底部を回転糸切りし、13世紀代に位置付けられる。88は外面の体部中央が強いナデにより凹む。86～88は古代に位置付けられる。溝状遺構の時期は、84と85から13世紀代と考えられる。

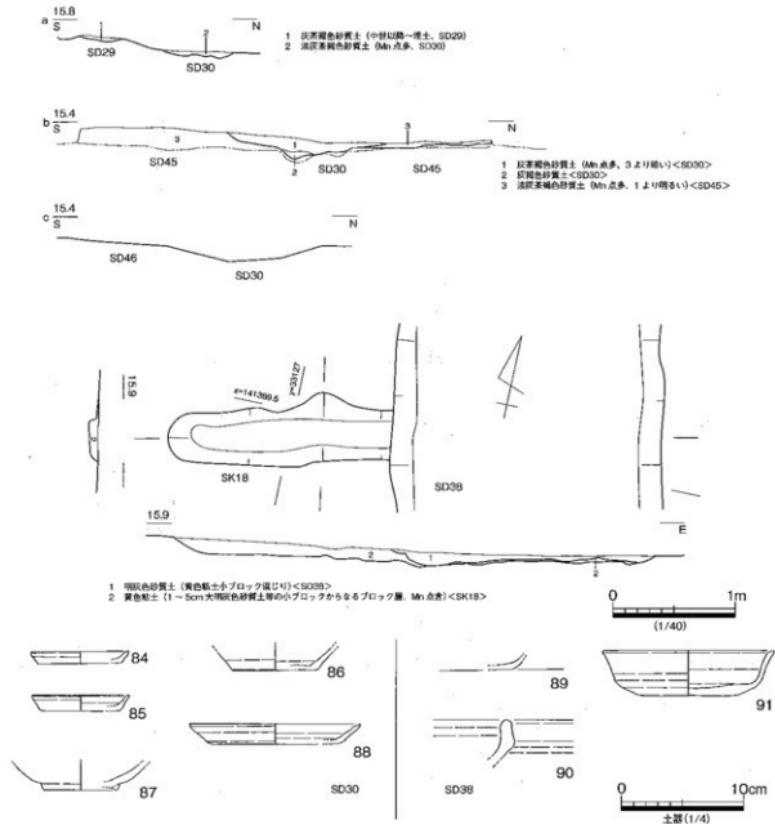
SD38(第37図)

調査区中央部で検出した溝状遺構である。SD47と波板状圧痕を切ることから、SD38が後から出現したことがわかる。断面形はごく浅い皿状を呈し、幅2.21m、深さ0.12mを測る。主軸方向はN-14°-Wである。埋土は明灰色砂質土である。

出土遺物は土師器杯(89)、土師質土器鉢(90)・羽釜、須恵器杯身(91)・高杯・甕が少量ある。89は器壁がやや厚く底部と体部の境界が丸みを帯びる。中世前半に位置付けられる。91は口縁部が直立し、端部を小さく外反させる。10世紀頃に位置付けられる。溝状遺構の時期は、89から中世前半と考えられる。

(3) 包含層出土遺物 (第38図)

IV・V区包含層からは多量の遺物が出土した。内容的にはほとんどが古墳時代～中世の土器である



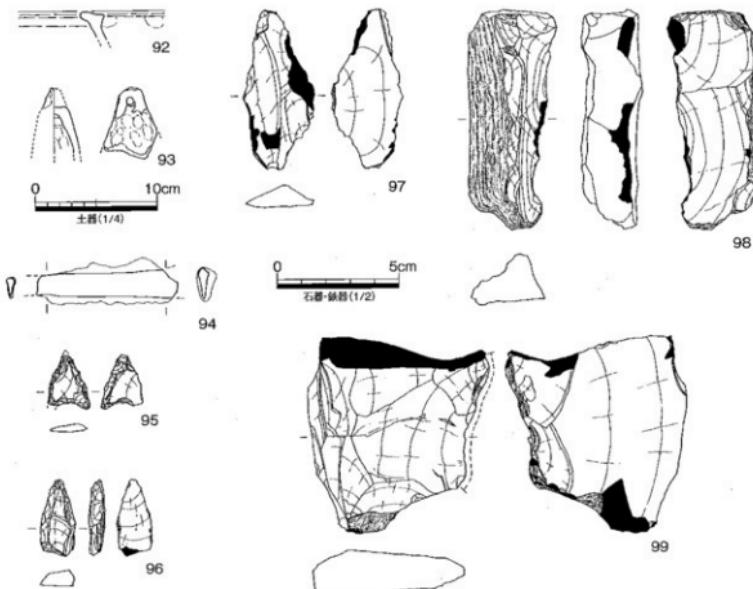
第37図 IV・V区 SD30・38、SK18 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

が、鉄製品、石器等も見られる。92は土師質土器土釜で、口縁部、つばともにごく短く一体化している。16世紀代に位置付けられる。93は土師質蛸壺で、内外面に顯著な指オサエが見られる。94は鉄製の刀子で、刃部は非常に薄い。95は凹基式の打製石鎌で、縁辺部の調整は稚である。96はナイフ形石器で、刃縁部にも調整が見られ、二側縁加工を行っている。98・99は石核で、98は交互に横長剥片を採取している。99は左図の右縁辺部につぶれが見られる。

VII区の調査成果

以下でVI区の報告を行うが、遺構名称の前に調査区名を付けていないものは全てVI区の遺構である。

(1) 古代の遺構・遺物



第38図 IV・V区包含層出土遺物 (1/4・1/2)

柵列跡

SA01(第40図)

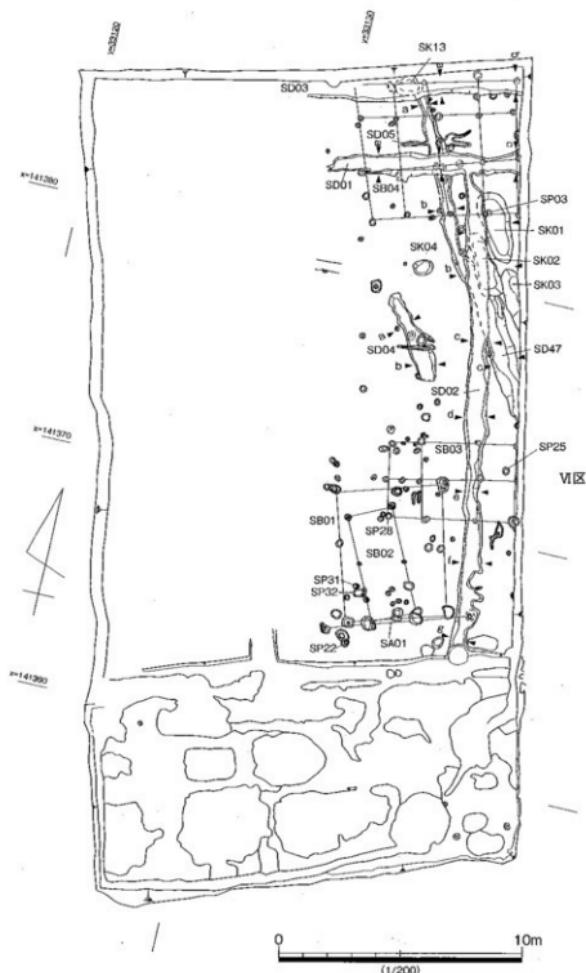
調査区南東部で検出した柵列跡である。SP37・40がSB02を構成する柱穴跡を切り、SP42がSD02に切られることから、SA01が両者の間の時期に出現したことがわかる。規模は3間以上(6.1m以上)、主軸方向はN-76°-Eを測る。柱穴跡の平面形は方形か、やや歪な方形であり、径0.4~0.6m、深さ0.2~0.36mを測る。SP37・40・42は底面付近に拳大の礫を数個かため、根石とする。南部が段カットされているため確定できないが、以上の柱穴跡の規模と構造から本来は掘立柱建物跡であった可能性が高い。

出土遺物は土師質土器甕(100)、土師器杯(101・105)、黒色土器A類椀(102・103)、須恵器杯(104)、壁土等がある。100は頸部外面に縦ハケ、口縁部内面に横ハケを加える。103は内外面に丁寧なヘラミガキを施す。柵列跡の時期は、102・103・105が10世紀前半に位置付けられるため、同時期と考えられる。

掘立柱建物跡

SB01(第41図)

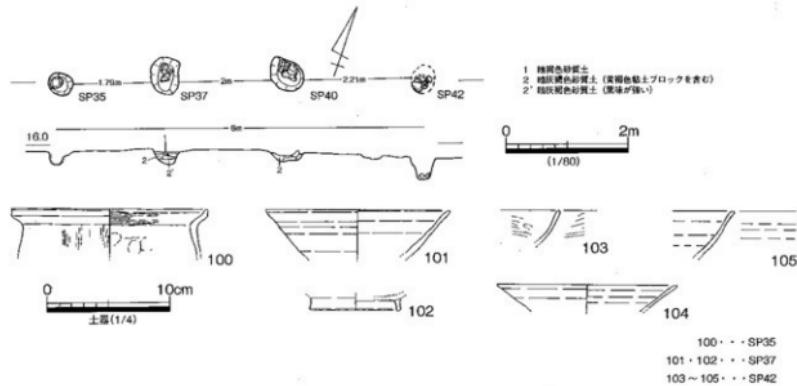
調査区南東部で検出した側柱建物跡である。規模は梁間2間×桁行2間(4.5m×5.6m)である。主軸方向はN-14°-Wである。柱穴跡の平面形はやや歪な方形と円形であり、径0.32~0.64m、深さ0.20~0.45mを測る。SP05・06・23・38・41では根石として1~数個の拳大の礫を底面に配置



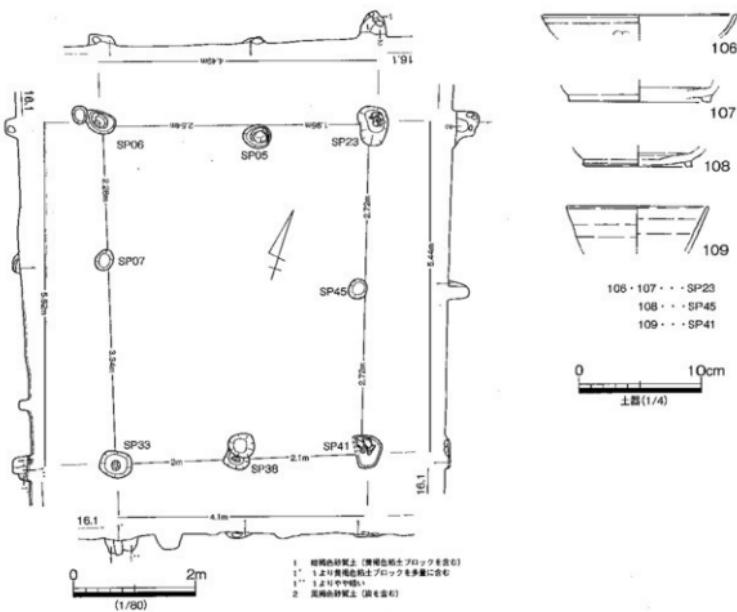
第39図 VI区全体図 (1/200)

する。なお、SP05～07・38・45はそれ以外の3穴より小さく、SP07はやや北へ外れる。こうした不揃いな状況から、建物復元に当たっては他の柱穴跡の組み合わせを考慮し、未検出の柱穴跡の確認に努めたが、検出されなかった。

出土遺物には土師器細片、黒色土器A類楕(106)、須恵器杯(107～109)等がある。107・108は高台が底部と体部の境界に位置し、8世紀代と考えられる。建物跡の時期は、106・109が10世紀前半



第40図 VI区 SA01 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第41図 VI区 SB01 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

に位置付けられるため、同時期と考えられる。

SB02(第42図)

調査区南東部で検出した側柱建物跡である。SP39・47がSA01を構成する柱穴跡に切られることから、SB02が先行して出現したことがわかる。規模は梁間1間×桁行3間(1.9m×4.5m)である。主軸方向はN-27°-Wである。柱穴跡の平面形はほぼ円形であり、径0.20~0.44m、深さ0.16~0.2mを測る。桁行の柱間距離は北側で1.98mと2.36mであるのに対し、南側では1.44~1.08mと狭い。SP46では底面中央に根石が見られる。

出土遺物には土師器皿(110)・杯、土師質土器甕(111)等がある。110は口縁部端部を小さく摘み出し、底部を回転ヘラケズリする。建物跡の時期は110が10世紀前半に位置付けられるため、同時期と考えられる。

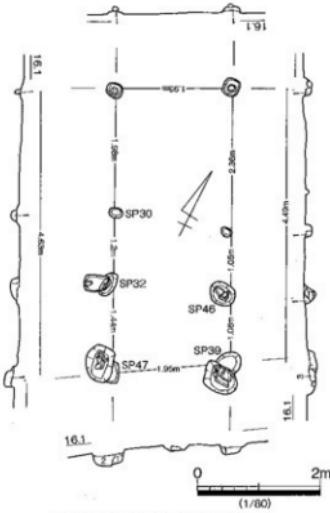
SB03(第43回)

調査区南東部で検出した総柱建物跡である。SP26・101・102は側溝により東部が破損されている。また、SP07・24・103がSD02に切られることから、SB03が先行して出現したことがわかる。規模は梁間2間×桁行3間以上（3.0 m × 5.1 m以上）である。主軸方向はN-78°-Eである。柱穴跡の平面形はほぼ円形であり、径0.2～0.6 m、深さ0.09～0.43 mを測る。桁行の柱間距離は、西側から1.2～1.5 m、2.3～2.5 m、1.4～1.6 mと不揃いである。

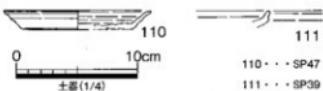
出土遺物には土師器杯(113・114)、楕(115)、須恵器杯蓋(112)・杯(116～118)等がある。113・114・118は底部を回転ヘラ切りする。115は底部と体部の境界が角張り、そこに高台を貼り付ける。建物跡の時期は、113・116～118が10世紀前半に位置付けられるため、同時期と考えられる。

SB04(第44回)

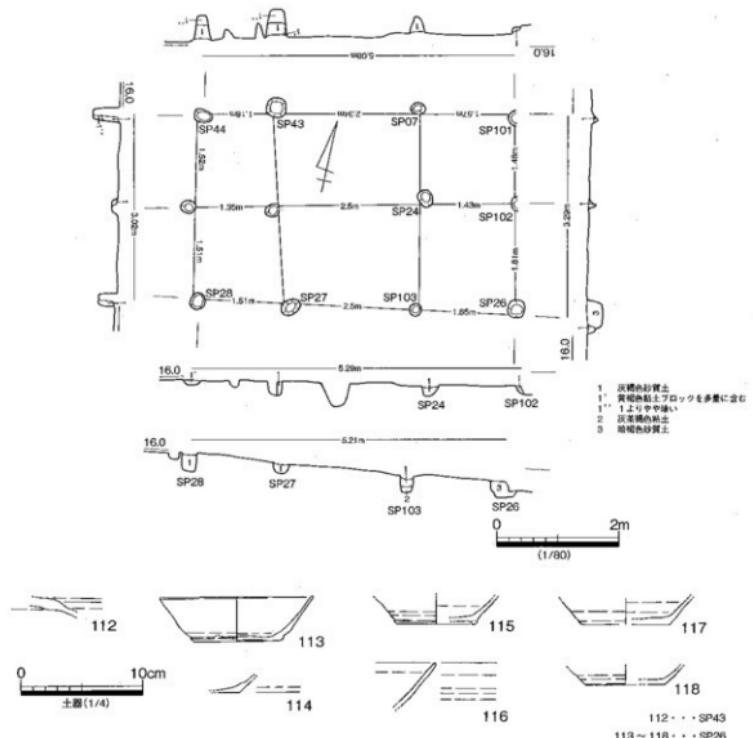
調査区北東部で検出した総柱建物跡である。南端の桁行を構成するSP04がSK01を、SP104がSD47を切る。また北端の桁行を構成するSP12・105～107がSD03に、南から2列目の東西柱列を構成するSP13・18・19・108・109がSD01に切られることから、SK01、SD47、SB04、SD01・03の順序で出現したことがわかる。規模は梁間3間×桁行4間以上(5.5 m × 6.0 m以上)である。主軸方向はN-18°-Wである。柱穴跡の平面形は円形であり、径0.2～0.35 m、深さ0.14～0.28 mを測る。出土遺物には須恵器杯(119)、土師器杯(120)等がある。119・120は、底部を回転ヘラ切りする。建物跡の時期は、119が10世紀前半に位置付けられるため、同時期と考えられる。



- 1 緑灰褐色砂質土(緑灰色砂土、黄褐色砂土ブロックを含む)
- 1 1より青褐色砂質土ブロックを多量に含む
- 2 緑褐色砂質土(土壤、土部材を含む)
- 3 緑灰褐色砂質土(黄褐色砂土ブロックを含む) SAB1の構成柱穴跡



第42図 VI区 SB02平・断面図(1/80)、
出土遺物(1/4)



第43図 VI区 SB03 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

溝状遺構

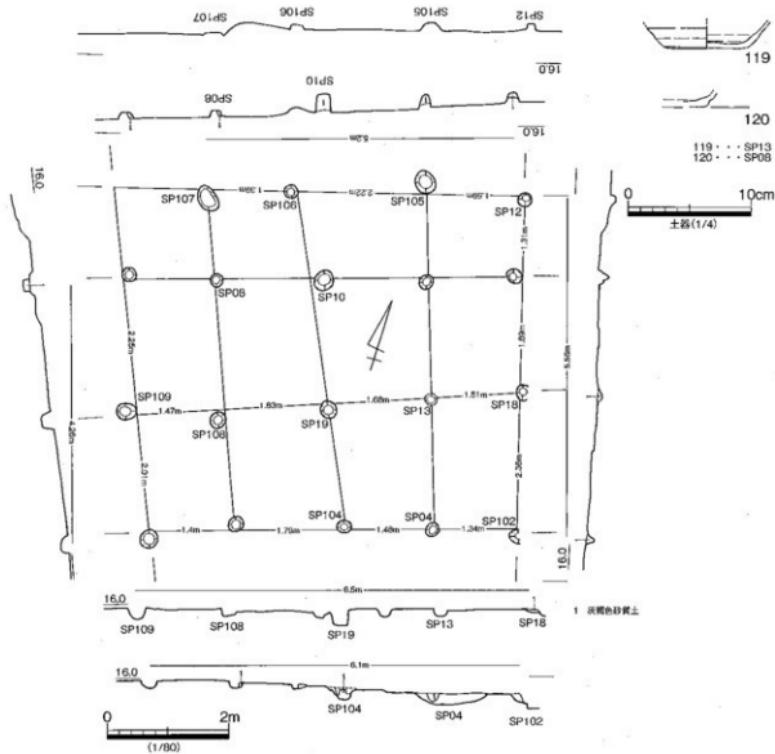
SD01(第45・46図)

調査区北東部で検出した溝状遺構である。東部は南側でSD02に接続し、東端は調査区外に延びる。SB04を構成する柱穴跡を切ることから、SD01が後から出現したことがわかる。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.5~1.1m、深さ0.04~0.08mを測り、底面は地形の傾斜に沿って東に下る。主軸方向はN-74°-Eである。埋土は灰褐色砂質土であり、流水があった痕跡は見られない。

出土遺物には土師器細片、須恵器細片、土師質土器壺(121)等がある。121は口縁端部を上方に摘み上げる。溝状遺構の時期は、SD02と接続することから10世紀前半~11世紀前半と考えられる。

SD02(第45・46図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。北端部でSD01に接続し、南端は削平により失われる。SA01とSB03を構成する柱穴跡、SD47、SK01・02を切ることから、SD02がこれより後から出現したことがわかる。平面形は等高線に沿うようにやや弓なりであり、断面形は浅い皿状を呈する。幅0.3



第44図 VI区 SB04 平・断面図 (1/80)、出土遺物 (1/4)

～1.05m、深さ0.05～0.14mを測り、底面は地形的に最も高いSD04付近で最も高く、そこから地形の傾斜に沿って南北方向へ下る。主軸方向はN-16°-Wである。埋土は灰褐色系砂質土であり、流水があった痕跡は見られない。

出土遺物は土師器杯(122～126)・椀(127)、黒色土器A類椀(129・130)、須恵器皿(131・132)・杯(128・133～136)、土師質土器甕(137・138)・土釜(139)、平瓦(140)等がある。122は口縁端部内面に強いナデが施され、細くなる。127は底部が丸味を帯び、高台は断面三角形を呈する。130は見込みに細かいヘラミガキを分割して加える。132・134～136は底部を回転ヘラ切りする。138は外面を縦ハケで調整する。139は口縁部とつばを欠損するが、つばは長くしっかりした作りである。129・131・132・134～136は9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。ただし、所属時期が明確なこれらの遺物を含め、ほとんどの遺物はSK02の至近部で出土した。SK02が当該期に属することと、遺構の切り合い関係から、これらの遺物はSK02からの混入であると考えられる。溝状遺構の時期は、主軸方向より10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

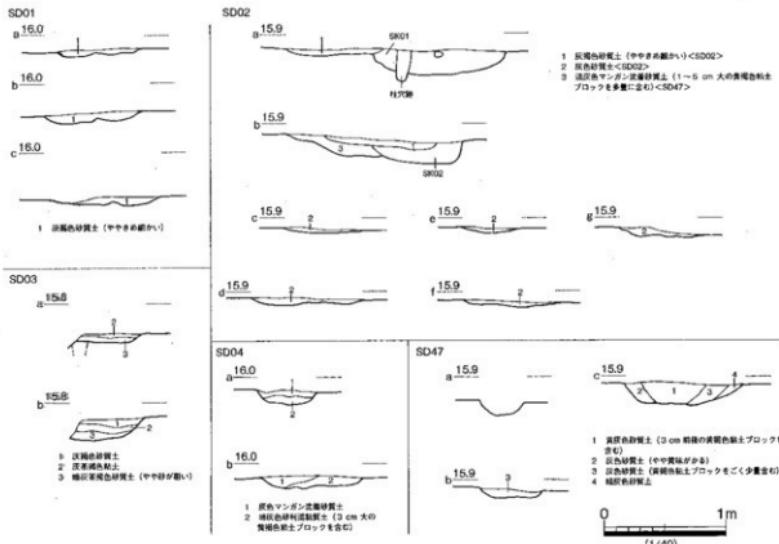
SD04(第45・46図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。平面形は南側でやや膨らみ、断面形は皿状を呈する。幅0.45～0.9m、深さ0.1～0.15mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。出土遺物は土師器細片、黒色土器A類楕(142)、土師質土器羽釜(143・144)、須恵器杯・皿(145)、壁土等がある。143は内面に丁寧な横ハケを、144は板ナデを加える。溝状遺構の時期は142が10世紀前半、145が10世紀代に位置付けられるため、10世紀前半と考えられる。

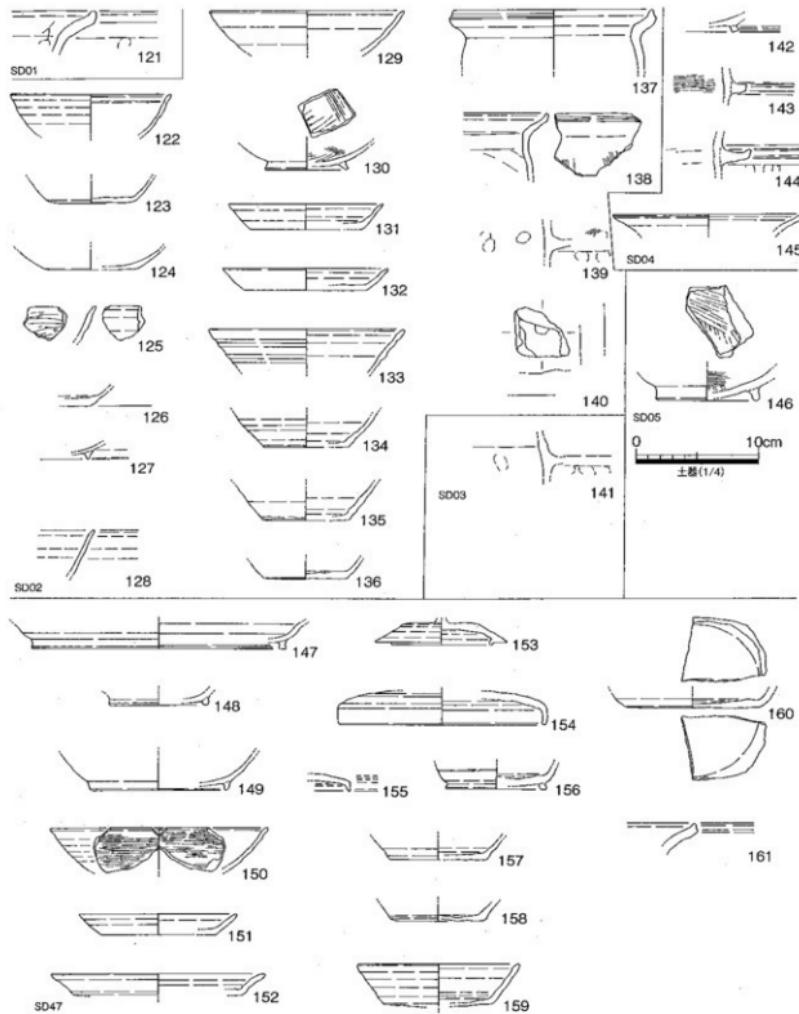
SD47(第45・46図)

調査区北東部で検出した溝状遺構である。V区から南に連続しており、調査区外に延びる。SB04を構成する柱穴跡、SD01～03、SK02に切られることから、SD47がこれらに先行して出現したことがわかる。断面形は逆台形を呈し、幅0.35～1.1m、深さ0.09～0.19mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。底面はSK04付近で最も高く、そこから地形の傾斜に沿って南北方向へ下る。C断面以南が北部より幅、深さとともに拡大する。埋土は基本的に灰褐色系砂質土であり、流水があった痕跡は見られない。ただし、C断面以南では土層断面から見て再掘削が行われた可能性がある。

出土遺物は土師器皿(147)・碗(148・149)、黒色土器A類楕(150)、須恵器皿(151・152)・蓋(153～155)・杯(156～160)、土師質土器甕(161)等がある。148は底部から体部にかけて角張る器形で、その境界に断面方形の高台を貼り付ける。150は内外面に細密なヘラミガキを施す。157・158・160は底部を回転ヘラ切りする。時期は147・153～156が7～9世紀代、149・150が9世紀末～10世紀初頭、151・159が10世紀前半である。出土遺物の時期幅と再掘削の可能性を考慮すると、長期にわたって存続した可能性がある。ただし、北部のIV、V区でも同様に古い時期の遺物が混じることと、小規模であることから溝状遺構の時期は10世紀前半と考えられる。



第45図 VI区 SD01～04・47断面図(1/40)



第46図 VI区 SD01～05・47、出土遺物 (1/4)

土坑

SK01(第47図)

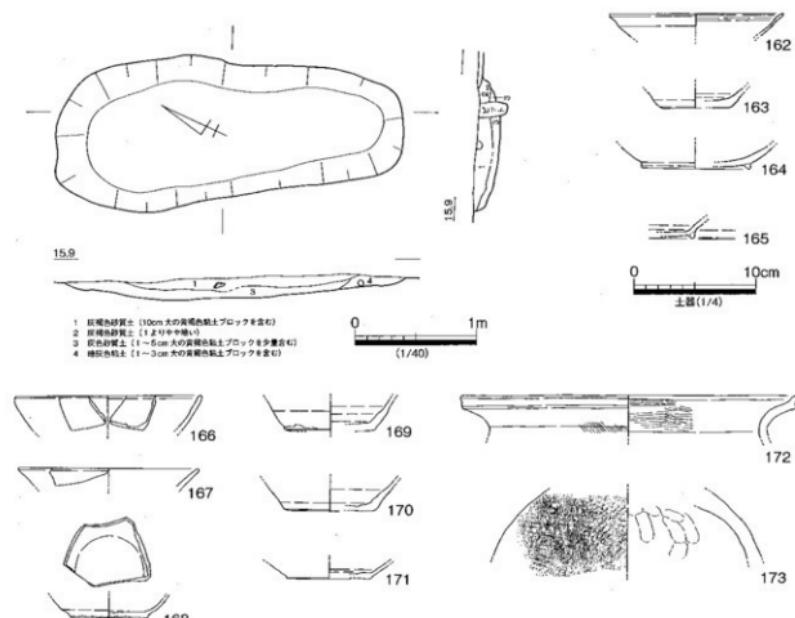
調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は長椭円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。壁は

なだらかに落ち、床面は中央に向かって緩やかに下る。規模は長径 2.88 m、短径 1.25 m、深さ 0.18 m を測る。主軸方向は N - 30° - W である。SB04 を構成する柱穴跡、SD02 に切られることから、SK01 が先行して出現したことがわかる。埋土は灰褐色系砂質土であるが、黄褐色粘土ブロックを含むものが多く、人為的に埋め戻されたと考えられる。

出土遺物は土師器杯（162・163）・碗（164・165）、須恵器杯（166～171）、土師質土器壺（172）、須恵器壺（173）等がある。162 は口縁部外側が強いナデにより凹む。163 は底部を回転ヘラ切りする。164 は底部から体部にかけて丸みをもち、165 は角張る。168～170 は底部を回転ヘラ切りする。172 は頸部外側、口縁部内側にハケ目調整を施す。173 は外面にタタキ目、内面に顯著な指オサエが見られる。163・164・166・167・169～171 は 9 世紀末～10 世紀前半、165 が 9 世紀後半に位置付けられるが、関連が深い SK02・03 の所属時期や、遺構の切り合いから、土坑の時期は 10 世紀前半と考えられる。

SK02(第 48・49 図)

調査区の北東部で検出した土坑である。平面形はやや歪な長方形であり、断面形は浅い皿状を呈する。壁はなだらかに落ち、床面はやや凹凸があるが、中央に向かって緩やかに下る。規模は長径 2.73 m、短径 1.0 m、深さ 0.23 m を測る。主軸方向は N - 36° - W である。SD47 を切り、SD02 と SK03 に切られることから、SK02 が前者と後二者との間の時期に所属することがわかる。埋土は 3 層に区分されるが、いずれも黄褐色粘土ブロックを含むため人為的に埋め戻されたと考えられる。



第 47 図 VI 区 SK01 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)

出土遺物は28リットル入りコンテナ1箱分と比較的多いが、破片ばかりである。平面的にも、出土層位の点からも特定器種が偏ることなく、出土した。人為的な埋め戻しが想定されることからこれらは廃棄されたと見られる。遺物の大半は2・3層から出土し、1層からは乏しい。1層からは土師器、須恵器、土師質土器、壺(174)等が出土した。174は小片であり、部位は判明しないが、顕著なハケ目が見られる。2層からは土師器椀(175)、黒色土器A類椀(176～180)、須恵器杯(181～184)、土師質土器甕(185)等が出土した。175は断面三角形の小さい高台をもつ。176は口縁部の外外面に、177・179は見込みに密なヘラミガキを加える。181・182は底部を回転ヘラ切りする。183・184は底部と体部の境界付近に高台をもち、8世紀代に位置付けられる。また175～182はいずれも9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。3層からは土師器杯(186～188)・椀(189)、須恵器杯(190)、土師質土器、甕(191)等が出土した。189は内面を横方向に板ナデ調整する。186・188・190が9世紀末～10世紀前半、189が9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる。2・3層からは土師質土器甕(192)、黒色土器A類椀(193)、須恵器杯(194)等が出土した。194は底部を回転ヘラ切りする。193・194は9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。出土層位が不明な遺物には土師器杯(195～200)・椀(201・202)、黒色土器A類椀(203～205)、須恵器杯(206～208)、土師質土器甕(209～211)等がある。196は口縁端部内面に強いナデを加え、凹ませる。また体部外表面下半部にヘラケズリを施す。199・206・207は底部を回転ヘラ切りする。204は見込みに分割してヘラミガキを加える。197～203・206・207は9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。以上のように層位ごとの時期差が認められない事実から、土坑が人為的に埋め戻されたという所見と整合する。土坑の時期は、出土遺物や密接な関係にあるSK01・03の時期から10世紀前半と考えられる。

SK03(第50図)

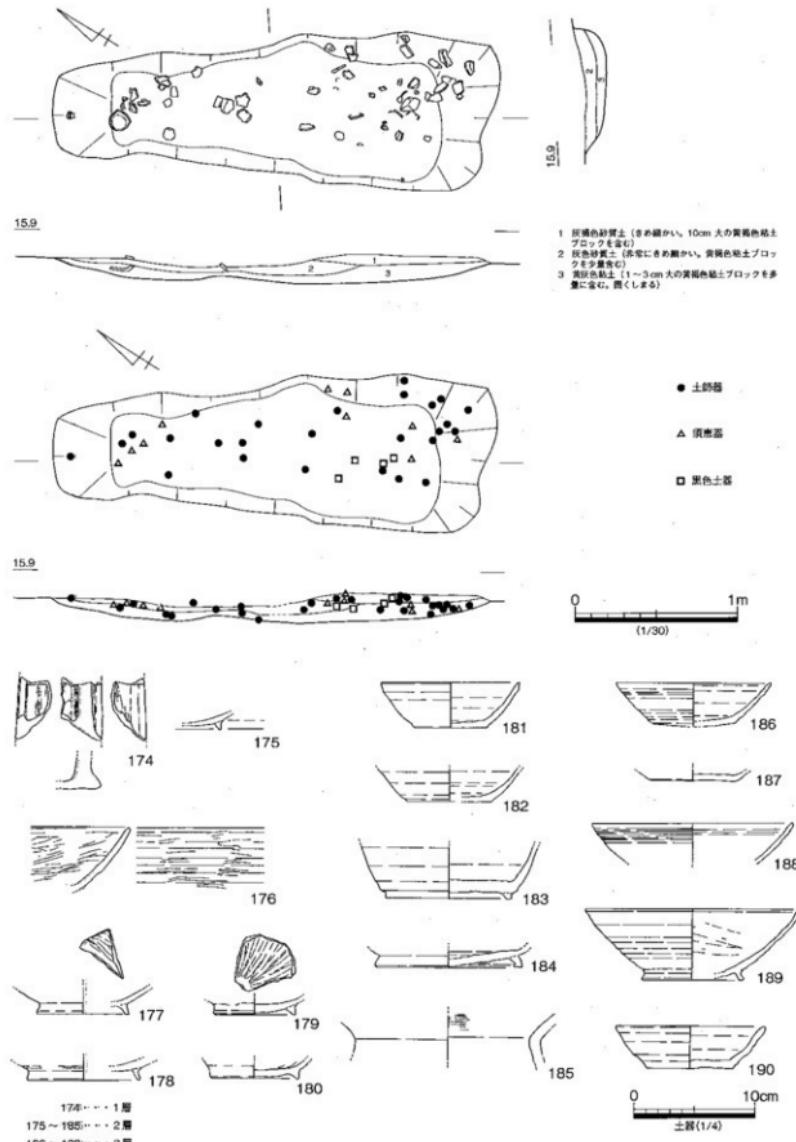
調査区の北東部で検出した土坑である。東側が調査区外に延びるが、平面形は長梢円形と推定される。断面形は皿状を呈する。壁はなだらかに落ち、床面はほぼ平坦である。規模は長径2.48m以上、短径0.88m以上、深さ0.27m、主軸方向はN-30°-Wを測る。北西隅でSK02を切ることから、SK03が後から出現したことがわかる。埋土は3層に区分される。1・2層では黄褐色粘土ブロックを含まないものの、SK02のそれと土質、堆積状況が酷似する。

出土遺物は土師器杯(212～216)・椀(217・218)、黒色土器A類椀(219～221)、須恵器杯(222～226)・壺(227)・甕(228・229)等がある。215・216は底部を回転ヘラ切りし、216は底部を高台状に段を設ける。217・218は底部から体部にかけて屈曲させ、小さい高台を各部位の境界に貼り付ける。216は10世紀代、217・218は9世紀後半に位置付けられる。220は見込みに分割ヘラミガキを施す。223～226は底部を回転ヘラ切りする。220・222～225は9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。土坑の時期は、出土遺物とSK02・03の時期及び遺構の切り合いから10世紀前半と考えられる。

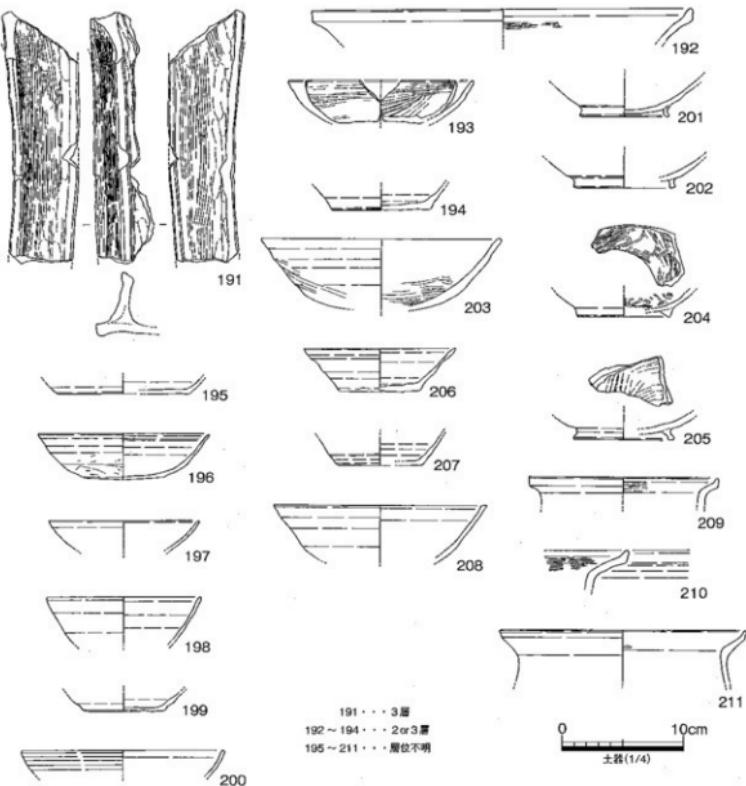
上記のとおりSK01～03は3基が密集して検出され、規模、平・断面形状、主軸方向、埋土が類似する。また出土遺物からもほぼ同時期に位置づけられるため相互の存在を意識して形成された同様な性格を持つ遺構群と見られる。その性格についてはSK02で土器片が多量に廃棄されていること、いずれも人為的な埋め戻しがなされていることより廃棄遺構と考えられる。

SK04(第51図)

調査区の北東部で検出した土坑である。平面形は梢円形であり、断面形は浅い皿状を呈する。壁はなだらかに落ち、床面はほぼ平坦である。規模は長径0.88m、短径0.63m、深さ0.09mを測る。主軸



第48図 VI区 SK02平・断面図 (1/30)、出土遺物① (1/4)

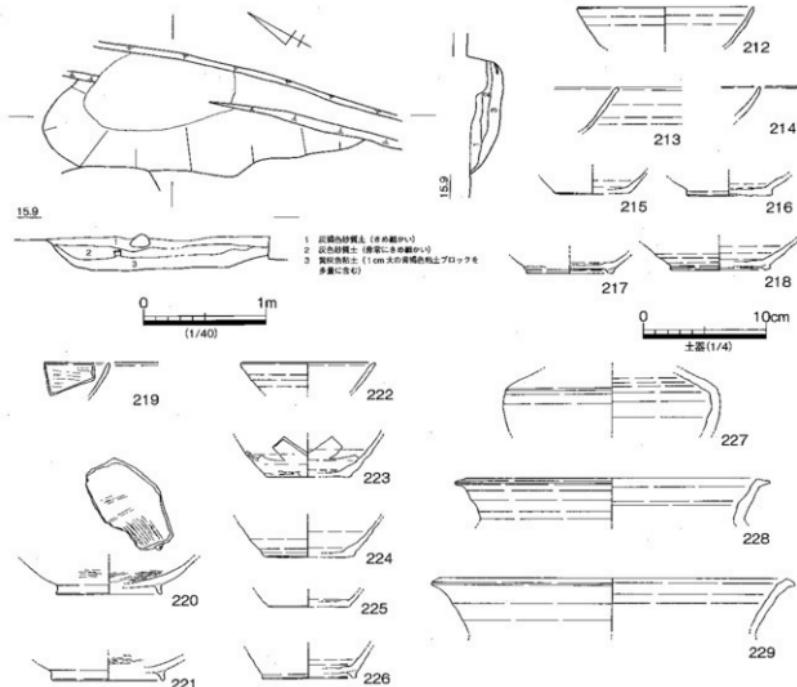


第49図 VI区 SK02出土遺物② (1/4)

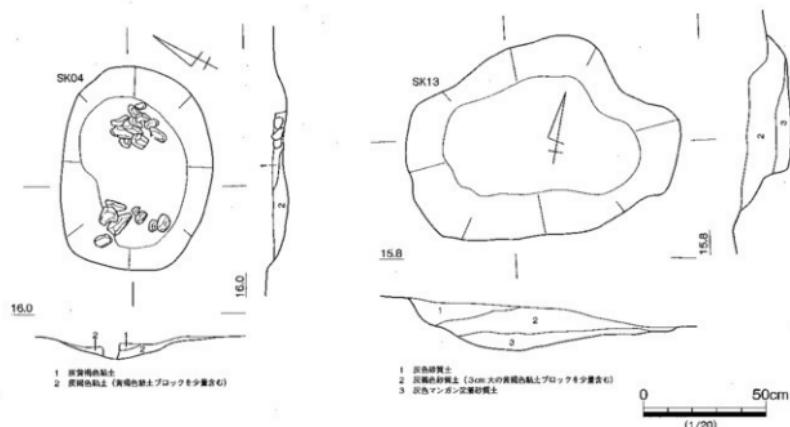
方向はN - 18° - Wである。埋土は2層に区分され、灰褐色系粘土が堆積する。東西両端の床面直上で拳大の礫が集中して出土した。出土遺物はないが、主軸方向から土坑の時期は、10世紀前半～11世紀前半と考えられる。

SK13(第51図)

調査区の北端部で検出した土坑である。平面形は北東部が凹む、やや歪な橢円形であり、断面形は東西方向で皿状を呈し、南北方向では南側で2段掘りとなる。規模は長径1.13m、短径0.81m、深さ0.18mを測る。主軸方向はN - 72° - Eである。SD03に切られることから、SK13が先行して出現したことがわかる。埋土は3層に分けられるが、概ね灰褐色系の砂質土である。出土遺物は土師器、須恵器がある。土坑の時期は主軸方向から10世紀前半～11世紀前半と考えられる。



第50図 VI区 SK03 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/4)



第51図 VI区 SK04・13 平・断面図 (1/20)

(2) 中世の遺構・遺物

溝状遺構

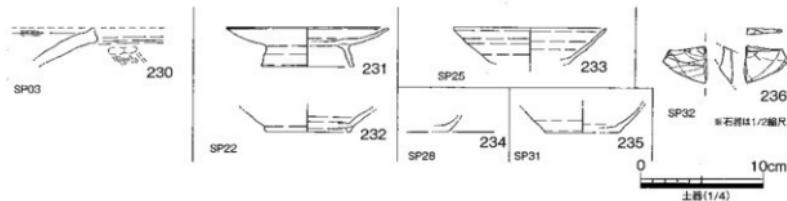
SD03(第45・46図)

調査区北東隅で検出した溝状遺構である。北端はIV・V区SD38と合流する。また東端は調査区外に延びる。SB04を構成する柱穴跡とSK13を切ることから、SD03が後から出現したことがわかる。断面形は皿状を呈する。幅0.6m以上、深さ0.06~0.17mを測り、底面は地形の傾斜に沿って東に下る。主軸方向はN-74°-Eである。埋土は灰褐色系砂質土であり、流水があった痕跡は見られない。出土遺物は土師器、土師質土器土釜(141)、サヌカイトの剥片がある。141は口縁部とつばを欠損するが、中世に位置付けられる。IV・V区SD38と合流することから、溝状遺構の時期は中世前半と考えられる。

(3) 柱穴跡出土遺物(第52図)

VI区で検出した掘立柱建物跡、柵列跡を構成しない柱穴跡からの出土遺物を図化した。230は土師質土器甕で、内外面に細かいハケ目を施す。231は高台付皿で、高台の高さが皿の器高と同程度と高い。232は土師器碗で、断面方形の小さい高台をもつ。233・235は須恵器杯、234は土師器杯である。236は翼状剥片で、刃部に調整は見られない。

以上の遺物は旧石器も1点含むが、大半は10世紀前後の土器である。これはVI区全体の出土遺物の時期と一致し、VI区でこの時期の集落跡が展開する状況と整合的である。



第52図 VI区SP03・22・25・28・31・32出土遺物(1/4)

VII区の調査成果

以下でVII区の報告を行うが、遺構名称の前に調査区名を付けていないものは全てVII区の遺構である。

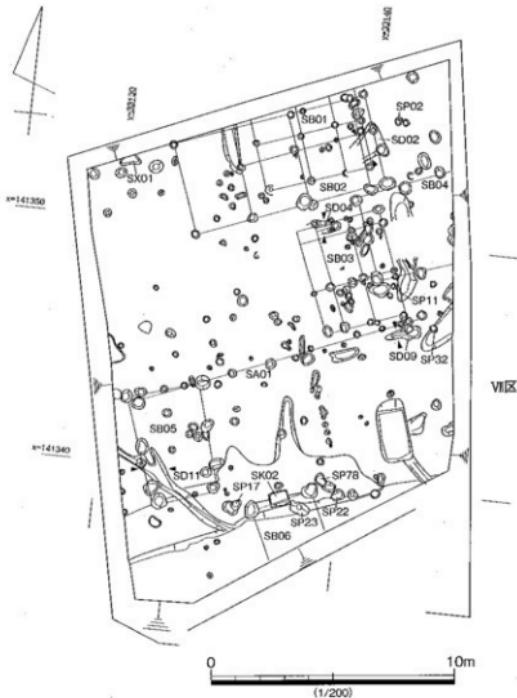
(1) 古代の遺構・遺物

柵列跡

SA01(第54・55図)

調査区中央部で検出した柵列跡である。規模は7間以上(12.4m以上)、主軸方向はN-68°-Eを測る。柱穴跡の平面形はやや不整な円形であり、径0.22~0.54m、深さ0.15~0.3mを測る。埋土は灰褐色系砂質土である。9世紀末~10世紀初頭に位置付けられるSB03とは近接しそうため、同時に併存しないと考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器甕(237)、土師質土器がごく少量ある。237は外面にタタキ・カキメがあり、内面に青海波文が見られる。柵列跡の時期は埋土と主軸方向、SB03との配置から、9世紀末~10世紀前半と考えられる。



第 53 図 VII 区全体図 (1/200)

建物跡

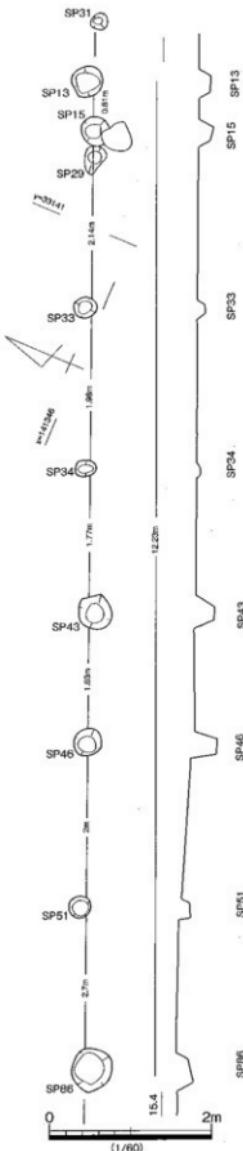
SB01(第 56 図)

調査区北部で検出した総柱建物跡の可能性がある遺構である。規模は梁間 1 間以上 × 衍行 3 間 (2.2 m 以上 × 4.21 m) である。東部の 2 間は柱間距離が狭く、主軸方向は N - 71° - E である。また、梁間は北側の VII 区へ延びる可能性があるものの、VI 区南部は搅乱が著しいため定かでない。柱穴跡の平面形はやや歪な方形、円形であり、径 0.32 ~ 0.64 m、深さ 0.19 ~ 0.37 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

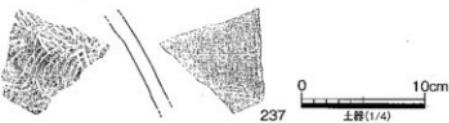
出土遺物には土師器杯 (238・239)、須恵器杯、土師質土器壺等がある。239 は体部の傾きが直立気味で 10 世紀前半に位置付けられる。建物跡の時期は 239 より 10 世紀前半と考えられる。

SB02(第 56・57 図)

調査区北部で検出した東西庇の床東建物跡である。規模は梁間 2 間 × 衍行 3 間 (3.74 m × 8.5 m) である。主軸方向は N - 69° - E である。柱穴跡の平面形はやや歪な方形、円形であり、一部に径 0.45 m と大きなものがあるが、多くは 0.2 ~ 0.3 m を測る。また、深さは床東を構成する柱穴跡では 0.1 m 前後と浅い。埋土は灰褐色系砂質土である。



第 54 図 VII 区 SA01 平・
断面図 (1/60)



第 55 図 VII 区 SA01 出土遺物 (1/4)

出土遺物には土師器杯 (243)、黒色土器碗 (240・242)、緑釉陶器碗 (241)、須恵器杯 (244)・甕等がある。240・242 は胎土が類似し、法量も対応するため同一個体の可能性がある。9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる。建物跡の時期は 240・242 から、9世紀末～10世紀初頭と考えられる。

SB03(第 56・58 図)

調査区北部で検出した 2 面庇の総柱建物跡である。建物跡を構成する柱穴跡が SD04 を切ることから、SB03 が後から出現したことがわかる。規模は梁間 2 間 × 衍行 2 間 (2.7 m × 3.9 m) である。主軸方向は N - 21° - W である。柱穴跡の平面形はやや不整な円形であり、径 0.18 ~ 0.42 m、深さ 0.14 ~ 0.24 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には土師器杯 (245)、須恵器杯・甕、黒色土器、土師質土器等がごく少量ある。245 は体部の傾きが強く、底部を回転ヘラ切りする。9世紀末～10世紀初頭に位置付けられる。建物跡の時期は 245 から、10世紀前半と考えられる。

SB04(第 59 図)

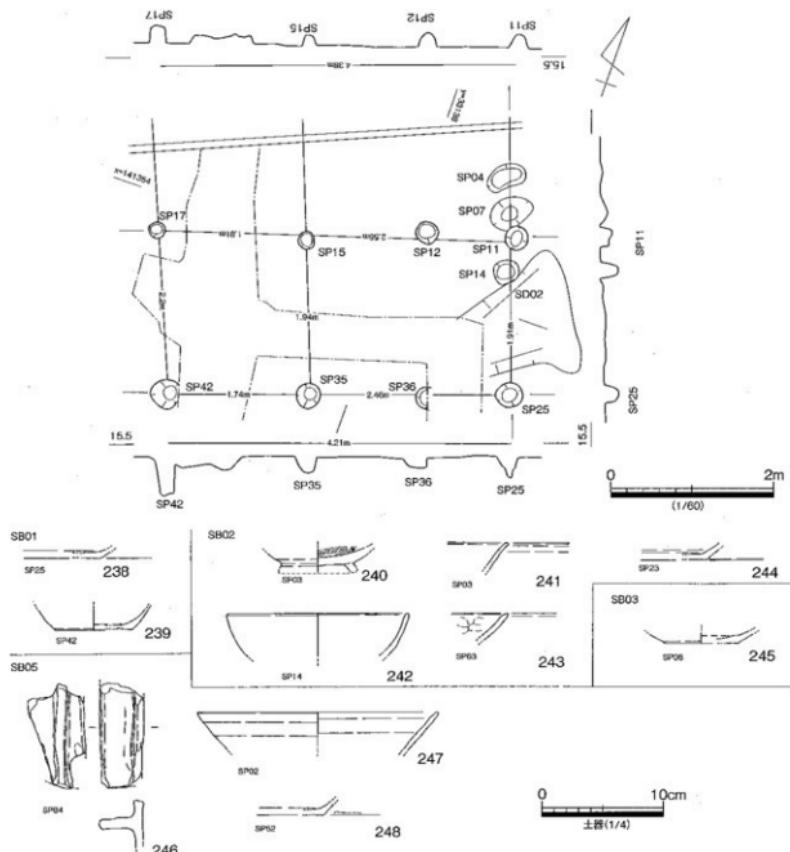
調査区北東部で検出した側柱建物跡である。規模は梁間 2 間 × 衍行 2 間以上 (3.39 m × 3.6 m 以上) である。主軸方向は N - 69° - E である。柱穴跡の平面形はやや不整な円形であり、径 0.5 m 前後、深さ 0.12 ~ 0.37 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には須恵器杯、土師質土器甕等がごく少量ある。建物跡の時期は SB01 との配置から、10世紀前半と考えられる。

SB05(第 56・60 図)

調査区南西部で検出した側柱建物跡である。規模は梁間 2 間 × 衍行 3 間 (3.2 m × 4.5 m) である。主軸方向は N - 20° - W である。柱穴跡の平面形はやや不整な円形であり、径 0.39 ~ 0.6 m、深さ 0.40 m 前後を測る。多くの柱穴跡では底面付近で数個の碟が出土し、根石と考えられる。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には土師器杯 (247)、須恵器杯 (248)、土師質土器



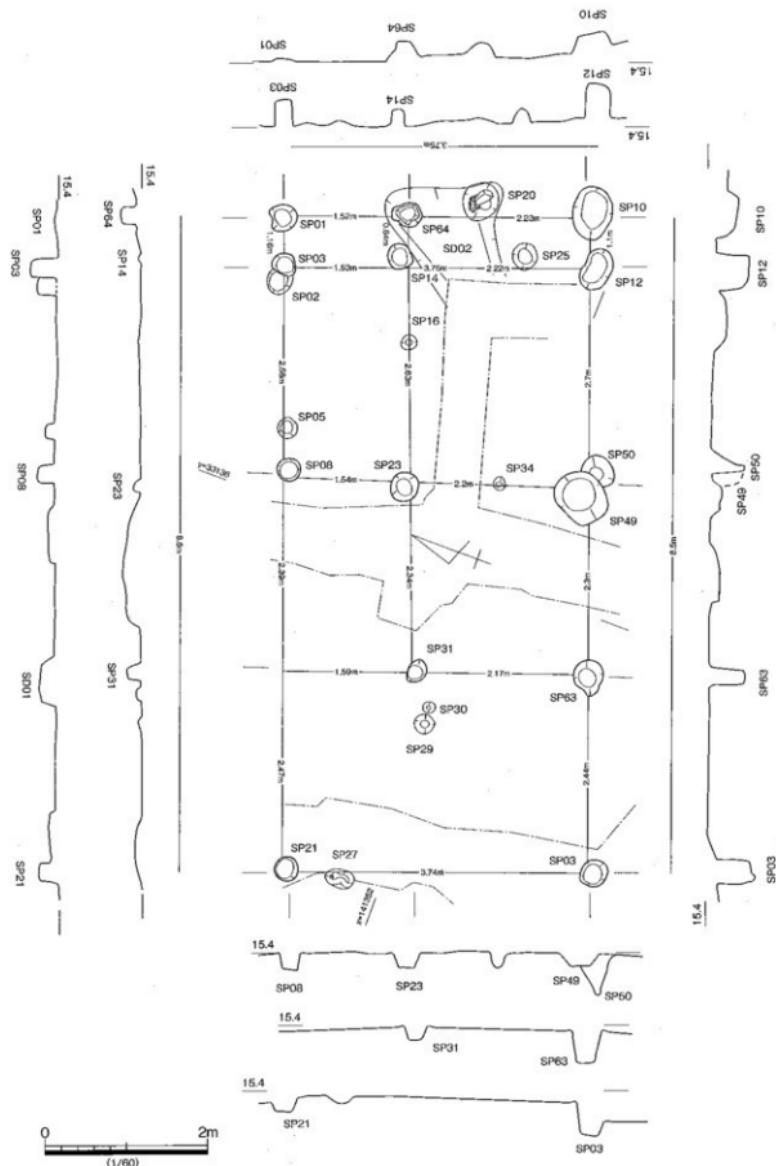
第 56 図 VII 区 SB01 平・断面図 (1/60)、出土遺物 (1/4)

竈 (246)・羽釜等がごく少量ある。247 は体部の傾きが強く、9 世紀末～10 世紀前半に位置付けられる。248 は底部を回転ヘラ切りする。建物跡の時期は 247・248 から、9 世紀末～10 世紀前半と考えられる。

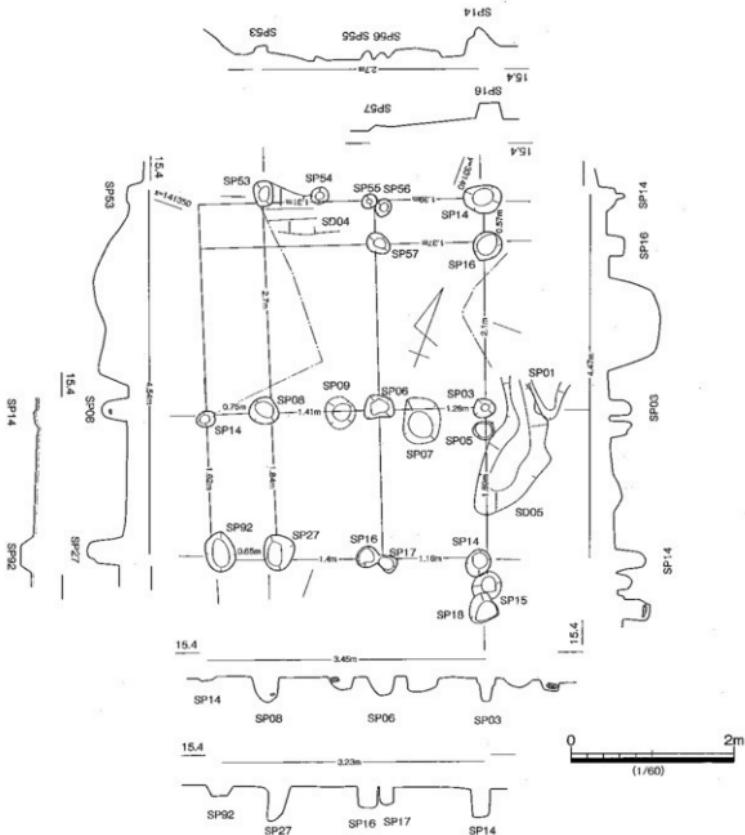
SB06(第 61 図)

調査区南部で検出した建物跡である。南部は削平を受けており、残存するのは北端の 2 穴のみである。よって、規模は梁間 1 間 × 衍行 1 間以上である。主軸方向は N - 20° - W である。柱穴跡の平面形は不整な方形であり、径約 0.6 m、深さ 0.4 ~ 0.5 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。また、この建物跡に伴うと見られる遺構として、後述の地鎮遺構 (SP17・78) と土坑 (SK02) がある。

建物跡からの出土遺物には土器がごく少量ある。建物跡の時期は地鎮遺構との関係から、9 世紀末～10 世紀初頭と考えられる。



第57図 VII区 SB02 平・断面図 (1/60)



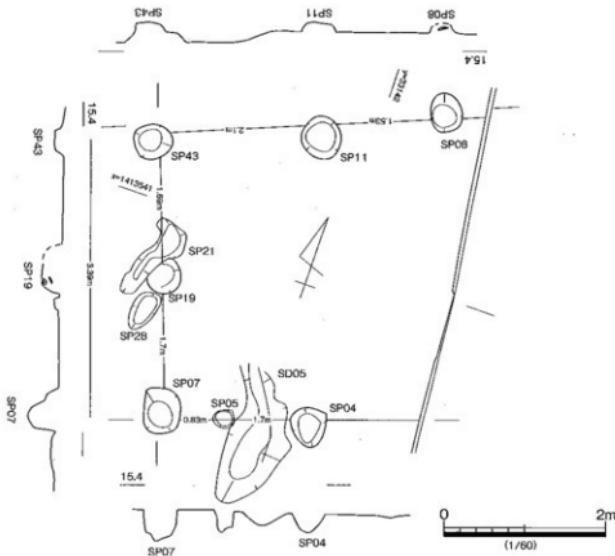
第 58 図 VII 区 SB03 平・断面図 (1/60)

埋納遺構

SP17 - 78(第 61 図)

調査区南部で検出した 2 基の土器を埋納した遺構である。これらは SB06 の東西 2 基の柱穴跡に隣接して検出され、どちらも内部には須恵器の短頭壺が、口縁部を上に向て直立した状態で設置されていた。

SP17 は平面形が橢円形、断面形が箱形を呈し、長径 0.5m、短径 0.6m、深さ 0.22m を測る。一方、SP78 は平面形がやや不整な隅丸方形、断面形が「U」字状を呈し、長径 0.54m、短径 0.39m、深さ 0.29m を測る。これらの遺構は SB06 との配置から、これに伴う地鎮遺構と見られる。なお、類例としては坂出市下川津遺跡の SB III 247 に伴う地鎮遺構がある。



第 59 図 VII 区 SB04 平・断面図 (1/60)

SP17 からの出土遺物には土師器杯 (250)、須恵器杯・壺 (249)、土師質土器等が、SP78 からは須恵器壺 (251)、土師質土器がそれぞれごく少量ある。249・251 は器形、法量が類似する。口縁部は外反するが、上位で水平に強く屈曲させた後、端部を摘み上げる。250 は体部の傾きが強く、底部を回転ヘラ切りする。これらは 9 世紀末～10 世紀初頭に位置付けられる。埋納遺構の時期は 249～251 から、9 世紀末～10 世紀初頭と考えられる。

溝状遺構

SD02(第 62 図)

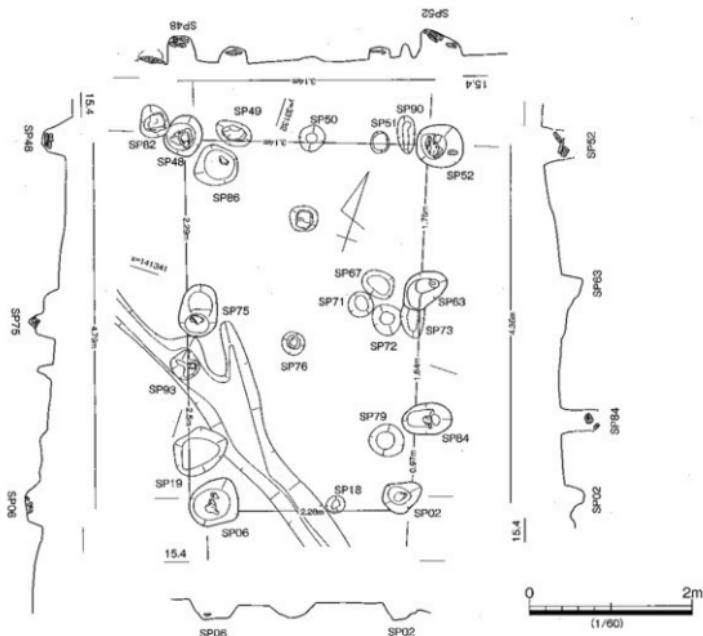
調査区北東部で検出した溝状遺構である。断面形はごく浅い皿状を呈する。幅 0.8 m、深さ 0.03 m を測る。埋土は淡灰褐色砂質土である。

出土遺物には須恵器杯 (252)・壺、土師質土器壺がごく少量ある。252 は口縁部直下に強いナデを加えるため凹む。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期から 9 世紀末～10 世紀前半と考えられる。

SD04(第 62 図)

調査区北東部で検出した溝状遺構である。SB03 を構成する柱穴跡に切られることから、SD04 が先行して出現したことがわかる。断面形は逆台形を呈する。幅 0.47 m、深さ 0.19 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には須恵器杯 (253)、土師器がごく少量ある。253 は口縁部と体部の境界を強くナデしている。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期から、9 世紀末～10 世紀前半と考えられる。



第 60 図 VII 区 SB05 平・断面図 (1/60)

SD09(第 62 図)

調査区東部で検出した溝状遺構である。断面形はごく浅い皿状を呈する。幅 0.25 m、深さ 0.02 m を測る。埋土は灰褐色系砂質土である。

出土遺物には土師器、鉄釘 (254) がごく少量ある。254 は断面方形で頂部と先端部を欠く。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期から、9世紀末～10世紀前半と考えられる。

SD11(第 62 図)

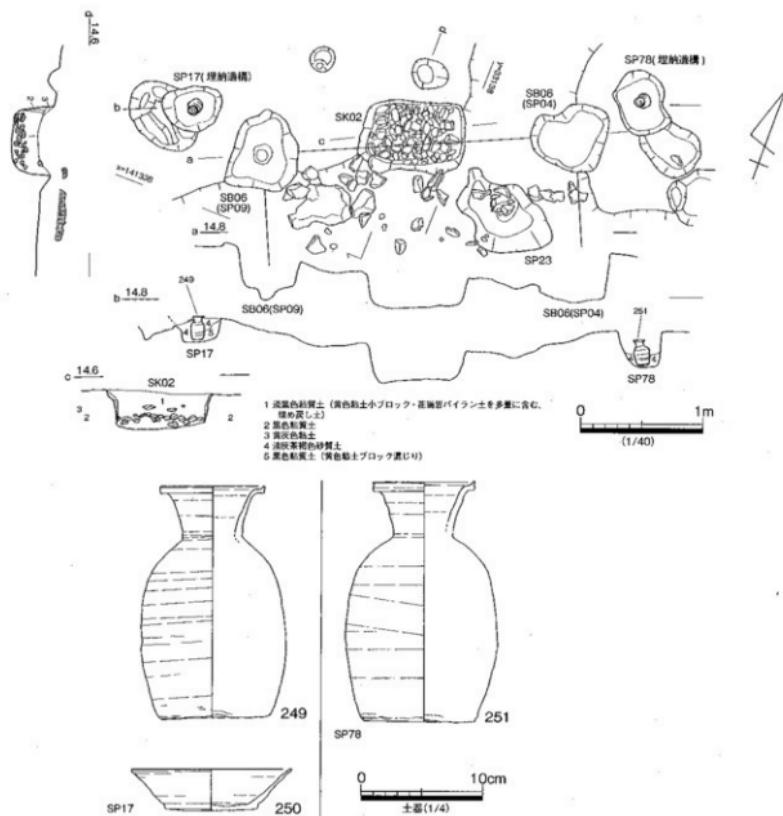
調査区南西部で検出した溝状遺構である。断面形は扁平な逆三角形状を呈する。幅 0.73 m、深さ 0.11 m を測る。主軸方向は N - 60° - W である。埋土は暗灰色砂質土である。

出土遺物には土師器杯 (255)、須恵器がごく少量ある。255 は口縁部と体部の境界が丸味を帯びる。溝状遺構の時期は 255 から、9世紀末～10世紀前半と考えられる。

土坑

SK02(第 61・63 図)

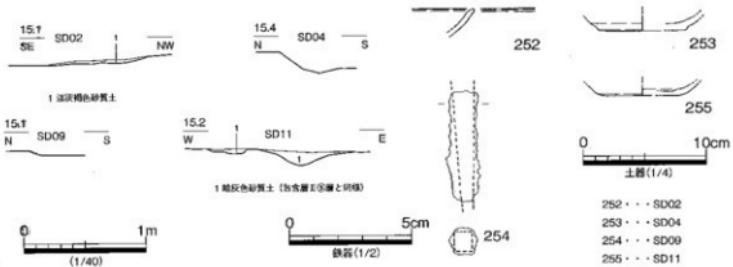
調査区の南部の SB06 を構成する 2 基の柱穴跡の中央部で検出した土坑である。平面形は整った長方形である。断面形は箱形を呈するが、東西の壁面は南北のそれよりややなだらかである。規模は長径 0.92 m、短径 0.56 m、深さ 0.32 m、主軸方向は N - 75° - E を測る。底面には拳大の礫が数重に重なつ



第 61 図 VII 区 SB06・SK02 平・断面図 (1/40)、出土遺物 (1/40)

た状態で出土し、礫床と考えられる。埋土は 3 層に区分される。大部分を占める 1 層は地山ブロックを多量に含む埋め戻し土である。また、2 層は南側を除く 3ヶ所の断面で壁際の細長い土層として観察されたが、C 断面東部から判断すると 2 層の堆積後に礫床が構築されている。なお、土坑の縁辺部では 2 層が平面的にも帶状に延びる部分が散見される（写真 39・40）。このため土坑内には掘り方に沿って木質の箱状のものが設置されていた可能性がある。このように SK02 は検出位置から SB06 との関係が想定でき、かつ「木箱」を設置した後で内部に礫床を敷いていると考えられる。

出土遺物は土師器杯、須恵器杯（256）、土師質土器等がごく少量ある。256 は底部を回転ヘラ切りし、外面には火ダスギが見られる。9世紀末～10世紀前半に位置付けられる。土坑の時期は出土遺物及び SB06 との関係から、9世紀末～10世紀初頭と考えられる。

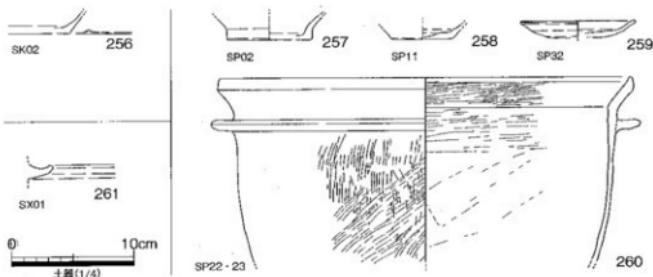


第62図 VII区 SD02・04・09・11断面図(1/40)、出土遺物(1/4・1/2)

柱穴跡出土遺物(第63図)

VII区で検出した掘立柱建物跡、横列跡を構成しない柱穴跡からの出土遺物を図化した。出土遺物はいずれも古代に属する。

257～259は土師器杯である。257は底部が円盤高台状を呈する。259は口縁部が強く外傾し、強いナデを加える。260は外反する口縁端部を上方に小さく拡張させ、下位に水平気味に延びるつばを貼り付ける。



第63図 VII区 SK02・SP02・11・22・23・32・SX01出土遺物(1/4)

性格不明遺構

SX01(第53・63図)

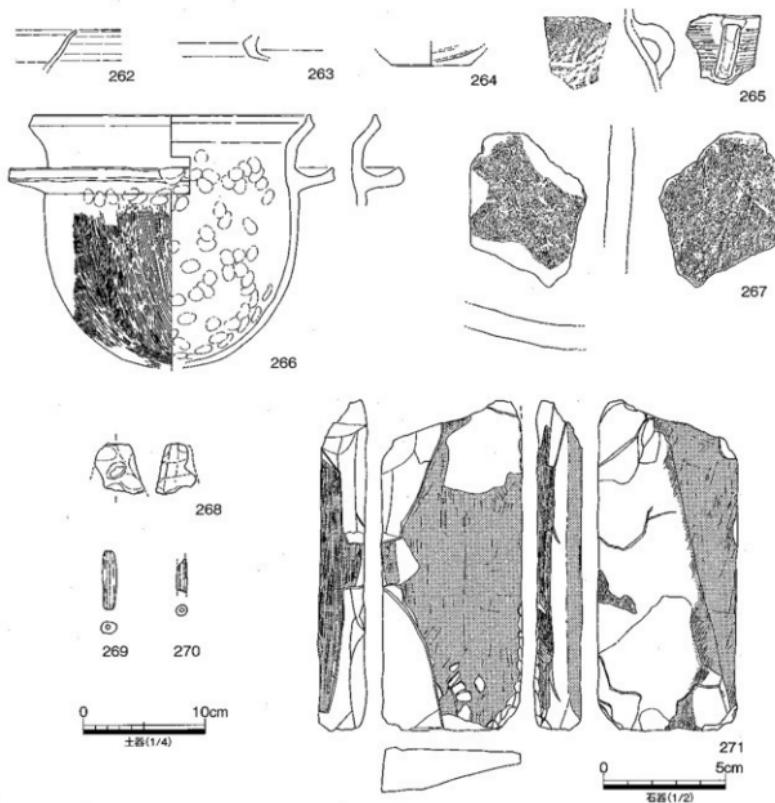
調査区の北西部で検出した不整形の落ち込みである。埋土は灰褐色系砂質土である。出土遺物は土師質土器羽釜(261)がある。261はつばであり、先端部を小さく上に折り曲げる。造構の時期は出土遺物から古代と考えられる。

(2) 包含層出土遺物(第64・65図)

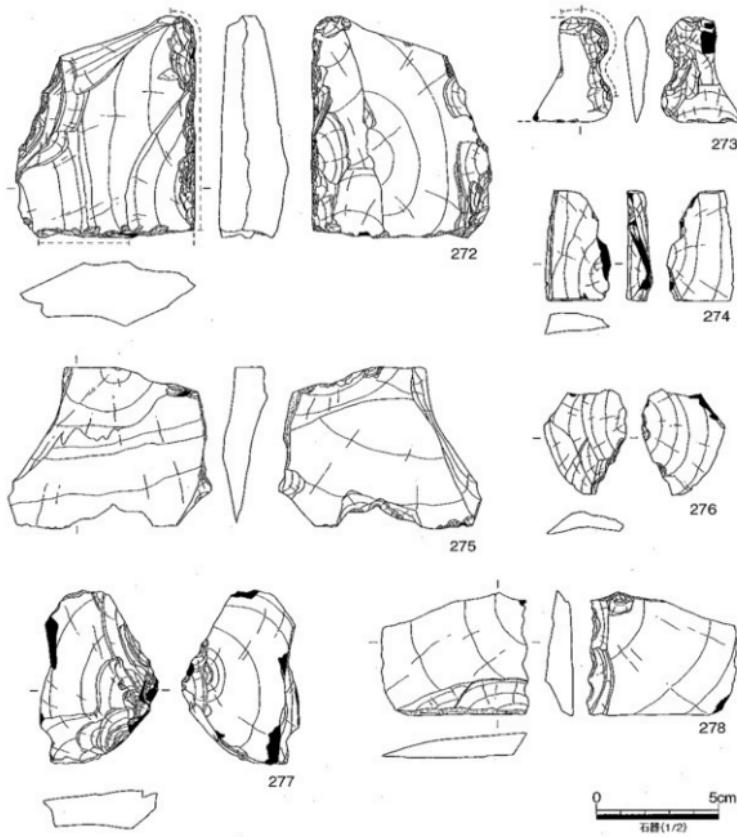
VII区包含層からは多量の遺物が出土した。ほとんどの遺物は古代～中世の土器であるが、壁土や近世の陶磁器等も見られる。262は緑釉陶器碗で、口縁部直下に強いナデを加える。263は緑釉陶器の底部、

264は土師器杯である。265は須恵器壺で、体部の外面にはタタキ、内面には当て具痕が見られる。266は土師質土器羽釜で、口縁部とつばの先端部は小さく上に折り曲げ、肥厚させる。267は平瓦で、凹面に布目痕、凸面にタタキが施される。268は土師質の蛸壺、269・270は土師質の管状土錘である。いずれもナデて仕上げる。271は砥石である。側面に切り出し時の鋸痕が見られる。

272～278はサヌカイト製石器である。272は打製石斧の可能性がある。ただし、左図の右側面は顕著なつぶれが観察されるのに対し、左側面は鋭いエッジが未加工であるため、楔形石器の可能性も考えられる。273は打製石庖丁で、刃部は両面とも細かい調整を丁寧に加える。274は翼状剥片であるが、発掘調査時の破損により打面調整は不明瞭である。275はスクレイバーで、右図では刃部に小さな調整をわずかに加える。276～278は剥片である。



第64図 VII区包含層出土遺物① (1/4/・1/2)



第65図 VII区包含層出土遺物② (1/2)

VII区の調査成果

以下でVII区の報告を行うが、遺構名称の前に調査区名を付けていないものは全てVII区の遺構である。

(1) 古代の遺構・遺物

溝状遺構

SD14(第67・68図)

調査区北部で検出した溝状遺構である。立地的には丘陵斜面部から低地部に移行する変換点に掘削されており、丘陵裾部を取り巻くように南西から北東へ延びる。また、SD15に切られることから、SD14が先行して出現したことがわかる。

断面形は逆台形状を呈し、幅3.2m、深さ0.9mを測る。底面は地形と同様に北東へ下る。主軸方

向はN-43°Eである。埋土は上下2層に大別される。上層は地山ブロックなどが多量に混入しており、人為的に埋め戻されたと考えられる。下層は粗砂が薄く堆積している箇所があり、ある程度流水があったと判断できる。また、土層断面の観察からは複数回の再掘削が行われていると考えられる。

上層からの出土遺物には土師器杯(279)、須恵器平瓶(280)・甕、石器(281~284)等が少量ある。279は断面方形の小さい高台をもち、8世紀代に位置付けられる。281・282は打製石礫である。283は打製石匙で、摘み部の調整はごく簡単であるが、刃部は両面とも丁寧に作っている。284は石核で、右図の上下縁辺部につぶれが見られる。

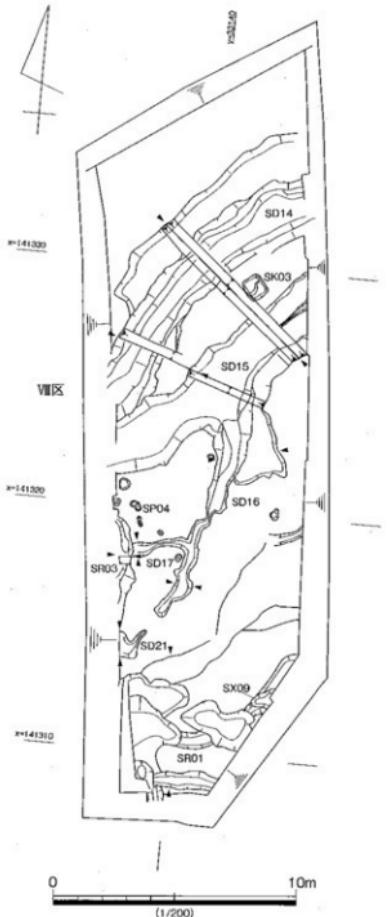
下層からの出土遺物には弥生土器(285~288)、石器(289・290)がある。285は壺で、頭部外面に指頭痕を加えた突帯を貼り付ける。286は口縁部を「く」の字状に折り曲げ、端部を小さく上方に拡張させる。287・288は凹線文を施す。これらの土器は弥生中期中葉に位置付けられる。289は剥片、290はスクレイパーである。このように出土遺物から見た土層の堆積時期は上層が8世紀代以降、下層が弥生時代に分かれる。

こうした土層の堆積状況については、①弥生時代の溝状遺構内にSD14下層が堆積後、埋没。②古代に再び別の溝状遺構が重複して掘削され、SD14上層のブロックにより埋め戻される。という経過をたどったためと考えられる。よって、ここでは1条の溝状遺構として報告したが、下層が弥生時代に、上層が古代に掘削され、埋没した異なる2条の溝状遺構であり、これらが上下に重複して検出されたと考えられる。

SD15(第67・69図)

調査区北部でSD14に南接して検出した溝状遺構である。掘削位置は、SD14と同様に丘陵斜面部から低地部に移行する変換点に当たり、やはり丘陵裾部を取り巻くように南西から北東へ延びる。また、SD14を切ることから、SD15が後から出現したことがわかる。

断面形は浅い皿状を呈し、幅3.01m、深さ0.24mを測る。底面は地形と同様に北東へ下る。主輪方



第66図 VII区全体図(1/200)

向はN - 47° - Eである。埋土には部分的に流水の存在を示す砂層の堆積が見られる。古代のSD14との関係については、これが埋め戻された後、SD15が近接した位置に同様な規模で掘削されていることから、古代のSD14の機能を継承させた灌漑用水路と考えられる。

出土遺物には須恵器杯・鉢(291)、土師器杯、黒色土器楕、須恵器壺、土師質土器壺(292)、弥生土器、石器(293～296)が少量ある。291は直立する口縁部から体部にかけて小さく屈曲する。293は平基式の打製石鎌で、側縁の上部で屈曲し、五角形状を呈する。294はスクレイバーで、上下の縁辺部に調整を加えており、どちらもわずかに磨耗している。295は楔形石器で、上下の縁辺部に顕著なつぶれが見られる。296は器種不明であるが、わずかに調整痕か剥片採取痕を施す。溝状遺構の時期はSD14上層との関係と291から、古代と考えられる。

SD16(第67図)

調査区南部で検出した溝状遺構である。SD15・17に接続する。断面形は浅い皿状を呈する。幅0.64m、深さ0.06mを測る。埋土は灰茶褐色砂混じり粘土である。

出土遺物はない。溝状遺構の時期はSD15に接続することから、古代と考えられる。

SD17(第67図)

調査区南部で検出した溝状遺構である。SD16に接続し、西端でSR03に切られる。断面形は浅い皿状を呈し、幅0.47m、深さ0.07mを測る。埋土は灰褐色粗砂である。

出土遺物はない。溝状遺構の時期はSD16と接続することから、古代と考えられる。

SD21(第67図)

調査区南部で検出した溝状遺構である。西端は調査区外に延びる。断面形は浅い皿状を呈するが、南側で部分的に窪む。幅0.73m、深さ0.08mを測る。埋土は暗灰褐色シルトである。

出土遺物はない。溝状遺構の時期は埋土と周辺遺構の時期から、古代と考えられる。

土坑

SK03(第70図)

調査区の北部で検出した土坑である。SD14を切ることから、SK03が後から出現したことがわかる。平面形は整った方形であり、断面形は逆台形を呈する。壁はなだらかに落ち、床面は北側で少し凹むが、ほぼ平坦である。規模は長径1.68m、短径1.48m、深さ0.16m、主軸方向はN - 40° - Wを測る。埋土は3層に区分され、炭層である3層が床面のほぼ全面に広がる。また、主に壁面では被熱による赤色に変化した箇所も見られる。このため何らかの焼成行為が行われたと考えられる。

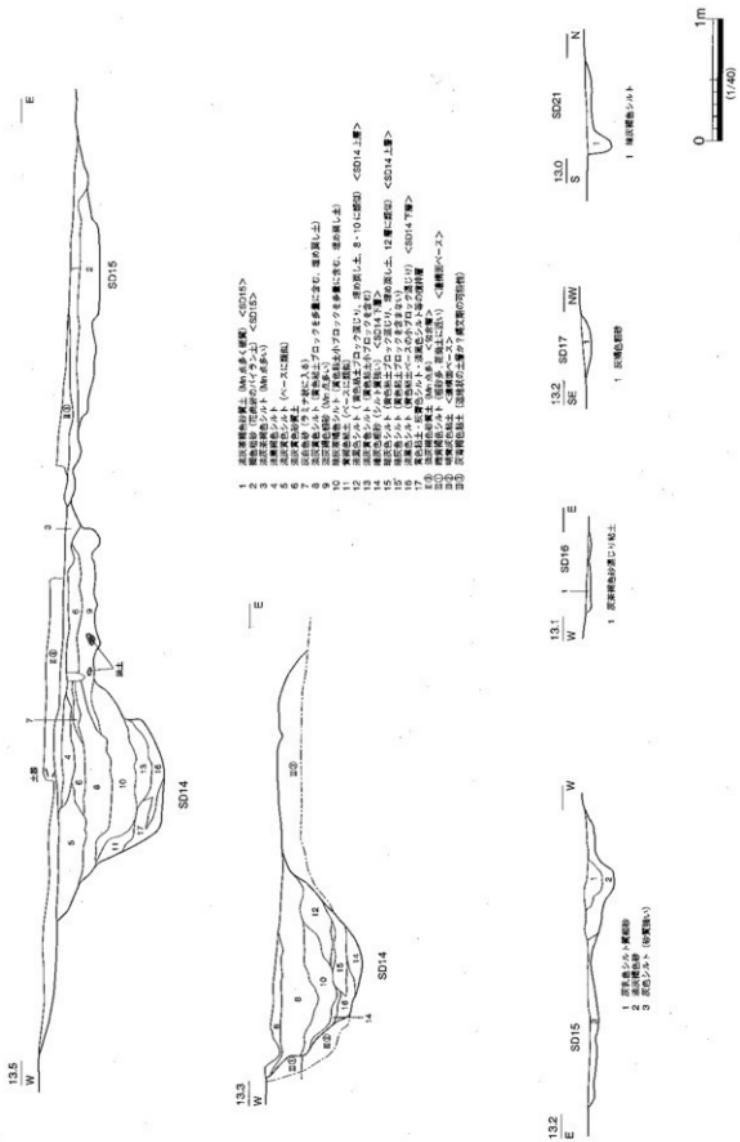
遺物は上層から土師器、須恵器、土師質土器等がごく少量、下層から須恵器壺、焼土がごく少量出土した。土坑の時期はSD14を切ることから、古代と考えられる。

柱穴跡出土遺物(第71図)

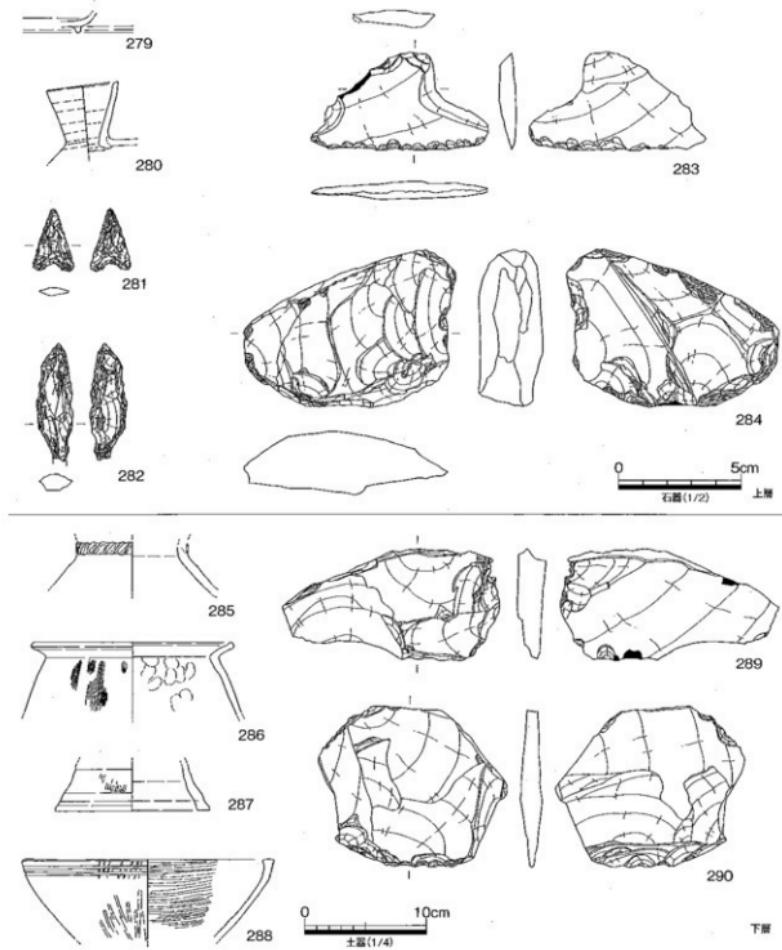
畠区で検出した掘立柱建物跡、柵列跡を構成しない柱穴跡からの出土遺物を図化した。297は瓦質土器こね鉢(297)で、口縁端部を上方に肥厚させ、その直下には強いナデを加える。

旧河道路

SR01・03(第72図)

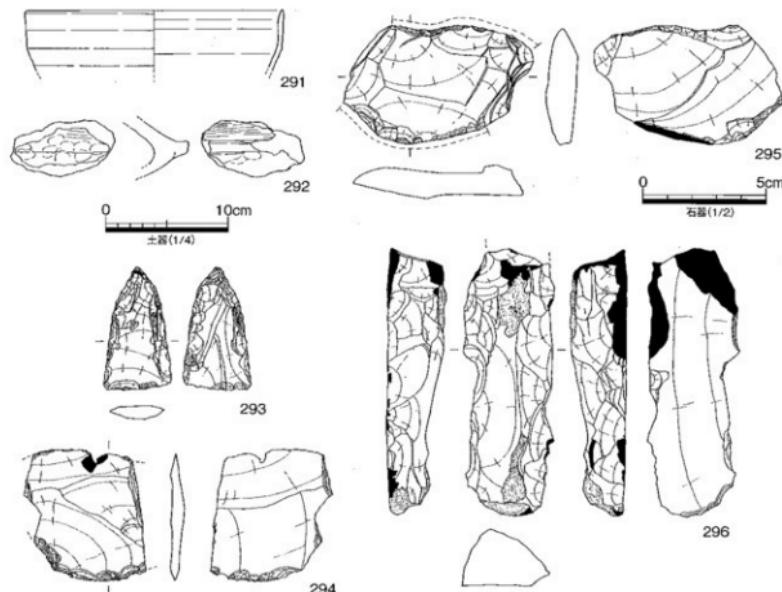


第67回 VII区 SD14~17・21断面図 (1/40)

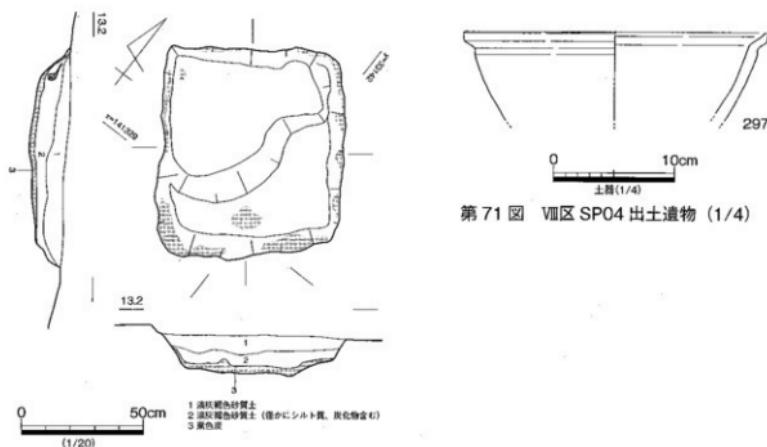


第68図 VII区 SD14 出土遺物 (1/4・1/2)

SR01は調査区南部の低地部で検出した旧河道路跡である。東部でSX09に切られることから、SR01が先行して出現したことがわかる。断面形は浅い皿状を呈するが、中央部では大きく凹む。幅5.4m以上、深さ0.78mを測り、底面は地形の傾斜に沿って東に下る。埋土は10層程度に細分されるが、概ねシルト～砂であり、流水があったことが窺える。このうち、10層は12・13層を切り込んでいるため、強い流水があったと考えられる。また、SR01の北側に接するSR03は、埋土が類似することから、SR01と同一の旧河道路跡と考えられる。

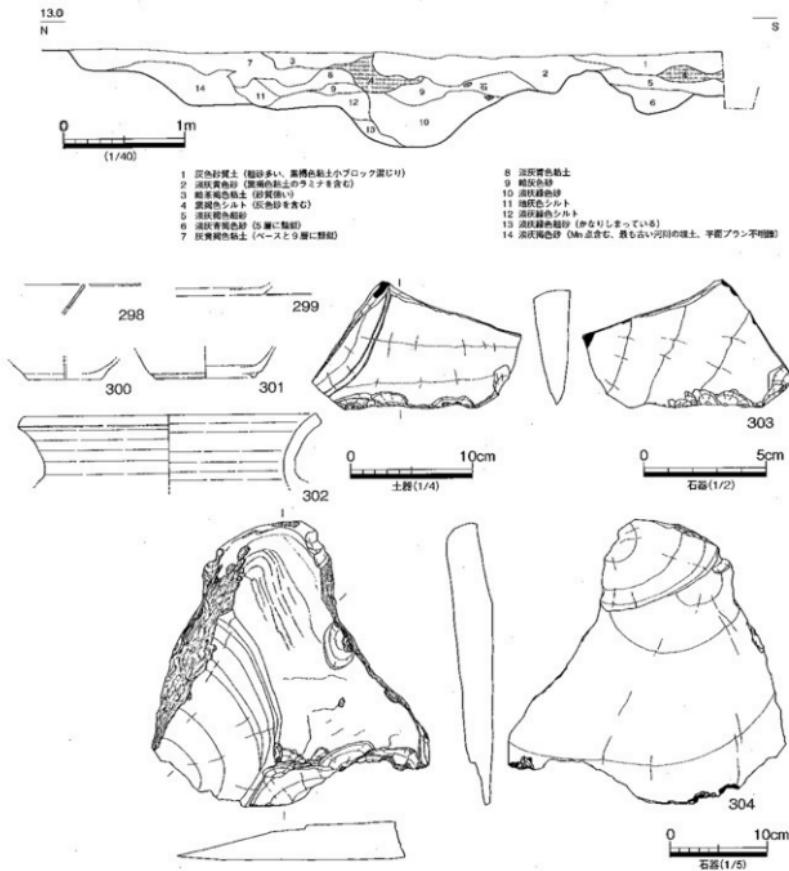


第69図 VII区 SD15 出土遺物 (1/4・1/2)



第70図 VII区 SK03 平・断面図 (1/20)

出土遺物には土師器杯 (298)・須恵器杯 (299~301)・甕 (302)・弥生土器・石器 (303・304) が少量ある。299・300は底部を回転ヘラ切りしており、9世紀後半~10世紀前半に位置付けられる。304は大形の板状剥片で、大きさ約30cm、重さ3kg強を測る。わずかに剥片採取を行っている。旧河道跡の時期は299・300から、9世紀後半~10世紀前半と考えられる。



第72図 VII区 SR01断面図(1/40)、出土遺物(1/4・1/2・1/5)

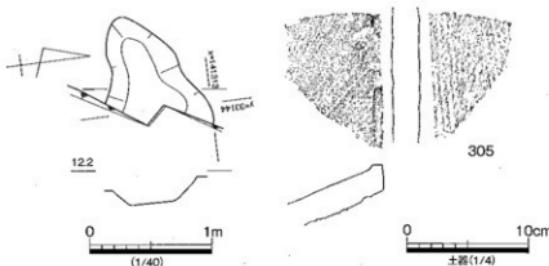
性格不確遺構

SX09(第73図)

調査区の南東部で検出した遺構である。東側が調査区外に延びるが、平面形は方形を基調とする推

測される。断面形は逆台形状を呈する。壁はなだらかに落ち、床面はほぼ平坦である。規模は長径3.2m、短径0.8m以上、深さ0.7m以上を測る。北西隅でSR01を切ることから、SX09が後から出現したことがわかる。埋土は概ね灰褐色系粘質土である。

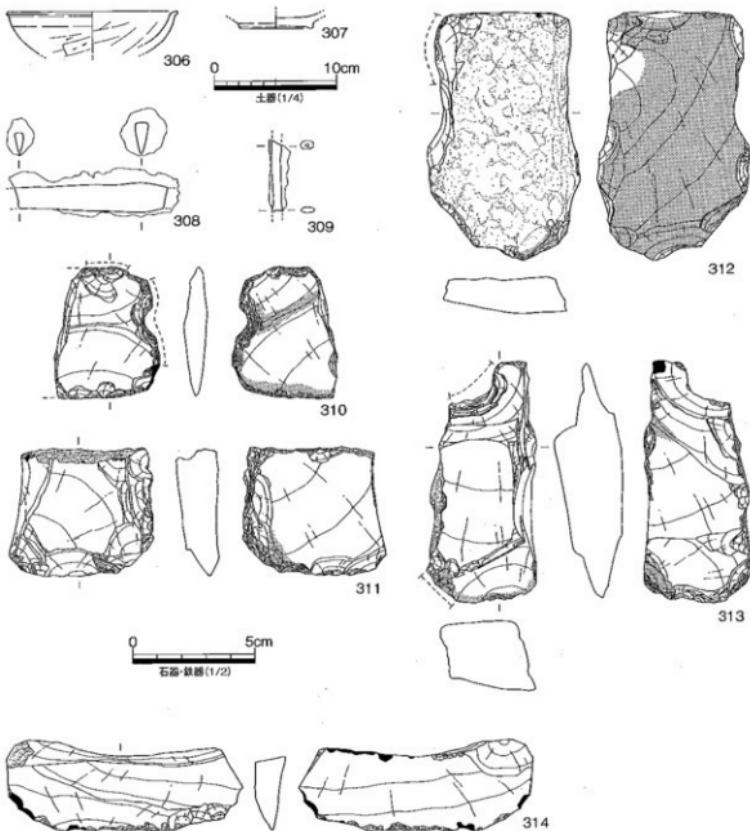
出土遺物は平瓦(305)がある。土師質であり、凹面に布目痕、凸面に縄目タタキが見られる。遭構の時期は出土遺物から、古代と考えられる。



第73図 VIII区 SX09 平・断面図(1/40)、出土遺物(1/4)

(2) 包含層出土遺物（第74図）

VII区包含層からは少量の遺物が出土した。ほとんどは古代の土器であるが、弥生土器や石器等も見られる。306は土師器杯で、内外面にヘラケズリを施す。307は緑釉陶器碗である。308は鉄製の刀子、309は鉄釘であり、309は頭部と先端部を欠損する。310～314はサヌカイト製石器である。310は打製石庵丁であり、両面に使用に伴う磨耗が観察される。311は楔形石器、312・313は打製石斧である。312は主要剥離面側が全面的に磨耗している。313は両面が使用により磨耗している。また、上下の縁辺部に著しいつぶれがあり、楔形石器に転用されている。



第74図 VII区包含層出土遺物 (1/4・1/2)

第4章 自然科学的分析

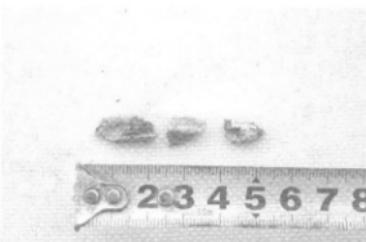
岡山理科大学 富岡直人

東坂元三ノ池遺跡から出土した獸骨の鑑定結果について

詳細は第2表のとおりである。



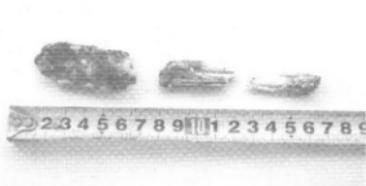
① 骨2



② 骨4



③ 骨5



④ 骨7

〈獸骨の鑑定に対する編集者のコメント〉

「獸骨はいずれも固く焼結しており、鉄分の付着も見られるため鍛冶作業に使用された可能性もある」との鑑定結果を得た。こうした作業に関係する遺物としては、包含層から出土したごく少量のフイゴの羽口やスラグがある。ただし、調査区内では鍛冶造構と見られる遺構は検出されていないが、造構や調査区壁の土層断面図で窺えるとおり、調査区内の土壤等には鉄分の付着が顕著に見られる知見が得られた。

こうした状況であるため、出土した獸骨が鍛冶作業に使用されたと判断する材料は乏しいと考えられる。

遺物番号	遺物記番号	地区	層位	遺構	時代	大分類	小分類	部名	位LR	部位1	成長度	破損(解体痕を含む)	受熱	色調	計測値
1	KHSA 0245	II 区 C5	包含層		古代～中世前半	哺乳綱	牛 or 馬	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色		
2	KHSA 0246	II 区 C4 D4	包含層		古代～中世前半	哺乳綱	牛 or 馬	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色		
3	KHSA N・V区 K0084 D7				古代～中世前半	哺乳綱		臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色		
4	KHSA N・V区 K0085 D7				古代～中世前半	哺乳綱	(中～大型) 哺乳綱	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色		
5	KHSA N・V区 K0087 D7		SK34	10世紀前半	哺乳綱	牛 or 馬	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色			
6	KHSA N・V区 K0088 D7	SK34 床面直上		10世紀前半	哺乳綱	牛 or 馬	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色			
7	KHSA D0121 谷区		SD14 直上	古代～中世前半	哺乳綱	馬	上臼齒 P3 ~ M2	前頭部 破片	萌出途次 R	萌出途次 R	萌出途次 R	なし?	あり?	黒色～白色 B (25.00 mm)	
8-1	KHSA 0247 谷区 E14 E15	包含層 II 9層		古代～中世前半	哺乳綱	馬	上臼齒 M3	前頭部 破片	小窓独立 平了	不明	なし?	あり	黒色～白色		
8-2	KHSA 0247 谷区 E14 E15	包含層 II 9層		古代～中世前半	哺乳綱	牛 or 馬	臼齒	前頭部 破片	不明	なし?	あり	黒色～白色			

備考
いずれも火を受けている様子があり、固く金属音がする。温泉水の影響があれば別だが、およそ900度～1000度ほどで焼かれないと、このようないくつかの結晶しない。また、鉄分も付着している。このため歯膏が製錬に伴う鍛冶作業に使用された可能性も考えられる。ただ、低湿地性の遺跡などの場合は後から鉄分が付着するため、遺跡の環境を考慮せねばならない。

第2表 獣骨鑑定表

第5章まとめ

東坂元三ノ池遺跡では旧石器時代から中世にかけての遺構・遺物を確認した。以下ではこれらの遺構・遺物について時期ごとに説明し、まとめとする。

旧石器時代

遺物として、少量のナイフ形石器や翼状剥片石核などが後世の遺構や包含層から出土した。

弥生時代中期～後期

検出遺構は、弥生時代中期の溝状遺構（VII区 SD14下層）のみである。土器や石器がややまとまって出土した。おそらく調査区外に集落跡が存在するのであろう。また、包含層より中期から後期の土器が少量出土した。

古代

6～8世紀代については、一定量の遺物が包含層等から出土するが、遺構は確認されていない。検出した遺構の多くは9世紀後半以降の建物跡や柵列跡であり、これらは出土遺物の時期、主軸方向の違いから3時期に大別できる。このため以下では古代I～IIIという3時期に区分して説明する。

古代I (9世紀後半～10世紀初頭)

集落の形成期である。9世紀末～10世紀初頭に丘陵頂部から南斜面の頂部寄り(VI、VII区)で住居等が、また9世紀後半～10世紀初頭に丘陵北斜面(II・III区)で畠が形成される。

住居等の構成遺構としては、Ⅶ区 SB02・03・05・06、地鎮遺構等がある。これらのうち、建物跡については大型で床東建物跡であるⅧ区 SB02 が主屋、これに近接する 2 面庇建物跡であるⅧ区 SB03 が副屋、これらより小型の側柱建物跡であるⅧ区 SB05・06 が従属棟であると考えられる。なお、地鎮遺構はⅧ区 SB06 に伴うと見られる。類例としては坂出市下川津遺跡の SB III 247（9世紀代）に伴う例がある（藤好 1990）。

畑跡については平面形が「E」字状や「コ」の字状を呈する溝状遺構群（Ⅱ・Ⅲ区 SD08～10・22～24）について畑の痕跡と判断した。これらは一部で切り合い関係が見られるものの、東西に平行する溝状遺構間で約 4 m 間隔に整然と配置され、埋土も類似する。このためには同時期に形成されたと考えられる。また、溝状遺構は東西方向のもののが南北方向のものより深い傾向がある。その理由は地形的に下る東方への排水等を意図したためと推測される。

次に、当該期もしくはそれ以前の開削と考えられるⅧ区の大形灌漑用水路（SD14 上層、SD15）についてであるが、概要報告で規模や配置等の特徴より現在の基幹灌漑用水路（上井用水、飯野山の東裾部を流下する。）の前身である可能性が指摘されている。また、東坂元秋常遺跡の発掘調査報告では当遺跡と同じく飯野山東麓に位置する東坂元秋常遺跡、川津川西遺跡で検出された同程度の規模を測る灌漑用水路も合わせて、一連の灌漑用水路であり、上井用水の前身であること、開削目的は下流域に位置する川津地区の開発であることという評価が提示された（藏本 2008）。

現在の上井用水の前身であろうとする点では一致するが、連続する水路と考えるには調査地点が限定的である点、各溝状遺構から出土した遺物の時期がややばらつく点に課題を残している。本水路や他遺跡の水路はこの地域における古代の開発を知る上で重要な遺構であるため、今後も検討を進めていきたい。

古代Ⅱ（10世紀前半）

この時期に属する遺構は 2 つの異なる主軸方向をもち、1 つは古代Ⅰ、もう 1 つは後述する古代Ⅲのものと近似する。ただし、古代Ⅰと近似する主軸方向を持つ遺構がこの時期に人為的に埋め戻された状態は確認できない。したがって、遺構主軸はこの時期に漸移的に変化したと考えられる。

古代Ⅰの遺構主軸に近似しているものは、Ⅵ区 SB02、Ⅶ区 SB01・04 がある。これらは古代Ⅰ段階の集落が形成されている同じ地区で検出された。個別の建物跡の性格については、Ⅷ区 SB01 は総柱建物跡であること、古代Ⅰ段階での主屋であるⅧ区 SB02 と重複することから建て替えられた主屋であると見られる。また、側柱建物跡である他の 2 棟は従属棟と考えられる。

古代Ⅲの遺構主軸に近似しているものは丘陵頂部から北斜面の頂部寄り（Ⅳ～Ⅵ区）で形成される。検出遺構には横列跡（Ⅵ区 SA01）、建物跡（Ⅵ区 SB01・03・04）がある。これらのうち建物跡については、大型の総柱建物跡であるⅥ区 SB04 が主屋、他の 2 棟が付属棟と考えられる。なお、Ⅵ区 SB01・03 はⅥ区 SB02 と重複するが、後者は古代Ⅰの遺構主軸と近似した主軸方向を持ち古代Ⅱに属するため、後者から前者へ建て替えが行われたと考えられる。

その他の遺構として、IV・V区の波板状压痕がある。波板状压痕については概要報告（香川県埋蔵文化財センター年報 平成 15 年度）において道路遺構の路床面上の遺構である可能性を含めて今後の課題とした。今回、報告にあたり再検討を試みたが、遺構の性格を判断できる材料が乏しいことから、今後、類例の増加を待って考えていきたい。

古代Ⅲ(11世紀前半)

10世紀後半の遺構は今回の調査区内では検出されておらず、出土遺物も乏しいものの、11世紀前半には調査区内で再び集落が確認される。このように調査区内で確認できる古代集落の断絶期間は、その存続期間と比べて比較的短期間である。このため、おそらく10世紀後半にも調査区外の近接した位置に集落が継続していたと推測される。

さて、11世紀前半に属する建物跡としてはIV・V区SB01～03がある。IV・V区SB01は東部の床を板張り構造とした建物跡である。調査地内で最大の床面積を持ち、主屋と考えられる。これに近接するIV・V区SB02・03は小型の側柱建物跡であるため、従属棟と見られる。このように本遺跡で検出された古代の集落跡は各時期に主屋を中心とする2～4棟程度の建物跡により構成されたと考えられる。

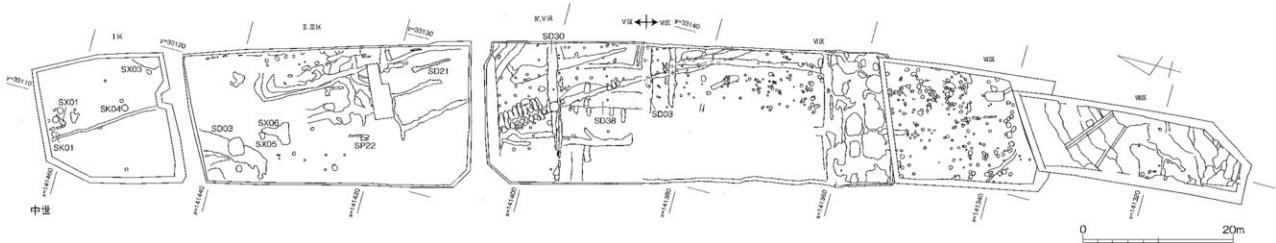
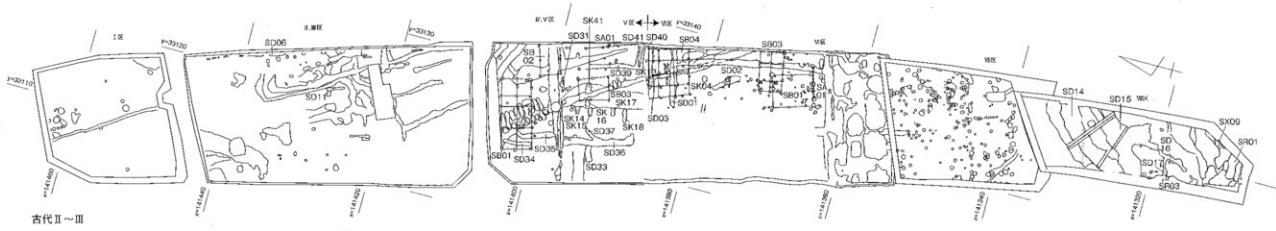
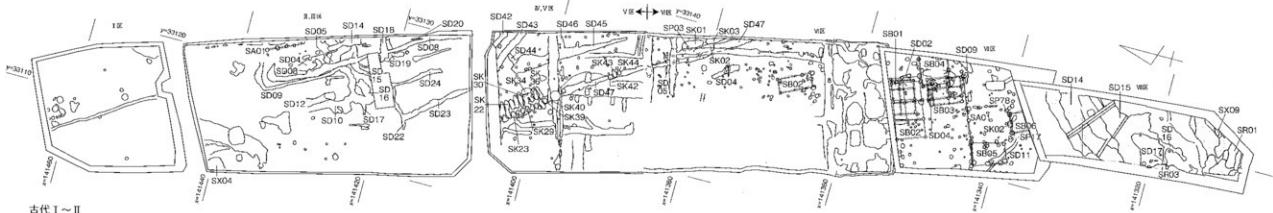
中世(12～16世紀代)

遺構は極めて希薄であるが、12～14世紀代の遺構(II・III区SD21、SX05・06、IV・V区SD30・38、VI区SD03)は丘陵北斜面の頂部寄りの緩斜面で、15・16世紀代の遺構(I区SX03、II・III区SD03)は丘陵北斜面の谷筋寄りで検出された。このうちIV・V区SD38とVI区SD03は合流しており、平面形は「L」字状を呈する。また、周辺の包含層からは当該期の遺物が出土した。

調査区の西半部は著しい削平を受けていることもあり、中世に属することが確実な柱穴跡はほとんど見られない。しかしながら、「L」字状を呈する溝状遺構の平面形と検出位置、付近の出土遺物量から判断して、IV・V区SD38とVI区SD03は集落の区画溝であった可能性も考えられる。

参考文献

- 藤好史郎他 「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡」(1990) 香川県教育委員会
西村尋文他 「東坂元三ノ池遺跡」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成15年度』(2005) 香川県埋蔵文化財センター
歳木晋司 「国道438号道路改築事業(飯山工区)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第1冊 東坂元秋常遺跡」(2006)
香川県教育委員会



第 75 図 造構変遷図 (1/500)

土器觀察表 (1)

土器觀察表(2)

番号	図版番号	調査区	遺物名	層位	種別	各種	外觀	内觀	石英・ 長石	赤玉 ガラス	角閃石	斜方 輝石	透光	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	その他 (cm)	法量		調整・ 校正	測定年	備考
																		横幅 (cm)	縦幅 (cm)	面積 (cm ²)		
25	24	II・Ⅲ区	S2003		土器質 土器	すり料 (凹面)	10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色 (白面)	10YR7/2 [2.5cm] 黄褐色 (白面)	細・薄					30.2 (11.7)	13.5			口縁部 直線状・指 面接合部	内面 直線状・指 面接合部	直線部 内面	6年1組の加目 1/8	
26	25	II・Ⅲ区	S2003		丸	平瓦	10YR4/3 [2.5cm] 黄褐色 (白面)	10YR4/3 [2.5cm] 黄褐色 (白面)	細・薄									直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面		
28	27	II・Ⅲ区	SD221		土器質	小皿	73YR7/6 盤	75YR8/6 黄褐色 淡青色	細・少									直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面		
29	28	II・Ⅲ区	SP222		土器質	碗	10YR8/1 灰白	10YR8/2 灰・少									直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
30	29	II・Ⅲ区	S2005		土器質 土器	土器質 土器	10YR6/4 [2.5cm] 黄褐色 10YR6/4 [2.5cm] 黄褐色	10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色 10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色	中・並								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
31	30	II・Ⅲ区	S2006		土器質 土器	土器質 土器	10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色 10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色	10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色 10YR7/3 [2.5cm] 黄褐色	中・多								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
32	31	II区	包含層	II②層	土器質	短筒型	N5灰 N5灰	N5灰 N5灰	N5灰								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
33	32	II区	包含層	II①層	土器質	ソウツ	N3灰 N3灰	N3灰 N3灰	粗・多								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
34	33	II区	包含層	SD10 面上	土器質	盤	10YR7/0 灰白	10YR7/0 灰白	粗								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
35	34	II区	包含層	II②層	土器質	桶	73YR4/6 灰	73YR4/6 灰	細							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面				
36	35	II区	包含層 位置不明	II①層	土器質	桶	25G7/6 オーバー N5灰 N5灰	25G7/6 オーバー N5灰 N5灰	粗							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面				
49	37	IV・V区	SB01- S2052		土器質	碗	5YR4/2 灰	5YR7/6盤	細・少								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
50	38	IV・V区	SB01- S2045		土器質 頭部移	土器	2.5YR4/1 灰	2.5YR4/1 灰	明るい 灰	2.5YR5/6 中・並							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
51	39	IV・V区	S2039		土器質	杯	5YR4/1灰	5YR4/1灰	細								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
52	40	IV・V区	SD442		土器質	杯	5YR4/6粗	5YR7/6粗	細・少								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
53	41	IV・V区	SD442		土器質	杯	5YR6/4 灰	5YR6/4 灰	細							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面				
54	42	IV・V区	SD445		土器質	杯	5YR6/4 灰	5YR6/4 灰	細							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面				
55	43	IV・V区	SD445		頭部移	皿	N5灰	N5灰	細・差								直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面			
56	44	IV・V区	SD445		頭部移	皿	2.5YR8/1 灰白	2.5YR8/1 灰白	細							直線部 内面	直線部 内面	直線部 内面				

土器觀察表 (3)

番号	区画名	測線名	断面	標高	断面	標高	断面	標高	測量		測量-方法	
									外側	内側		
57	IV・V区	SD45	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	口経	外側-内側
58	IV・V区	SD45	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
59	IV・V区	SD45	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
60	IV・V区	SD45	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
61	IV・V区	SD45	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
64	IV・V区	SD47	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
65	IV・V区	SD47	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
66	IV・V区	SD47	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
67	IV・V区	SD47	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	土路槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
68	IV・V区	SD47	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
69	IV・V区	SD47	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
71	IV・V区	SK22	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
72	IV・V区	SK22	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
73	IV・V区	SK23	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
75	IV・V区	SK30	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
76	IV・V区	SK36	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
77	IV・V区	SK36	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
78	IV・V区	SK36	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側
79	IV・V区	SK36	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	渠槽	幅員	幅員	幅員	外側-内側

土壤考察表 (4)

土器観察表(5)

備考	調査・方法											検索率
	外観			内面			底土		表面		内面	
番号	県名	測定名	部位	種類	容積	石灰	角閃石	斜長石	砂粒	口径 (cm)	高さ (cm)	その他の (cm)
110	岐阜県	SP02	土壠筋	直	2.5YR7/8	2.5YR7/8	細・少	中・並	細・少	12.0	1.6	9.3
111	岐阜県	SP47	土壠筋	直	2.5YR8/6	5YR8/6	粗・少	中・並	細・少	12.0	1.6	9.3
112	岐阜県	SP03	土壠筋	直	2.5YR7/1	2.5YR7/1	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
113	岐阜県	SP26	須磨器	杆壓	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
114	岐阜県	SP25	土壠筋	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
115	岐阜県	SP03	土壠筋	直	2.5YR6/6	2.5YR6/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
116	岐阜県	SP26	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
117	岐阜県	SP03	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
118	岐阜県	SP26	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
119	岐阜県	SP13	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
120	岐阜県	SP08	土壠筋	直	2.5YR6/6	2.5YR6/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
121	岐阜県	SD01	土壠筋	直	2.5YR7/3	2.5YR7/3	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
122	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR5/8	2.5YR5/8	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
123	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR6/6	2.5YR6/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
124	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR5/8	2.5YR5/8	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
125	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
126	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR6/3	2.5YR6/3	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
127	岐阜県	SD02	土壠筋	直	2.5YR6/8	2.5YR6/8	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
128	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR7/2	2.5YR7/2	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
129	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
130	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR6/8	2.5YR6/8	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
131	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
132	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6
133	岐阜県	SD02	須磨器	直	2.5YR7/6	2.5YR7/6	粗・少	中・並	細・少	12.6	3.6	7.6

土器調査表 (6)

番号	区段 番号	調査区 遺跡名	位置	埋深	種類	外観	色調	内面	石英 漂白粒 角閃石 斜長石 輝石 透明白	陶片 角閃石 漂白粒 斜長石 輝石 透明白	形状	断面 (cm)	高さ (cm)	底面 (cm)	法蓋 その性 (cm)	調査・拾法		保存率	備考
																外観	内面		
134	V.K	SD002			須恵器	杯	N5灰	N5灰	中・少					7.1		圓盤付 底部1/8	底部1/8		
135	V.K	SD002			須恵器	杯	N6灰	N6灰	粗・量					7.2		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
136	V.K	SD002			須恵器	杯	N6灰	N7灰白	中・量	粗・量				7.0		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
137	V.K	SD002			土器質 土器	甕	2SY6/8 2SY6/2	5SY6/6 5SY6/2	中・量	粗				16.4		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
138	V.K	SD002			土器質 土器	甕	10SY5/6 10SY5/2	2SY5/6 2SY5/2	中・量	粗	中・量			7.5		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
139	V.K	SD002			土器質 土器	土罐	N6灰	N7灰白	中・量	粗	少			7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
140	V.K	SD002			瓦	平瓦	N6灰	SY6/6	中・多					7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
141	V.K	SD003			土器質 土器	土罐	SY6/6	SY6/6	中・多					7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
142	V.K	SD004			土器質 土器	甕	2SY6/8 2SY6/2	10SY3/1	中・少	粗	中・少			7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
143	V.K	SD004			土器質 土器	羽皿	SY4/6 赤堀	5SY6/4 5SY6/2	粗	量	粗・少	量		7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
144	V.K	SD004			土器質 土器	羽皿	SYP2/6 SY2/2	SYP2/6 SY2/2	中・多	中・少				7.7		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
145	V.K	SD004			須恵器	直	2SY7/4 2SY7/1	2SY7/4 2SY7/1	中・少		粗・少			15.5		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
146	V.K	SD005			黒色 土器	甕	5TY6/6 5TY6/2	N5灰	中・多					8.5		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
147	V.K	SD47			土器質 土器	直	2SY6/8 2SY6/2	5SY6/8 5SY6/2	粗	量	中・少			20.9		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
148	V.K	SD47			土器質 土器	甕	10Y3/1 10Y3/2	5Y6/6 5Y6/2	中・少	粗	中・少			8.1		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
149	V.K	SD47			土器質 土器	甕	2SY6/8 2SY6/2	5Y6/6 5Y6/2	粗	量	粗・少			11.5		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
150	V.K	SD47			黒色 土器	甕	10Y7/4 10Y7/2	N3/6 N3/6	中・少	粗	少			17.8		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
151	V.K	SD47			須恵器	直	N7灰白	N7灰白	中・少					13.6	1.7	10.2	圓盤付 底部2/8	底部2/8	
152	V.K	SD47			須恵器	直	N7灰白	N7灰白	中・少					17.5	1.8	14.0	圓盤付 底部2/8	底部2/8	
153	V.K	SD47			須恵器	直	5P95/1 5P95/2	5P95/1 5P95/2	中・少	粗	少			8.0		圓盤付 底部2/8	底部2/8		
154	V.K	SD47			須恵器	直	5P94/1 5P94/2	5P94/1 5P94/2	中・少					16.9		圓盤付 底部2/8	底部2/8		

土器觀察表(7)

番号	団面 面番号	調査区	遺物名	層位	種類	質種	色調			内面 (cm)	口溝 (cm)	厚さ (cm)	測量・計測		保存率	備考	
							外面	内面	裏面				測量	計測			
155	VIZ	SD447	須恵器		須恵器	壺	N8/灰白	N7/灰白	N6/灰	中・多		8.1	口縁 底部	口縁付	口縁部 壺		
156	VIZ	SD447	須恵器		須恵器	杯	N6/灰	N7/灰白	N7/灰白	底・少			回転付	回転付	底部	底部	
157	VIZ	SD447	須恵器		須恵器	杯	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・並		8.0	測量付 底部	回転付 底部	底部	底部	
158	VIZ	SD447	須恵器		須恵器	杯	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・少		8.0	測量付 底部	回転付 底部	底部	底部	
159	26	VIZ	SD447	須恵器	須恵器	杯	10Y44/1 褐色	N8/灰白	N8/灰白	中・並		13.2	3.5	9.0	回転付	回転付	口縁部 壺
160	VIZ	SD447	須恵器		須恵器	杯	N8/灰	N8/灰	N8/灰	中・少		10.8	回転付	回転付	底部	底部	
161	VIZ	SD447	土師器		土師器	壺	5YR5/6 灰	5YR5/6 灰	5YR5/6 灰	中・多			回転付	回転付	口縁部 壺	口縁部 壺	
162	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	5YR5/4 灰	5YR5/4 灰	5YR5/4 灰	中・少		14.4		回転付	回転付	口縁部 壺	
163	VIZ	SK01	土師器		土師器	壺	23YR6/8 青	23YR6/8 青	23YR6/8 青	中・少			5.7	回転付 底部	回転付 底部	底部	底部
164	VIZ	SK01	土師器		土師器	壺	23YR7/8 青	23YR7/8 青	23YR7/8 青	中・少			8.8	7.9 回転付	7.9 回転付	底部	底部
165	VIZ	SK01	土師器		土師器	壺	23YR6/8 青	23YR6/8 青	23YR6/8 青	中・並				7.7 (回転付)	7.7 (回転付)	底部	底部
166	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	N8/灰	N8/灰	N8/灰	中・並				回転付	回転付	口縁部 壺	
167	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・並				回転付	回転付	口縁部 壺	
168	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	5YR3/1 青	5YR3/1 青	5YR3/1 青	中・少				回転付	回転付	底部	底部
169	VIZ	Sa01	須恵器		須恵器	杯	N7/灰白	N6/灰	N6/灰	中・少				回転付	回転付	底部	底部
170	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・少				回転付	回転付	底部	底部
171	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	杯	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・少				回転付	回転付	底部	底部
172	VIZ	SK01	土師器		土師器	壺	73YR5/2 灰	51YR7/1 青	51YR7/1 青	中・並				回転付	回転付	底部	底部
173	VIZ	SK01	須恵器		須恵器	壺	N3/青灰	N3/青灰	N3/青灰	中・少				回転付	回転付	口縁部 壺	
174	VIZ	SK02	土師器		土師器	壺	5YR7/4 灰	5YR7/4 灰	5YR7/4 灰	中・多				7.9 回転付	7.9 回転付	底部	底部
175	VIZ	SK02	土師器		土師器	壺	23YR6/8 青	23YR6/8 青	23YR6/8 青	中・並				回転付	回転付	底部	底部
176	VIZ	SK02	黒色 土器		黒色 土器	壺	73YR6/6 青	73YR6/6 青	73YR6/6 青	中・少				回転付 (少)	回転付 (少)	口縁部 壺	

土器觀察表(8)

番号	區域 番号	測定区 番号	測定名	層位	種類	各塊	外觀	色調	内觀	石英 長石	黑鐵 黃鐵	肉內石	鑿孔	砂粒	「U」進 (cm)	厚度 (cm)	法量	その類 (cm)	底面	一調整、方法		残存率	備考		
																				外因	内面				
177	VII	SK02		黑色 土器	燒	SYR7/6 僧	N2 黑									7.6		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8			
178	VII	SK02		黑色 土器	燒	2573/1 黑燒	N2 黑	細・多 孔	細・少							9.3		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	1.8			
179	VII	SK02		黑色 土器	燒	1078/3 燒青白	N2 黑	中・少	細・多							6.4		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.6			
180	26	VII	SK02	黑色 土器	燒	SYR7/6 僧	N2 黑	中・少	細・多							7.4		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
181	26	VII	SK02	黑色 土器	燒	N4/灰 灰白	N7/灰白	細・少	中・少							11.4		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	3.8			
182	VII	SK02		黑色 土器	燒	2577/1 灰白	N7/灰白	細・少	粗・並							7.0		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
183	VII	SK02		黑色 土器	燒	N6/灰	N6/灰	中・並								10.4		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
184	VII	SK02		黑色 土器	燒	5P93/1 燒青白	N6/灰	中・並								12.0		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
185	VII	SK02		土質 土器	燒	2AY85/6 燒青白	7SY85/2 燒	中・多								Q/F		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.4			
186	VII	SK02		土質器	燒	5YR6/6 僧	7SY85/2 燒	中・少	中・並							12.8 (3.6)		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8			
187	VII	SK02		土質器	燒	5YR6/6 僧	7SY85/6 僧	中・少	中・少							6.6		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
188	VII	SK02		土質器	燒	23Y86/6 燒	5Y6/3 燒	細・少	中・少							6.5		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
189	VII	SK02		土質器	燒	25Y86/8 燒	25Y86/8 燒	中・並	中・並							17.6		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
190	VII	SK02		張毛綠	燒	5P93/1 燒青白	N3/灰白	中・並								12.2		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
191	VII	SK02		土質質 土器	燒	7SY86/6 燒 にぶい7 燒	25Y86/6 燒	中・多	細・少							M/H + P		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8			
192	VII	SK02		土質質 土器	燒	10Y6/8 僧	5Y34/6 燒	中・並	細・多	中・少						30.8		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8			
193	VII	SK02		黑色 土器	燒	10Y87/4 燒	N2 黑	細・差								15.0		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8			
194	VII	SK02		張毛綠	燒	N8/灰白	N7/灰白	中・並																	
195	VII	SK02		土質器	燒	25Y85/6 燒	25Y85/6 燒	中・少	中・並									7.8		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8	
196	VII	SK02		土質器	燒	25Y85/8 燒	25Y85/6 燒	細・少	中・並									10.8		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8	
197	VII	SK02		土質器	燒	25Y85/6 燒	25Y85/6 燒	中・少	細・少								13.9		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	0.8		
198	VII	SK02		土質器	燒	25Y85/8 燒	25Y85/8 燒	中・少	細・少								12.4		圓錐形 底付高台	圓錐形 底付高台	底部	底部	2.8		

土器観察表(9)

番号	団区	調査区	遺構名	層位	種類	各種	外觀	色・圖	内面	石灰・ 赤色灰	内石	器形	始土	時代	形状	底径	その他の (cm)	外周	調査・投注 方法	発存率	備考
199	V区	SK02	土器部	井	5YR6/6 横	75Y6/6 積	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	中・並	中・並	桶・少	15.7		6.5		圓底+少 後打	前面	底新3/8		
200	V区	SK02	土器部	井	25Y6/6 横	25Y6/6 積	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	中・並	中・並	桶・少					圓底+少 後打	前面	底新3/8		
201	V区	SK02	土器部	井	25Y6/6 横	25Y6/6 積	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	中・並	中・並	桶・少					圓底+少 後打	前面	底新3/8		
202	V区	SK02	土器部	井	25Y6/6 横	25Y6/6 積	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	中・並	中・並	桶・少					圓底+少 後打	前面	底新3/8		
203	V区	SK02	土器部	井	10Y6/3 14Y6/3	75Y2/1 黒	中・少	中・少	中・少	中・並	中・並	桶・少	14.0		(8.4)		人字打	前面	底新3/8		
204	V区	SK02	土器部	井	10Y6/3 14Y6/3	5YR1/7 横・少	5YR1/7 横・少	5YR1/7 横・少	5YR1/7 横・少	5YR1/7 横・少	5YR1/7 横・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
205	V区	SK02	土器部	井	N2/黒	N2/黒	N2/黒	N2/黒	N2/黒	N2/黒	N2/黒	桶・並					人字打	前面	底新3/8		
206	V区	SK02	須恵器	杯	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
207	V区	SK02	須恵器	杯	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	N8/灰白	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
208	V区	SK02	須恵器	杯	N4/灰	N4/灰	N4/灰	N4/灰	N4/灰	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
209	V区	SK02	土器質	要	2.5YR5/6	2.5YR5/6	2.5YR5/6	2.5YR5/6	2.5YR5/6	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
210	V区	SK02	土器質	要	10Y6/6 黄	10Y6/6 黄	10Y6/6 黄	10Y6/6 黄	10Y6/6 黄	中・多	中・多	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
211	V区	SK02	土器質	要	25Y5/6 明赤場	25Y5/6 明赤場	25Y5/6 明赤場	25Y5/6 明赤場	25Y5/6 明赤場	中・多	中・多	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
212	V区	SK03	土器部	井	SYR6/6 横	SYR6/6 横	SYR6/6 横	SYR6/6 横	SYR6/6 横	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
213	V区	SK03	土器部	井	25Y4/6 明赤場	25Y4/6 明赤場	25Y4/6 明赤場	25Y4/6 明赤場	25Y4/6 明赤場	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
214	V区	SK03	土器部	井	25Y6/6 明赤場	25Y6/6 明赤場	25Y6/6 明赤場	25Y6/6 明赤場	25Y6/6 明赤場	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
215	V区	SK03	土器部	井	2.5YR6/6 明赤場	2.5YR6/6 明赤場	2.5YR6/6 明赤場	2.5YR6/6 明赤場	2.5YR6/6 明赤場	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
216	V区	SK03	土器部	井	SYR7/6 横	SYR7/6 横	SYR7/6 横	SYR7/6 横	SYR7/6 横	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
217	V区	SK03	土器部	井	25Y6/8 横	25Y6/8 横	25Y6/8 横	25Y6/8 横	25Y6/8 横	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
218	V区	SK03	土器部	井	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	25Y6/6 横	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
219	V区	SK03	土器部	井	75Y2/1 黑	75Y2/1 黑	75Y2/1 黑	75Y2/1 黑	75Y2/1 黑	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
220	V区	SK03	土器部	井	75Y8/7/6	75Y8/7/6	75Y8/7/6	75Y8/7/6	75Y8/7/6	中・並	中・並	桶・少					人字打	前面	底新3/8		
221	V区	SK03	土器部	井	75Y7/6	75Y7/6	75Y7/6	75Y7/6	75Y7/6	中・少	中・少	桶・少					人字打	前面	底新3/8		

土器觀察表 (10)

参考 番号	調査区 番号	調査名	層位	種別	外観	色調	基盤	土石	砂礫	角砾	内石	肉眼 目	目録 番号	口座 (cm)	番号 (cm)	量 (kg)	その他の 記述 (cm)	外因 面	内面	調整 方法	残存率
222	V12	SIC03	須磨層	杯	5P35/1 等質層 層厚約1m	灰 N5/灰 N8/灰白	N4/灰 N6/灰 N8/灰白	細 粗・少	粗	少	—	—	—	110	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
223	V12	SIC03	須磨層	杯	5P35/1 等質層 層厚約1m	灰 N5/灰 N6/灰 N8/灰白	N4/灰 N6/灰 N8/灰白	細 粗・少	粗	少	—	—	—	68	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
224	V12	SIC03	須磨層	杯	2.5T7/1 灰白	灰 N5/灰 N6/灰 N8/灰白	N4/灰 N6/灰 N8/灰白	細 粗・少	粗	少	—	—	—	73	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部2/8	
225	V12	SIC03	須磨層	杯	2.5T7/1 灰白	灰 N5/灰 N6/灰 N8/灰白	N4/灰 N6/灰 N8/灰白	細 粗・少	粗	少	—	—	—	68	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部2/8	
226	V12	SIC03	須磨層	杯	N7/灰白	灰 N8/灰白	N7/灰白	細 粗・少	粗	少	—	—	—	78	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部3/8	
227	V12	SIC03	須磨層	壺	N7/灰白	N7/灰白	N7/灰白	細 粗・並	粗	少	—	—	—	—	—	—	自然接合*	自然接合*	口接合 1/8	底部4/8	
228	V12	SIC03	須磨層	壺	N15/黑	N3/暗灰 N2/灰	N3/暗灰 N2/灰	細 粗・少	粗	少	—	—	—	240	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
229	V12	SIC03	須磨層	壺	7.5B2/1 暗赤灰 N2/灰	N4/灰 N6/灰 N8/灰	N4/灰 N6/灰 N8/灰	中・多	粗	少	—	—	—	286	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
230	V12	SP03	土器質 土器	壺	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	中・並	粗	少	—	—	—	—	—	—	口接合*	口接合*	口接合 1/8	底部4/8	
231	V12	SP22	土器層	壺	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	7.5Y25/6 7.5F2/2 7.5F2/2	中・並	粗	少	—	—	—	134	32	76	面接合*	面接合*	底部3/8	底部外面に擦付着	
232	V12	SP22	土器層	壺	2.5Y16/8 2.5Y16/8 2.5Y16/8	2.5Y16/8 2.5Y16/8 2.5Y16/8	2.5Y16/8 2.5Y16/8 2.5Y16/8	中・並	粗	少	—	—	—	70	—	—	面接合*	面接合*	底部3/8	底部4/8	
233	V12	SP25	須磨層	杯	N4/灰 N6/灰 N8/灰	N4/灰 N6/灰 N8/灰	N4/灰 N6/灰 N8/灰	細 粗・並	粗	少	—	—	—	126	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
234	V12	SP28	土器層	杯	2.5T7/8 壺	2.5T7/8 壺	2.5T7/8 壺	細 粗・並	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
235	V12	SP31	須磨層	杯	N4/灰 N8/灰	N7/灰白	N7/灰白	粗	少	粗	少	—	—	—	30	—	—	面接合*	面接合*	底部3/8	底部4/8
237	V12	SAU- SP02	須磨層	壺	2.5T8/6 6	2.5Y6/6 6	2.5Y6/6 6	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
238	V12	SB01- SP25	土器層	杯	7.5T8/6 6	7.5T8/6 6	7.5T8/6 6	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
239	V12	SB01- SP42	土器層	杯	2.5T8/8 壺	2.5T8/8 壺	2.5T8/8 壺	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
240	V12	SB02- SP35	黒色土层	壺	7.5T8/6 6	7.5T8/6 6	7.5T8/6 6	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
241	V12	SB02- SP35	黒色土层	壺	10T8/3 灰白	10T8/3 灰白	10T8/3 灰白	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
242	V12	SP14	黒色土层	壺	10T8/2 灰白	10T8/2 灰白	10T8/2 灰白	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	
243	V12	SP02- SP45	土器層	壺	10T8/2 灰白	10T8/2 灰白	10T8/2 灰白	粗 少	粗	少	—	—	—	—	—	—	面接合*	面接合*	口接合 1/8	底部4/8	

土器観察表(1)

番号	測定区 番号	測定名	層位	種類	特徴	土壤			口径 (cm)	底面 (cm)	壁面 (cm)	測量・技法		保存年	備考
						外層	内層	石基・赤色粒・角砾石				その他の 寸法(cm)			
244	Ⅷ区	SP02		須恵器	杯	5Y8/1灰白 灰白	5Y7/2 灰白		中・少			7.0	圓底付 底面切り	7.0	底盤が壊れ る
245	Ⅷ区	SP23		須恵器	杯	25Y6/6 灰白	5Y6/3 灰白						圓底付 底面切り	7.0	底盤が壊れ る
246	Ⅷ区	SP03		土器器	杯	7.5Y8/4 灰白	7.5Y7/4 灰白	中・亞 腹質					圓底付 底面切り	7.0	底盤が壊れ る
247	Ⅷ区	SP05		土器器	杯	25Y7/8 灰白	25Y7/8 灰白	中・少				19.5	圓底付 底面切り	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
248	Ⅷ区	SP05		須恵器	杯	N8/灰白 灰白	N8/灰白 灰白		福・少				圓底付 底面切り	8.0	底盤が壊れ る
249	Ⅷ区	SP17		須恵器	蓋	5Y4/1 青灰	5Y4/1 青灰		中・少	8.3	19.65	8.7	圓底付 底面切 り底付	8.0	底盤が壊れ る
250	Ⅷ区	SP27		土器器	杯	5Y26/8 燒	5Y26/8 燒	5Y26/8 燒	中・少	13.0	34	7.4	圓底付 底面切 り底付	6.8	口縁部 底盤が壊れ る
251	Ⅷ区	SP78		須恵器	蓋	7.5Y3/3 暗褐色	7.5Y3/3 暗褐色		福・少	8.3	19.65	9.4	圓底付 底面切 り底付	8.0	底盤が壊れ る
252	Ⅷ区	SP02		須恵器	杯	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白		福・少				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
253	Ⅷ区	SP04		須恵器	杯	25Y4/4 灰白	25Y4/4 灰白	25Y4/4 灰白	道・無			7.0	圓底付 底面小切り	7.0	外周に火葬あり 底盤が壊れ る
255	Ⅷ区	SP11		土器器	杯	2.5Y27/6 青白	2.5Y27/6 青白	2.5Y27/6 青白	中・少			7.2	圓底付 底面切 り底付	7.0	全体的に薄 い底盤が壊 れ
256	Ⅷ区	SP02		須恵器	杯	N6/灰 灰	N6/灰 灰		福・少				圓底付 底面切 り底付	7.0	底盤が壊れ る
257	Ⅷ区	SP02		土器器	杯	25Y16/6 青白	25Y16/6 青白	25Y16/6 青白	中・少			6.7	圓底付 底面切 り底付	7.0	底盤が壊れ る
258	Ⅷ区	SP11		土器器	杯	2.5Y17/8 明灰	2.5Y17/8 明灰	2.5Y17/8 明灰	中・少			4.8	圓底付 底面切 り底付	7.0	底盤が壊れ る
259	Ⅷ区	SP22		土器器	杯	10Y7/3 浅黄	10Y7/3 浅黄	10Y7/3 浅黄	福・無			3.0	圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
260	Ⅷ区	SP22		土器器	羽釜	25Y26/8 青白	25Y26/8 青白	25Y26/8 青白	中・少			3.0	圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
261	Ⅷ区	SP01		土器器	羽釜	5Y26/6 青白	5Y26/6 青白	5Y26/6 青白	中・少				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
262	Ⅷ区	包含層	上層 土器	須恵器	瓶	5Y7/6 灰白	5Y7/6 灰白	5Y7/6 灰白	福・無				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
263	Ⅷ区	包含層	上②層 土器	須恵器	瓶	5Y7/6 灰白	5Y7/6 灰白	5Y7/6 灰白	福・無				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
264	Ⅷ区	包含層	須恵器	土器器	杯	25Y6/8 灰白	25Y6/8 灰白	25Y6/8 灰白	中・少				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
265	Ⅷ区	包含層	須恵器	土器器	蓋	10Y4/2 灰白	10Y4/2 灰白	10Y4/2 灰白	福・無				圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
266	Ⅷ区	包含層	土器器	須恵器	蓋	2.5Y26/6 灰白	2.5Y26/6 灰白	2.5Y26/6 灰白	中・少			22.4	圓底付 底面切 り底付	7.0	口縁部 底盤が壊れ る
267	Ⅷ区	包含層	須恵器	瓦	平瓦	(四面) 5Y26/6 灰白	(四面) 5Y26/6 灰白	(四面) 5Y26/6 灰白	瓦			11.2	圓底付 底面切 り底付	7.0	全瓦が壊れ る

土器調査表(112)

番号	区画番号	遺構名	部位	地殻	器種	外観	内面	色調	石英 長石	赤色粒 N3/暗灰	側内石 N3/暗灰	鉄内石 N3/暗灰	形状	口縁 (cm)	身高 (cm)	底径 (cm)	法量	測量・検定		保存状況			
																		内面	外縁	内縁			
268	Ⅷ区	包含層	Ⅱ②層	土質質	網紋	10YR7/3 [1.6% 壁質]												7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む	
269	Ⅷ区	包含層	Ⅱ②層	土質質	土種質	N3/暗灰													7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む
270	Ⅷ区	包含層	Ⅰ②層	土質質	土種質	7.5Y4/1灰 [1.6% 壁質]	2.5Y5/5.6 [1.6% 壁質]	緑	相・並									7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む	
279	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	N6/灰												7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む	
280	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	10Y5/8灰 [1.6% 壁質]	10Y5/8灰 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
285	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	23Y3/6 重	23Y3/6 重	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
286	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	10Y4/1灰 [1.6% 壁質]	10Y4/1灰 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
287	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	5Y7/5.4 [1.6% 壁質]	5Y7/5.4 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
288	Ⅷ区	SD14	原生層	土質質	土種質	5Y7/5.6 [1.6% 壁質]	5Y7/5.6 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
291	Ⅷ区	SD15	原生層	土質質	土種質	5Y4/3.9 陶質灰 [1.6% 壁質]	5Y4/3.9 陶質灰 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
292	Ⅷ区	SD15	原生層	土質質	土種質	23Y3/6 重 [1.6% 壁質]	23Y3/6 重 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
297	Ⅷ区	SR04	原生層	土質質	土種質	N5/灰	N5/灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
298	Ⅷ区	SR01	原生層	土質質	土種質	5Y7/5.6 [1.6% 壁質]	5Y7/5.6 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
299	Ⅷ区	SR01	原生層	土質質	土種質	7.5Y8/1 灰 [1.6% 壁質]	7.5Y8/1 灰 [1.6% 壁質]	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
300	Ⅷ区	SR01	原生層	土質質	土種質	N6/灰	N6/灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
301	Ⅷ区	SR01	原生層	土質質	土種質	N8/灰白	N8/灰白	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
302	Ⅷ区	SR01	原生層	土質質	土種質	N6/灰	N6/灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
306	Ⅷ区	SR09	原生層	土質質	土種質	10Y5/8.2 灰	10Y5/8.2 灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
306	Ⅷ区	包含層	Ⅰ②層	土質質	土種質	5Y7/6.8 灰	5Y7/6.8 灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		
307	Ⅷ区	包含層	包含層	土質質	土種質	5Y7/3 灰	5Y7/3 灰	緑	相・並								7.7	1.35	1.35	4.8	薄底が運む		

石器觀察表(1)

番号	図版 番号	調査区	遺跡名	層位	特徴	法面		材質	備考
						長さ(cm)	幅(cm)		
16	III・Ⅳ区	SD18			打製石器	16.5	3.9	サスカイト	凹溝式・風化が進む
27	II・Ⅲ区	SD13		打製石器	54.0	28.0	253.85	安山岩	
37	II・Ⅲ区		包含層	Ⅰ⑤層	叩石	10.0	3.9	結晶片岩	
38	II・Ⅲ区		包含層	Ⅱ⑤層	砾石	9.0	5.0	26.0	128.6 砂岩
40	24	II区	包含層	Ⅰ②層	ナイフ形石器	39.0	16.0	11.5	サスカイト
41		II区	包含層	Ⅱ②層	剥片	43.0	21.0	6.0	サスカイト
42		II区	包含層	Ⅱ①・②層	石核	76.0	41.0	24.0	64.46 サスカイト
43		II区	包含層	上面構造に相当	石核	76.5	50.0	35.0	80.82 サスカイト
44		II区	包含層	上面構造	石核	54.5	42.0	16.5	35.51 サスカイト
45		II区	包含層	Ⅲ③層	石核	79.0	6.0	17.5	96.24 サスカイト
46		II区	包含層	Ⅲ④層	石核	173.5	11.0	5.6	116.17 サスカイト
48		III区	包含層	上面構造	塊状石器のP片	80.0	23.0	20.0	35.89 サスカイト
62		IV・V区	SD45		打製石器	20.0	23.0	4.5	2.63 サスカイト
63	25	IV・V区	SD45・SD46		ナイフ形石器	46.0	20.0	10.0	13.44 サスカイト
70	25	IV・V区	SD47		角座状石器	59.0	10.0	14.0	14.10 サスカイト
80		IV・V区	SD24		不明	113.0	4.0	21.0	105.42 サスカイト
95		IV・V区	包含層	Ⅱ⑦・Ⅲ⑥層	打製石器	22.0	17.0	3.0	12.1 サスカイト
96	25	IV・V区	包含層	上面構造(北半)	ナイフ形石器	31.0	14.0	6.5	3.13 サスカイト
97		IV・V区	包含層	Ⅲ①層	剥片	65.0	20.0	9.0	12.05 サスカイト
98		IV・V区	包含層	Ⅲ③層	塊状石片	94.0	36.0	25.0	78.44 サスカイト
236	27	V区	SP22		石核	101.0	7.0	20.0	131.40 サスカイト
271		V区	包含層	西側切り	翼狀片岩	35.0	32.0	10.0	3.26 サスカイト
272		V区	包含層	工具層	翼狀片岩	134.5	58.0	20.0	160.18 頁岩(火成岩岩)
273		V区	包含層	工具層	打製石器	91.0	7.0	28.0	109.42 サスカイト
274		V区	包含層	Ⅲ③層	翼狀片岩	42.5	28.0	9.5	111.18 サスカイト
275		V区	包含層	Ⅲ②層	スクレイバー	45.0	26.8	8.5	12.33 サスカイト
276		V区	包含層	Ⅲ③層	剥片	81.0	6.0	36.0	86.18 サスカイト
277		V区	包含層	Ⅲ③層	剥片	42.5	3.85	6.5	9.90 サスカイト
278		V区	包含層	Ⅲ③層	打製石器	71.0	48.0	13.5	57.04 サスカイト
281		V区	SD14		打製石器	50.5	6.0	8.0	44.12 サスカイト
282		V区	SD14		打製石器	25.0	26.0	3.0	0.93 サスカイト
283		V区	SD14		打製石器	48.0	15.0	6.5	10.87 サスカイト
284		V区	SD14		打製石器	39.5	7.0	7.0	14.89 サスカイト
289		V区	SD14		剥片	64.0	8.0	26.0	153.93 サスカイト
290		V区	SD14		剥片	45.5	8.95	11.5	45.37 サスカイト
293		V区	SD15		スクレイバー	65.0	7.0	10.0	55.82 サスカイト
294		V区	SD15		打製石器	50.0	28.0	5.5	18.02 サスカイト
295		V区	SD15		スクレイバー	54.0	50.0	5.5	18.85 サスカイト
296		V区	SD15		翼狀片岩	78.0	49.0	13.0	56.71 サスカイト
303		V区	SD15		不明	108.0	38.0	23.0	155.09 サスカイト
					スクレイバー	51.0	8.0	15.0	59.42 サスカイト

石器観察表(2)

番号	区分	調査区	遺物名	場所	器種	法量	材質	備考
304	Ⅶ区	S201	四合層	板状片	長さ(cm) 幅(cm) 厚さ(cm)	280.0 285.0 47.0	3.660	サスカイト 全体に墨で記入あり
310	Ⅷ区	包含層	打製石器	打製石器	53.0 43.0 9.0	28.62	サスカイト 極めて薄い	
311	Ⅷ区	包含層	削形	集形石器	53.0 50.0 17.0	61.47	サスカイト 片面は2面刃が磨耗している	
312	Ⅷ区	包含層	削形	打製石斧	101.0 61.5 10.8	142.02	サスカイト 片面は2面刃が磨耗している	
313	Ⅷ区	包含層	削形	打製石斧	99.0 45.0 28.0	133.45	サスカイト 使用による磨耗があり	
314	Ⅷ区	包含層	削形	スクレイバー	36.5 9.0 12.5	47.82	サスカイト 使用による磨耗があり	

金属製品観察表

番号	区分	調査区	遺物名	場所	器種	法量	材質	備考
39	Ⅱ区	Ⅲ区	包含層	工具	長さ(cm) (全) 21.0	幅(cm) (全) 1.0	2.63	鋼 溶化元生
47	Ⅱ区	Ⅲ区	包含層	工具	長さ(cm) (全) 24.0	幅(cm) (全) 1.5	3.03	鋼 溶化元生
74	Ⅳ・V区	SK29	包含層	骨頭製品	65.0	50.5	3.1	骨頭
94	Ⅳ・V区	包含層	上面研磨	刀子	65.0	11.0	6.0	骨頭
254	VI・V区	SD09	包含層	鉗子	45.2	6.5	0.9	鉄
298	W区	包含層	工具	刀子	65.0	11.0	6.0	鉄
399	W区	包含層	工具	鉗子	28.0	4.0	0.5	鉄

写 真 図 版

図版 1 東坂元三ノ池遺跡



(1) 遺跡全景（東より）



(2) 遺跡全景（南より）

図版2 東坂元三ノ池遺跡



(3) I区全景(南より)



(4) I区SK04 土層断面(西より)



(5) I区SX03 土層断面(西より)



(6) II・III区全景(真上より)

図版3 東坂元三ノ池遺跡



(7) II・III区 全景(北より)



(8) II・III区 全景(南より)

図版 4 東坂元三ノ池遺跡



(9) II・III区 東部全景（南より）



(10) II・III区 磚群棲出状況（南より）

図版 5 東坂元三ノ池遺跡



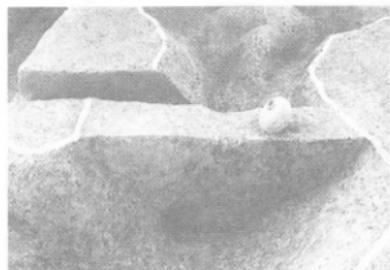
(11) II・III区 東部全景(南より)



(12) II区 SD05 土層断面(西より)



(13) II区 SD08 a-a' 土層断面(南より)

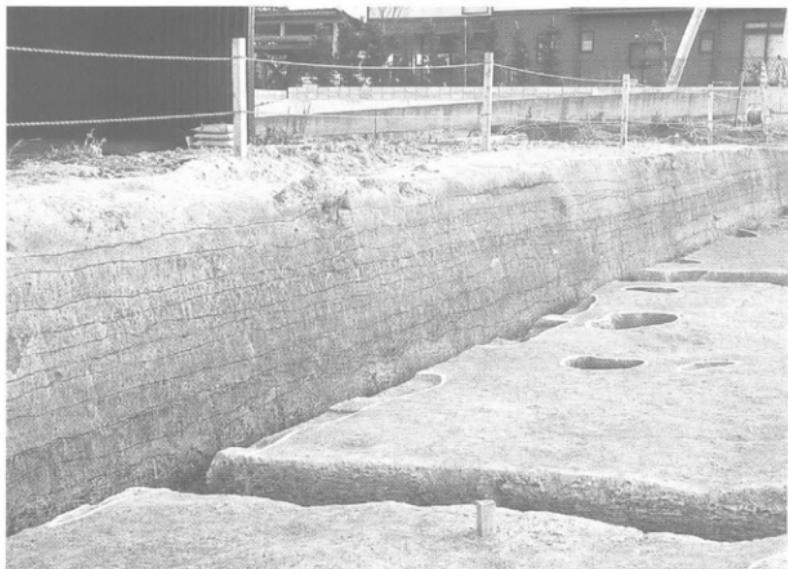


(14) II区 SD10 土層断面(東より)



(15) II区 SD10・16 土層断面(北より)

図版 6 東坂元三ノ池遺跡



(16) II区 東壁土層断面（北西より）



(17) II区 東壁土層断面（西より）

図版 7 東坂元三ノ池遺跡

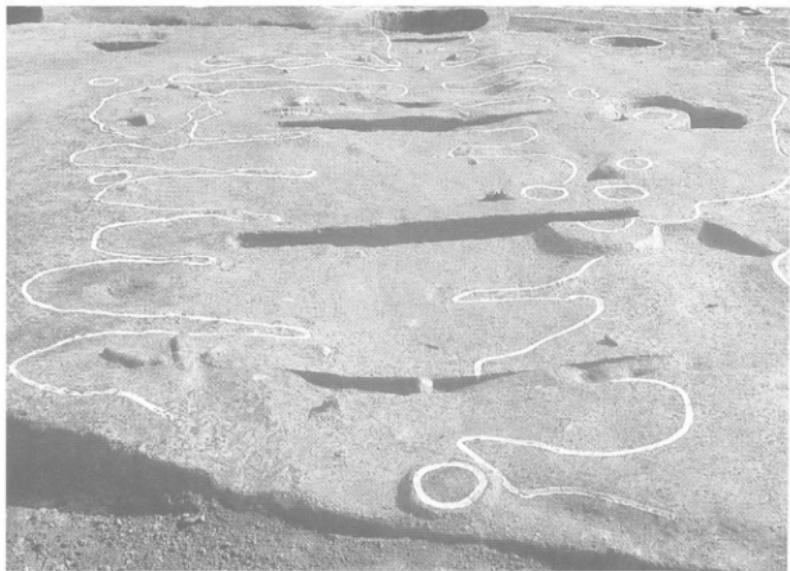


(18) IV・V区 全景 (北より)



(19) IV・V区 SBO1 全景 (北より)

図版 8 東坂元三ノ池遺跡



(20) IV・V区 波板状圧痕検出状況（北より）



(21) IV・V区 波板状圧痕検出状況（南より）

図版9 東坂元三ノ池遺跡

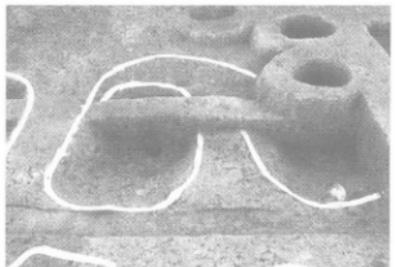


(22) IV・V区 波板状圧痕全景（北西より）



(23) IV・V区 波板状圧痕掘削状況（北より）

図版 10 東坂元三ノ池遺跡



(24) IV・V区 SK25・26 土層断面（東より）



(25) IV・V区 SK30 土層断面（北より）

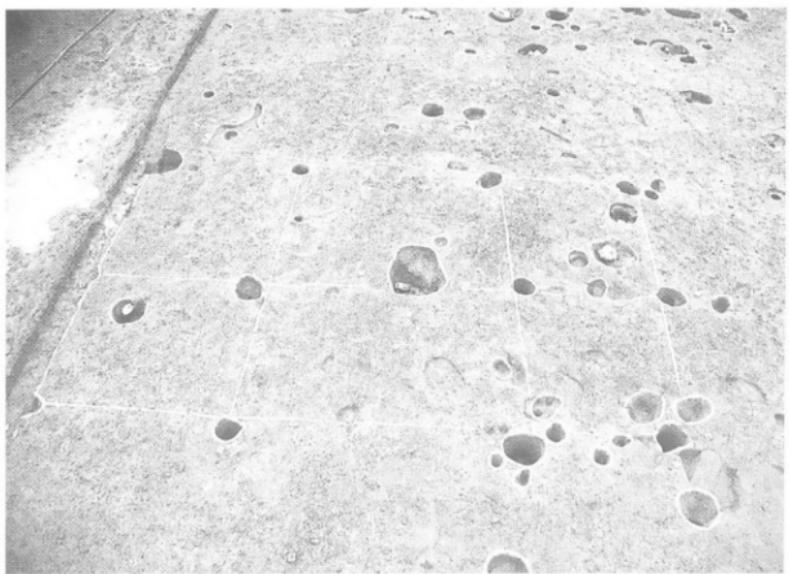


(26) VI区 全景（南より）

図版 11 東坂元三ノ池遺跡



(27) VI区 全景 (北より)



(28) VI区 SB03 全景 (北より)

図版 12 東坂元三ノ池遺跡



(29) VI区 SB04 全景（南より）

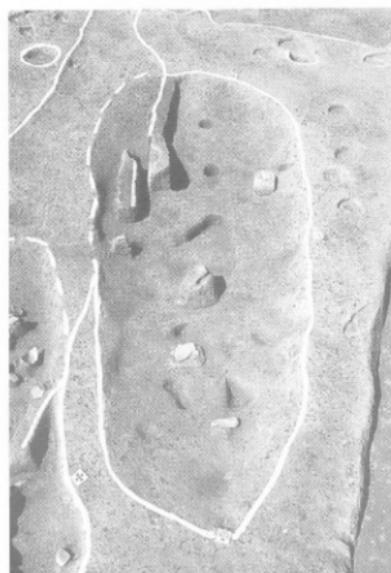


(30) VI区 北東部全景（北より）

図版 13 東坂元三ノ池遺跡



(31) VI区 SK01～03 遺物出土状況（南より）

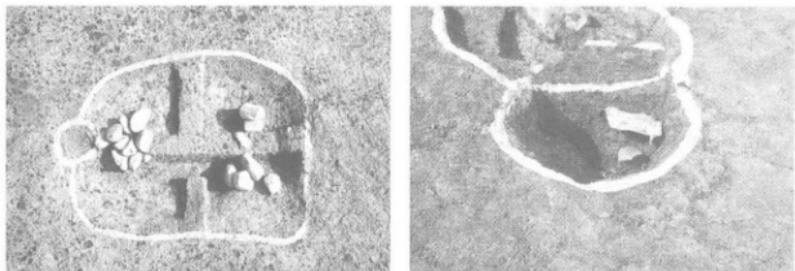


(32) VI区 SK01 遺物出土状況（南より）



(33) VI区 SK02 遺物出土状況（南より）

図版 14 東坂元三ノ池遺跡



(34) VI区 SK04 種出土状況（北より）

(35) VI区 SP22 遺物出土状況（南より）



(36) VII区 全景（南より）

図版 15 東坂元三ノ池遺跡



(37) VII区 全景（東より）



(38) VII区 SB06、SK02、SP17・78 検出状況（南より）

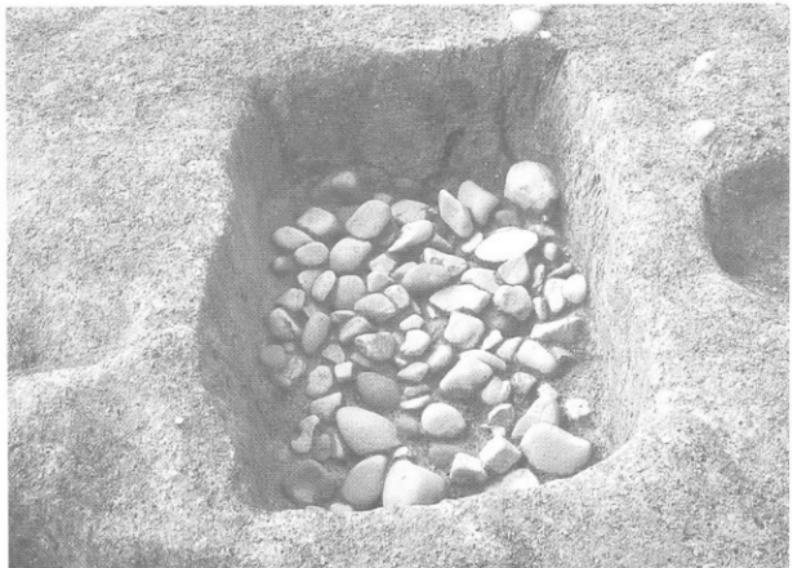
図版 16 東坂元三ノ池遺跡



(39) VII区 SK02 土層断面（南より）



(40) VII区 SK02 土層断面（東より）



(41) VII区 SK02 磚床検出状況（東より）



(42) VII区 SK02 磚床断ち割り状況（東より）